

## 三重大学国際交流センター

## 紀 要

## 第14号 (留学生センター紀要より通巻第21号)

## 目 次

## 研究論文

政教社系の日本論・中国論 ..... 藤 田 昌 志 ( 1 - 14)

## 研究ノート

橋川文三 研究ノート 一橋川文三 (1985, 1986) 『橋川文三著作集』

第1巻―第8巻を中心として― ..... 藤 田 昌 志 ( 15 - 27)

## 書 評

中島岳志著 (2017) 『アジア主義―西郷隆盛から石原莞爾へ―』潮文庫

..... 藤 田 昌 志 ( 29 - 35)

## 実践報告

外国人留学生を対象とした三重県内インターンシップ実践：

留学生を対象としたアンケート結果から ..... 正路 真一・福岡 昌子・松岡知津子 ( 37 - 51)

企業を対象とした留学生インターンシップ事業の実践：

受け入れ企業へのアンケート結果から ..... 正路 真一・福岡 昌子・松岡知津子 ( 53 - 65)

「グローバル人材育成」における産学官連携の可能性

～出口治明氏 (立命館アジア太平洋大学学長) を迎えて～ ..... 栗 田 聡 子 ( 67 - 83)

## 調査報告

外国人留学生が日本で働くために必要なもの：三重県で働く外国人就業者への取材から

..... 正路 真一・松岡知津子 ( 85 - 99)

鈴鹿関と古代三関 ..... ブライアン ジェームズ マホニー (101-118)

三重大学国際交流センター紀要 [投稿規定] ..... (119)

三重大学国際交流センター紀要 [執筆要領] ..... (121)

執筆者一覧 ..... (123)

編集後記

## 三重大学国際交流センター

# 政教社系の日本論・中国論

藤 田 昌 志

政教社系の日本論・中国論

FUJITA Masashi

## 【摘要】

明治政府采取现实主义的外交方針，在野人士采取理想主义的外交方針。政教社系的人们从其理念上来看也属于在野人士。明治政府站在现实主义的、不拘泥抽象概念和道德意识的、没有固定观念的立场上专心致力于条约的修改。相反，政教社系的人们则是站在理想主义的立场上努力修改条约。我们通过考察政教社系人们的日本论和中国论可以看清他们理想主义的思想。

キーワード：政教社 現実主義的 理想主義的 内藤湖南

## 1 序

政教社は鹿鳴館時代の欧化政策に反発して結成された国粹主義を標榜する団体である。しかし、昭和初期の国粹主義とは異なり、独自の開かれた国粹主義を標榜した。明治期は日本が関税自主権の回復、治外法権の撤廃を実現することによって「文明」世界の中で確かな地位を確立することが悲願の時代であった。欧化政策は欧米列強から「文明」国として認めもらうための方策であった。しかし、それは「日本的」な伝統を重視する立場からは容認しがたいものでもあった。国権と民権が一体となって主張され得たのは日清戦争、三国干渉までであるが、本稿では、政教社系がその時代状況の進展（官僚支配の伸展を含む）の中でどのような位置を占め、日本論・中国論をどのように展開したかを明らかにすることによって、日本・中国についての明治の状況を考察してみたいと思う。

## 2 政教社系について

政教社は雑誌『日本人』の結成を期して 1888 年（明治 21）に結成された同人組織である。結成当初は志賀重昂<sup>しげたか</sup>・三宅雪嶺・杉浦重剛といった人々がメンバーに名を連ねていた。

政教社設立の直接的契機は欧化主義的風潮に対する反発であった。イギリス人コンドル

の設計になるレンガ造り二階建ての洋館鹿鳴館（現在の千代田区内幸町一丁目にあった。）は1884年（明治17）7月以来、毎週月曜日にダンスの練習会が開かれた。やがて西洋ファッションが浸透し、大規模な舞踏会が11月3日に開催される。井上馨<sup>かおる</sup>が条約改正にあたって企てた鹿鳴館のパーティーはこの年から1887年（明治20）の井上辞職まで行われた。それはいわゆる鹿鳴館時代を現出したが、あまりに無自覚な欧化・宴会外交には非難も集中した<sup>(1)</sup>。三宅雪嶺は欧化主義的風潮への反発について次のように述べている。「一面は鹿鳴館に高官が戯れ、醜声の外に漏れたのに刺激され、一面は政府が保安条例を執行し、枯れ尾花に驚く狼狽さ加減に動かされ、余りだらしなくて仕方なく何とかせねばならぬ」<sup>(2)</sup>として立ちあがり、「政府の外柔内硬<sup>ママ</sup>に反抗」<sup>(3)</sup>した。政治上における動機が政教社結成の第一の理由であったと言える。

政教社設立の第二の動機は森有礼文部大臣による大学への干渉的姿勢に対する反発であった。1872年（明治5）8月に発布された学制は「其の身を脩め、智を開き、才芸を長ずるは学あらざれば能はず<sup>あた</sup>」と学の意味を個人の立身出世や家業の繁栄に求めた<sup>(4)</sup>。しかし、1885年（明治18）、森有礼が文部大臣に就任すると、翌1885年3月には帝国大学令を公布し、東京大学を帝国大学に改組し、4月には師範学校令・中学校令・小学校令等の学校令を公布した。この時の学校令で教育と学問の分離を図り、教育の総本山を高等師範学校とし、学問の総本山を帝国大学としたが、その帝国大学として「夫れ然り諸学校を通し学政上に於ては生徒其の人の為にするに非ずして、国家の為にすることを始終記憶せざるべからず」<sup>(5)</sup>との国家主義の構想のもとに組み入れられていた<sup>(6)</sup>。天皇崇拜の国家主義教育政策の推進は伊藤首相によって強力に進められている欧化の政策とワンセットのものとして政教社結成メンバーには捉えられた。彼らの決起は「これ大学の極小部分なりしと雖も、新たに社会に顔出し、伊藤的勢力に対抗せしもの」<sup>(7)</sup>との意味を持つものであった。

政教社は二つのグループ、人脈によって結成された。哲学館（東洋大学の前身。1887年井上円了によって創設。）系関係者と東京英語学校（現日本学園の前身。1885年創設。）系関係者の二つである。哲学館系の人脈は井上円了を中心とするもので、井上は1885年に東京大学文学部哲学科を卒業し、87年9月に哲学館を創設した。そこへ三宅雪嶺や棚橋一郎が講師となってやって来て、更に他の者たとえば文学撰科出身の加賀秀一が加わり一グループを形成した。いずれも東京大学文学部の同窓生である。

東京英語学校系は杉浦重剛が中心であり、東京英語学校は第一高等中学校（後の第一高等学校）などの官立上級学校に進学するための予備校として1885年（明治18）、杉浦重剛、宮崎道正等によって設立された。1887年（明治20）になると宮崎の札幌農学校教授時代の教え子であった志賀重昂等が教師となって加わり東大と札幌農学校出身の子弟が一グルー

ブを形成した。

両グループからなる政教社メンバーの特色の一つとして「当時としては最新最高の官学の学問を修得した知識青年たち」<sup>(8)</sup>であることが挙げられる。東京大学出身の政教社「同志」はすべて文学部卒業である。明治10年から18年の「東京大学」時代の文学部全卒業生47名のうち、実に37名までが政治学または理財学（現在の法学部政治コースに該当する）を主専攻とし、哲学または和漢文学を専修したのはわずか5名にすぎないが、その5名のうち哲学を専修した三宅と井上、和漢文学を専修した棚橋の3人が政教社の設立に参画することになったのは単なる偶然ではない。彼らは「政治エリートを養成する政策科学の中であって、むしろ内省の学に関心が向いた希少価値だった」<sup>(9)</sup>と言えよう。換言すれば、政教社メンバーには官学のエリートコースに身を置いていたにもかかわらず、そこよりはみ出た者、あるいは反発して批判者に転じ、在野に身を処するようになった経歴を共有する者が多い<sup>(10)</sup>のである。

政教社は「国粹保存」を標榜したが、志賀重昂は「国粹」とはNationalityを意味するとしている。『日本人』第2号の「日本人が懐抱するところの旨義を告白す」で志賀は大和民族には「一種特殊なる国粹(Nationality)」が発達しているとしている。それを「大和民族が現在未来の間に進化改良するの標準となし基本となすは、正しく是れ生物学の大原則に順適するものなり」と言う<sup>(11)</sup>。政教社には次のような特徴があった。

第一に政教社の「国粹」は昭和の狂信的国粹主義のように天皇の神聖性や万世一系性といった政治的イデオロギーとしての性格を濃厚に持つものと異なっていた。それは「日本という国土に住む民族の長い歴史を通して刻まれた生命の年輪とも言うべき包括的な——したがって単に政治的のみならず同時に地理的・経済的・文化的な——観念」<sup>(12)</sup>であった。政教社設立時の「同志」11名のうち4名が東京大学文学部の非政治的な哲学・文学を専攻していることも<sup>(13)</sup> 政治的イデオロギーの希薄性と深い関係があるであろう。

第二に政教社の国粹主義は志向として「民族の独善的、閉鎖的な自己主張に陥ることなく、むしろ世界に向かって開かれた健康なナショナリズムとしての性格を具えていたという点」(松本三之介(昭和55) p.424)にその特徴がある。西洋文明については安易な模倣を批判したが、政教社が問題にしたのは「西洋文明を取り入れるか否かではなく、実はその取り入れ方であった」<sup>(14)</sup>と言える。

雑誌『日本人』は1888年(明治21)4月3日、政教社によって発刊されたが、新聞『日本』は『東京電報』の後進として1889年(明治22)2月21日に陸羯南くがかつなんを社主、主筆(のち社主)として谷干城たてき、高橋健三、そして雑誌『日本人』の有力な後援者でもあった杉浦重剛の尽力によって創刊された<sup>(15)</sup>。

雑誌『日本人』の国粹主義と新聞『日本』の国粹主義は基本的立場では異なるところはないが、後者の方がより政治的色彩が濃厚であった。大隈重信外相が井上外相の後で条約改正交渉を進め、政府の条約改正原案が洩れた。その内容に外国人を日本の裁判所（大審院）の裁判官に任命するという、独立国にふさわしくない条項が含まれていることが判明したとき、その改正原案反対の急先鋒に立ったのが新聞『日本』であったことからそのことはうかがいしれる<sup>(16)</sup>。

政教社系の雑誌『日本人』や新聞『日本』は政府の“貴族的欧化主義、や徳富蘇峰の『国民之友』、『国民新聞』の“平民的欧化主義、と鼎立し<sup>(17)</sup>、自由民権運動衰退後の明治 20 年代に国粹主義として一つの思潮を形成し、新しい自己主張として明治の読者層（漢文を読める、政府に批判的な没落・不平等士族、地主、村役人、書生、小学校教員、僧侶、神官などの「伝統型知識人」<sup>(18)</sup>）を獲得した。新聞『日本』などは「営業的新聞」を否定して「独立新聞」を標榜し、漢字のルビなしを貫いた。（読者に一定の漢文の教養を求めたことによる。）そのため、やがて読者層は減少していくことはあったが。

### 3 政教社系の主要メンバーについて

次に、政教社系の主要メンバーである志賀重昂、三宅雪嶺、杉浦重剛、陸羯南、福本日南、長澤別天、内藤湖南について述べてみたいと思う。

志賀重昂は 1863 年（文久 3）に三河国岡崎に生まれ、1878 年（明治 11）東京大学予備門入学試験合格後、1880 年（明治 13）札幌農学校に入学した。学生時代は北海道の人跡未踏の秘境体験に熱中し、後年の地理学研究の素地を養い、1884 年（明治 17）同校を卒業、農学士となっている。二年後、南洋巡航の途に上り、植民地をめぐる列強の熾烈な争奪戦をつぶさに目撃、危機感を持った。1887 年（明治 20）その見聞を警世の意をこめて『南洋時事』として出版。1888 年（明治 21）杉浦重剛の東京英語学校で地理学の教鞭を執り、政教社を三宅雪嶺等と設立し雑誌『日本人』を発刊。『日本人』の編集人、事実上の主筆となって国粹主義の論陣を張った。1891 年（明治 24）『日本人』の相次ぐ発行停止によって『亜細亜』を創刊し編集人となる。1894 年（明治 27）日清戦争開始二ヶ月後の十月『日本風景論』（政教社）を出版し明治期有数のロングセラーとなる。1895 年（明治 28）には東京専門学校（後の早稲田大学）講師となり地理学を担当する。1902 年（明治 35）第 7 回総選挙で岡崎より政友会から出馬、衆議院議員に初当選。1904 年（明治 37）第 9 回総選挙で落選後は政党活動、実際政治から離れ、啓蒙的地理学者、世界旅行者としての面を強くし、1910 年（明治 43）までの間に韓国、アルゼンチン、英、仏、独、伊、スイス、エジプト、マライ半島等へ世界旅行を行う。1911 年（明治 44）早稲田大学教授。その後も世界各地を歴訪

する。1927年（昭和2）左膝関節炎に糖尿病を併発し、早稲田大学教授のまま死去。享年64歳。政教社のもう一人の代表三宅雪嶺に比べ政治の世界と積極的に関わり、対外的に帝国主義の弱肉強食を是認するようになった。対外膨張主義を唱え、韓国、中国への侵略を積極的に肯定していったことは否定できない。

三宅雪嶺は1860年（万延元）、加賀国金沢の儒医の子として生まれた。1876年（明治9）東京開成学校予科に入学し寄宿舎に入り、1879年（明治12）東京大学文学部に進み哲学を専攻。フェノロサ等の講義を受けスペンサー、ヘーゲル、カーライル等の著作に親しむ。フェノロサを通してスペンサー流の社会進化論を受容した。しかし、三宅の場合は元来が没価値的な、進化の概念を「文明」の発展段階論を介在させて予定調和的な「進歩」の概念へと展開させることで基底的思想の一面が形成されていったのではないかという仮説を立てることが許されるであろう<sup>(19)</sup>という識者の言辭は重要である。なぜなら雪嶺には非連続、対立を回避し、連続、融合で物事を考え「予定調和的な「進歩」」を志向する面が非常に強いからである。そのことが志賀とは異なり政治と積極的に関わることを避けさせたようにも考えられる。

1883年（明治16）東京大学文学部哲学科卒業。1888年政教社設立までは東京大学御用掛としてまた、文部省編輯局で働いた。政教社設立一年前に役所仕事に腹をたてて辞職。政教社設立後は書籍を多く出版し1891年（明治24）には『真善美日本人』『偽悪醜日本人』を出版した。両書は西欧の模倣よりは日本人の特質を発達させることで世界に貢献しようという開かれた国粹主義を発現した書である。1909年（明治42）の大著『宇宙』に通じる、日本と世界、地球と宇宙を社会有機体的に連続で把握し、無限の連続＝「渾一」、<sup>こんいつ</sup>「融合」（1889（明治22）の『哲学涓滴』で東西文明の融合を哲学の次元で成し遂げていこうとする）でこの世の事物をとらえていこうとする雪嶺の考えが見てとれる。対立、闘争よりは調和、融合を中心とした雪嶺は政治とは一定の距離を置き、文部大臣就任の要請（1937年（昭和12））も辞退し、文筆家として（戦争時局推進の筆をふるう面もあったが）生き、1945年（昭和20）11月26日、敗戦の後三ヶ月にして死去した。享年85歳。

杉浦重剛（1855（安政2）－1924（大正13））は雑誌『日本人』の創刊、新聞『日本』の刊行に際して同志を糾合する上で要<sup>かなめ</sup>の役割を果たした人物である。政教社の中では保守的な国家主義の面を代表する存在であった。（杉浦重剛以下内藤湖南までの記述は松本「解題」（S.55）に負うところが大きい。）もと貢進生（維新後の明治3年に各藩からその規模に応じて東京大学の前身の大学南校に「貢進」〈＝推挙し差し上げる〉された俊英たち〈中野目（1993）29頁〉）で文部省御用掛（明治14年）、文部省参事官兼専門学務局次長（明治21年）等政府の教育、倫理政策に関与する面が多かったことにもそのことは表れてい

る。もっとも井上、大隈らの条約改正論には「自国の国勢国情を顧みざるもの」と批判、排撃しているから、政教社系の生みの親として面目躍如たる面は当然存在している。1876年（明治9）から1880年（明治13）まで英国留学し、化学（科学）を勉強して後、「要するに人事も亦物理学定則と相戻らず」<sup>(20)</sup> という「理学宗」を唱導する。人間を功利的存在としてとらえつつ、個人の幸福は利他を通して十全なものとなるとしている<sup>(21)</sup>。そこから杉浦は国家を実態性を持つ自足的な存在とは考えなかった。

陸羯南（1857年（安政4）－1907年（明治40））は青森弘前の出身で司法省法学校中退の後、新聞『東京電報』、『日本』を創刊し、東亜同文会幹事長、国民同盟会相談役となっている。党派に従属する御用新聞としての「機関新聞」、もうけ主義の「営利新聞」をともに否定した。「一定の識見を有して以て輿論を代表又は誘導するところの新聞」＝「独立新聞」をもって新聞本来のあり方と考えた<sup>(22)</sup>。

その思想は国民主義の名で呼ばれたが、国民主義を「国民的統一」のための手段と考え、輿論政治である立憲政治の実現を目的とし、政治上の具体的、実際の、有効な施策の必要性を力説した。国家を貧民救済等の社会問題解決のための政治を行う機関ととらえ、個人を国家のための存在とは考えなかった。しかし、「挙国一致」への熱烈な意志を持ち、日清戦争では「頑冥不靈」な清を「庸憊」するためのキャンペーンをはり、対外硬の先頭に立つ新聞『日本』は戦争中、発行部数が伸びて一日平均2万部を超え、都下新聞紙中の有数のものとなった。この時期が新聞『日本』の全盛期であった<sup>(23)</sup>。

福本日南（1857年（安政4）－1921年（大正10））は『東京電報』、新聞『日本』を通じて陸羯南に協力し、編集、論説の執筆面で陸を助けるが多かった。一方、政教社では志賀重昂の『南洋時事』の出版もあり、南方進出熱ともいべきものが多くの者の心をとらえていた。杉浦重剛の『はんかい禁噲夢物語』（1886年（明治19））もその一つの反映であった。その書は杉浦の口述した大意を日南が一書にまとめたものと言われている。（内容は被差別民がフィリピンに移住し、フィリピンの民族解放闘争に参加するというもの。）日南も1889年（明治22）フィリピンの現状視察のためマニラに向かっている。日南の南方進出策への情熱は日本の対外的な「独立の維持」と「国権の保全」に不可欠の方策と考えるところからでたものである（松本（S.55）439頁）。もっとも日南は政府主導の南方進出には多くを望まず、日清戦争後の政府の軍備拡張計画に強く反対し軍部の独善に抵抗し続けた。板垣退助が日清戦争後、公然と藩閥官僚制利欲と妥協するに至ったことに対しても板垣の節操のなさを問題にした。それは日南の在野的姿勢の顕現であったと考えられる<sup>(24)</sup>。

長澤別天（1868年（慶応4・明治元）－1899年（明治32））は三宅雪嶺主筆の『江湖新聞』の記者をつとめるなどして、政教社に入り、内藤湖南とともに1900年（明治23）『日

本人』の編集に従事した。翌年、渡米し、スタンフォード大学で文学、政治経済学を学んだ。アメリカでは「自由平等の楽土」のゆえに広く労働者にも政治参加の権利が認められているので日本人移民に対して、白人労働者の危惧や不安に対抗するために入国先で参政権を獲得することの必要性を（とりわけハワイについて）絶えず強調し、当時の日本の支配的な殖民策が人口過剰の対策としてのみ構想されていて政治的視点が欠如している点を厳しく批判した<sup>(25)</sup>。

長澤は社会主義にも深い関心を寄せたが、それはナショナリズムへの志向を弱めるものではなかった。社会主義への関心は国家社会主義と結びついた形で、長澤だけではなく政教社同人の間に多く見られるところであった<sup>(26)</sup>。長澤の強大な軍事力を背景とする韓国、中国への対外膨張論は日清戦争前後を通じて変わらなかったという点も存在する。

内藤湖南（1866年（慶応2）－1934年（昭和9））は三宅雪嶺主筆の『江湖新聞』に関係し、志賀重昂の推薦で『三河新聞』に赴任した。その後、『日本人』革新のため、志賀に呼び返され、政教社同人として1890年（明治23）12月から長澤別天とともに『日本人』の編集にたずさわった。三宅雪嶺の『真善美日本人』『偽悪醜日本人』は湖南が長澤とともに三宅の口述を筆記したものである。1893年（明治26）大阪朝日新聞の客員となっていた高橋健三（1896年（明治29）松方正義と大隈重信の連合内閣成立時、書記官長となった）の私設秘書となり、その論説執筆を助け高橋のために「新内閣の方針」と題する文を起草した。1915年（大正4）日本の対華二十一条要求の際には、親友の政友会党首原敬、国民党主犬養毅に説いて反対決議を行わせようとした。また、犬飼の演説の草稿を書きもしたと伝えられる。1907年（明治40）から1926年（大正15・昭和元）まで京都帝国大学講師、教授として中国文化、中国文化との関連で見た日本文化についての著作を多く執筆し、京大中国学派の一人として世に広く知られた。湖南の根底には時代の風潮とは異なり中国文化への深い崇敬の念が一貫して流れていた。それは湖南が漢籍の抜群の読解力を通して中国の深い文字文化に通暁していたからであったと考えられる。

#### 4 政教社系の日本論・中国論

ここでは総論としての政教社系の日本論・中国論について考察してみたい。総論としての政教社系の日本論・中国論について考察するにあたって、まず考えなければならないのは当時の時代状況である。明治時代のキーワードは「不羈<sup>ふき</sup>独立」（束縛されず独立すること）であるが、第一回議会劈頭、官僚閥山県有朋首相は主権線・利益線演説（1890年（明治23）12月6日）を行い、本土を軍事的に防衛するだけでは不十分であることを、端的に表明している<sup>(27)</sup>。

蓋<sup>けだし</sup> 国家独立自衛の道に二途あり。第一に主権線の<sup>きょう</sup>疆域を謂ひ、利益線とは其の主権線の安危に、密着の関係ある区域を申したのである。凡<sup>およそ</sup> 国として主権線、及利益線を保ため国は御座りませぬ。方今列国の間に介立して一国の独立を維持するには<sup>ひとり</sup> 主権線を<sup>しゅげん</sup>守禦するのみにては、決して十分とは申されませぬ。

利益線とは日本にとっては朝鮮半島を意味し、外交的行動から逆算すると満州南縁部、台湾、ハワイなども利益線上にあったのではないかと思われる<sup>(28)</sup>。

治外法権の撤廃、関税自主権の回復を目指すことによって明治時代は日本帝国臣民としての一体感を持っていたことであろう。しかし、それは単に消極的な「不羈<sup>ふき</sup>独立」を意味するのではなく、より積極的に「利益線」を守り、確立することを意味していた。政教社においても日清戦争以前は対外論として四つの論が組み立てられていた（中野目（1993）206頁）。それは第一に、北海道移住論や千島義会の企てに代表される方向であった。第二はハワイを中継地にした南北アメリカ大陸各地への移民論である。第三は南進論で台湾からフィリピン、南洋諸島からオーストラリアへと大日本帝国の勢力を伸張していこうとするもの（志賀重昂はその代表）である。第四は朝鮮半島を通して中国東北部すなわち満州へ向かうもので一般にいう北進論である。

政教社においてまず取り上げられたのは南進論と北海道移住論であった。前者は杉浦重剛や福本日南によって代表される。後に1892年（明治24）「東方問題」がクローズアップされはじめ、植民問題が移民論という形で持ちあがってくると、南進論は政教社であまり取り上げられなくなる<sup>(29)</sup>。「東方問題」とは具体的には「朝鮮半島問題」と「満州問題」であり、四つの対外論の中では北進論に当たる。同年の清国北洋艦隊の来航、ロシアのシベリア鉄道の着工が北進論が盛んになる原因であった。（天津事件はロシアに対する恐怖心から起こったものである。）日本は自らアジアの「先覚」として「後覚」のアジアを指導すべきであるとする「東洋盟主論」によって国粹主義は「アジア主義」へと転回を始める。それは「力の福音」への帰依を示すことで、二年後の日清戦争にそのまま対応できるものとなりつつあった<sup>(30)</sup>。多くの日本人が日清戦争を「文明」（日本）と「野蛮」（清）の戦いと位置づけた。中国民衆を救うものとの大義名分に酔いしれた。

政教社も東洋盟主論の立場に立って日清戦争を支持する論陣を張った。開戦後には領土拡大の欲求を露わにし、更に「北京陥落の日は和議の日なり。和議の日は必ず遼東山東の両半島及台湾を割くべきを宣言す。之より多きを望まず、之より少なきを許さず。而して多きは当局者の功に帰し、少なきは当局者の責に帰す」<sup>(31)</sup>と中国分割を要求するまでになっていく。

1889年(明治22)の大隈条約改正反対運動のあと、政教社は現実の政治運動と一定の距離を置くこととなった。しかし、1893年(明治26)の「硬六派」と呼ばれる院内団体の結成、翌1894年(明治27)に「対外硬派」という名称が一般化し対外硬運動(外国人の内地雑居を尚早とし従来の条約改正交渉を批判する運動)が盛んになると、再び政教社は現実政治に近づいていく。それは来たるべき第六議会に流動的要素が多分に存在し、対外硬派の院外の運動が果たす役割が相対的に高まり一言論結社にすぎない政教社が再び、政治の表面に躍り出て一定の影響力を及ぼすことになった<sup>(32)</sup>からであった。政教社でこの運動の中心にたったのが志賀重昂で、志賀は全国同志新聞雑誌記者連合(同盟新聞)と中央政社の結成を画策した。それは対外硬運動の中心機関と政教社が一心同体であることを意味し、中央政社の綱領「自主的外交主義を執る」、「責任内閣の完成を期す」は当時の政教社の主張そのものであったと言える<sup>(33)</sup>。

このとき朝鮮半島をめぐる日清両国は一触即発の状態となっており、右の二つの綱領は主戦論の主張と何ら矛盾するものではなかった。いや、むしろ主戦論へと積極的に転化しうるものであった<sup>(34)</sup>。1891年(明治24)から1894年(明治27)にかけての時期を識者は政教社の変貌期と位置づけている<sup>(35)</sup>。対外硬運動への対応で志賀は運動の中心に立つことで政界に更に一步近づき、三宅雪嶺は従来の姿勢を貫くことで批判の自由を確保した<sup>(36)</sup>。

以上のことを踏まえて、三、政教社系の主要メンバーについて——で取り上げた人々についてその日本論、中国論を概括すると以下ようになる。志賀重昂については『日本風景論』一、所論(二)美の「日本の春」で「漢土に桜無く、又鶯<sup>うぐいす</sup>無し。桜無きに非ざるなり、我が桜無きなり。鶯もまた然り。彼の鶯有るはその形は大にして、その色は殊なり、その声は我が鶯の美しきに若かざるなり。」と述べるように日本の「国粹」のみを認め、中国の「国粹」を認めなかった。志賀の地理学も侵略されないための地理学の活用から大国化するための有力な根拠としての地理学の活用へと変容を遂げていった(佐藤能丸(1998) p.126)。中国を含む「亜細亜大陸を原料地」<sup>(37)</sup>とするという帝国主義と一体化した中国論、亜細亜論を展開するに致る。

三宅雪嶺については『真善美日本人』(1891年(明治24))で日本人は中国の文章を漢文の訓読によって中国人同様に理解できるのであるから「邦人にしていやしくもまず支那より始め、その傍近諸邦に及び、東洋政治史なり、東洋商業史、東洋工芸史なり、東洋哲学史なり東洋文学史なり、もしくは地誌、風俗誌、動植物誌、またもしくは豪傑のこと、名家のこと、大変動のこと、斬新なる筆法をもってこれを叙述しこれを描写しこれを批判して討究せば、その世界における勲業、ねがわくは真を極むるの道において遺憾やや少なきを得ん。」と述べている。雪嶺には中国を現在に蘇生させるのを日本の使命であるかのよう

に考えていたところがある。同書「凡例」で「自国のために力を尽くすは世界のために力を尽くすなり。民種の特色を發揚するは人類の化育を裨補するなり。護国と博愛となんぞ撞着することあらん。」と記すのは雪嶺の日本論の特徴を端的に表しており、「融合」「渾一」を中心とする考えは生涯、変わらなかったと考えられる。(もともと功利主義の一派が私のためにすることは公のためになるとするような御都合主義とも取れる。)

杉浦重剛は「国を愛すると云ふハ何か外に愛するもののある様に考ふる人もあるべけれどは大いなる誤解にして愛国も亦遂に自愛の二字を離れざれば」<sup>(38)</sup>と述べるように愛国を自己愛の拡大と考えた。また、国家を実体性を持つものとは考えなかった。日本についてもそのように考えていたであろう。中国に関しては1902年(明治35)1月、東亜同文書院院長となっているが、同年4月には早々と辞職している。詳細はよくわからないが、中江兆民や三宅雪嶺もそうしたことをしているの、明治人は職が意に沿わぬと早々に辞職するのを良しとしていたのかもしれない。「支那学の必要」<sup>(39)</sup>では「顧ふに我国今日の開化は西洋より輸入し来りたるに相違なしと雖も之が根底をなしたるものは支那学にあらずして何ぞや」<sup>(40)</sup>と述べ、中国学の経済上、外交上の必要性を力説している。

陸羯南は新聞『日本』の主筆として1889年(明治22)5月31日以降、条約改正案反対論の先頭に立ち、個人を国家のための存在とは考えなかった。もともと日清戦争では対清強硬論となり、「アジア改革の先頭に立とうとする日本を理解しない存在として、清国政府にたいする批難をつよめ「頑冥不靈」(筆者注:「不靈」は「頭の働きが鈍い、賢くないこと。))を「膺懲」(筆者注:「こらしめる」こと。)しようキャンペーン」<sup>(41)</sup>を張った。

福本日南は陸羯南の新聞『日本』を編集、論説の執筆面で助けたが、南方進出策への情熱を強く持っていた。中国について「我等の支那」<sup>(42)</sup>で「亜細亜は亜細亜の亜細亜にして、支那は支那の支那なる也」と述べ、その自立性を尊重した。中国が「今日外圧に対し反発力の闕如たるに似たる観ある」のは「全く教へざるの民を駆りて戦へばなり」とし、そこには中国蔑視は存在していない。

長澤別天は当時の日本の支配的な植民策が人口過剰の対策としてのみ構想されていて政治的視点が欠如していることを厳しく批判したが、中国大陸での日本の各種權益の扶植をはじめとする勢力拡大論は日清戦争前後を通じて変わらなかった<sup>(43)</sup>。

内藤湖南は日本を知るには中国のことを知らねばならないという考えの持ち主であった。根底には中国への尊敬の念が存在した。文化史家(そう呼ばれることを好んだと言う)として文化としての中国、日本の両方を探求した。「所謂日本の天職」で「日本の天職」は西洋の文明を日本を介して中国に伝えたり、中国の旧物を西洋に売るのではなく「我が日本の文明、日本の趣味、之を天下に風靡し、之を坤輿に光被するに在るなり、我れ東洋に

国するを以て、東洋諸国、支那最大と為すを以て、之を為すこと必ず支那を主とせざるべからざる也。」<sup>(44)</sup>と日本の使命について述べている。もっとも日本の文明といっても中国文明の影響を受けながら発展したのが日本文明であり、日本、中国の両方の文化に通暁していた内藤湖南は中国文化を日本文化にとっての豆腐のにがりのようなものである<sup>(45)</sup>と述べたし、中国の「国粹」を認めそれを尊重する思考を内包していた(中野目(1993) p.214)。湖南は本来の「国粹主義」が持っていた、西洋文明を相対化しながら「日本の文明」を創造しようという政教社の初心を継承し<sup>(46)</sup>発展させた。その後の湖南の足跡を見ると、政教社系の最も実り多い成果が内藤湖南に顕現したと言っても過言ではないように思える。

## 5 結語

明治政府の外交方針はほとんど常に「現実主義的」、民間の外交方針はほとんど常に「理想主義的」だったと言える。明治初期から現実主義的な考え方と理想主義的な考え方が、政府と民間との対立という形をとったのは、日本の特色であり、明治初期外交のある程度の成功の原因であるとともに、後世にまで複雑な問題を残すことともなったのである<sup>(47)</sup>という識者の言辞がある。政教社系の人々はエトス的に言えば、民間の側に属するであろう。政府の現実主義的、換言すれば抽象観念や道徳意識にとらわれなくて、無思想の立場から条約改正などに携わったのと異なり、理想主義的な考え方を持っていたと言えよう。それはやがて東亜同文会の中国保全論のような日清提携論、「東亜の盟主」としての地位を日本が獲得すべきだという黒竜会の主張などに収斂していくのであるが、政教社の人たち、なかんずく就中、内藤湖南は、中国の「国粹」を認めそれを尊重する思考を内包していた(既述)。それは湖南が中国の「文化」に通暁していたからではないか、また中国の文化を尊敬していたからではないかと思う。ともあれ、政教社系の人々が政府と対抗する理想主義的な考え方に親和性があったのは間違いないと言えるであろう。政教社系の日本論・中国論の考察からそのことが窺い知れる。

### 〔注〕

- (1) 〔総監修〕川崎庸之等(1990) pp.852-853
- (2) 三宅雪嶺(1924) p.41
- (3) 三宅雪嶺(1933) p.15
- (4) 鈴木淳(2010) pp.98-99
- (5) 〔帝国大学の基本構想〕(1886) p.184
- (6) 佐藤能丸(1998) p.45

- (7) 三宅雪嶺「面棚偶語（二）」1895年9月5日 第三次『日本人』第五号所収 p.35
- (8) 佐藤能丸（1998） p.26
- (9) 中野目（1993） p.41
- (10) 佐藤能丸（1998） p.79
- (11) 中野目（1993） p.148 参照。
- (12) 松本（昭和55）「解題」（著者代表 志賀重昂 発行者 布川角左衛門（昭和55）所収
- (13) 中野目（1993） p.41
- (14) 松本（昭和55） p.424
- (15) 松本（昭和55） p.425
- (16) 松本（昭和55） p.426
- (17) 鹿野正直「ナショナリストたちの肖像」 責任編集 鹿野正直（昭和46） pp.17-18
- (18) 松本（昭和55） p.421
- (19) 中野目（1993） p.81
- (20) 「ユニテリアン雑誌の発行に就いて」明治23年12月『杉浦重剛先生全集』第1巻 所収  
p.132
- (21) 松本（昭和55）
- (22) 陸羯南「新聞記者」新聞『日本』明治23年10月22-26日
- (23) 鹿野政直（昭和46）「ナショナリズムの肖像」 鹿野政直責任編集（昭和46） p.53
- (24) 松本（昭和55） p.440
- (25) 松本（昭和55） p.444
- (26) 松本（昭和55） p.445
- (27) 佐々木（2010） pp.13-14
- (28) 佐々木（2010） p.14
- (29) 中野目（1993） p.207
- (30) 中野目（1993） p.214
- (31) 「支那分割論」、第二次『日本人』第17号（1894年12月25日） p.5 中野目（1993） p.225
- (32) 中野目（1993） p.221
- (33) 中野目（1993） p.224
- (34) 中野目（1993） pp.224-225
- (35) 中野目（1993） p.226
- (36) 中野目（1993） p.226
- (37) 志賀重昂「日本の人口処分」『日本』1921年2月号所載『志賀重昂全集』第一巻 1928年7

月刊所収 p.113

- (38) 「愛国論」 著者代表志賀重昂（昭和 55） p.120
- (39) 1888 年（明治 21）6 月 21 日「讀賣新聞」 著者代表志賀重昂（昭和 55） pp.123-124
- (40) 著者代表志賀重昂（昭和 55） p.12
- (41) 責任編集鹿野政直（昭和 46） p.53
- (42) 著者代表志賀重昂（昭和 55） pp.255-257
- (43) 長澤別天「日本対亜細亞大陸」『日本人』明治三十一年十一月二〇日 著者代表志賀重昂（昭和 55） p.445
- (44) 「所謂日本の天職」 内藤虎次郎（昭和 46） p.135
- (45) 「日本文化とは何ぞや（其二）」内藤虎次郎（昭和 44） p.18
- (46) 中野目（1993） p.215
- (47) 入江（1966） pp.27-29

#### 【引用文献・参考文献】

- (1) [総監修] 川崎庸之等（1990）『読める年表・日本史』自由国民社
- (2) 三宅雪嶺（1924）「自分の政治関係」第一次『我観』11月号
- (3) 三宅雪嶺（1933）『明治思想小史』岩波書店
- (4) 鈴木淳（2010）『日本の歴史 20 維新の構想と展開』講談社 講談社学術文庫 1920
- (5) [帝国大学の基本構想]（1886）『明治文化資料叢書』第 8 卷
- (6) 佐藤能丸（1998）『明治ナショナリズムの研究——政教社の成立とその周辺』芙蓉書房出版
- (7) 三宅雪嶺「面棚偶語（二）」1895 年 9 月 5 日 第三次『日本人』第五号所収
- (8) 中野目徹（1993）『政教社の研究』思文閣出版
- (9) 松本三之介（昭和 55）「解題」（著者代表 志賀重昂 発行者 布川角左衛門（昭和 55）『明治文学全集 37 政教社文学集』筑摩書房 所収）
- (10) 著者代表 志賀重昂 発行者 布川角左衛門（昭和 55）『明治文学全集 37 政教社文学集』筑摩書房
- (11) 鹿野正直「ナショナリストたちの肖像」（責任編集 鹿野正直（昭和 46）『日本の名著 37 陸羯南 三宅雪嶺』中央公論社 所収）
- (12) 責任編集 鹿野正直（昭和 46）『日本の名著 37 陸羯南 三宅雪嶺』中央公論社
- (13) 「ユニテリアン雑誌の発行に就いて」明治 23 年 12 月（『杉浦重剛先生全集』第 1 卷 所収）
- (14) 大日本教育会滋賀県支部編集（1945）『杉浦重剛先生全集』第 1 卷
- (15) 陸羯南「新聞記者」新聞『日本』「支那分割論」（第二次『日本人』第 17 号（1894 年 12 月 25

日) 所収)

- (16) 第二次『日本人』第 17 号 1894 年 12 月 25 日
- (17) 志賀重昂「日本の人口処分」『日本』1921 年 2 月号所載 (1928)『志賀重昂全集』第一巻 所収
- (18) 志賀重昂全集刊行会 (1928)『志賀重昂全集』第一巻
- (19) 「愛国論」著者代表志賀重昂 (昭和 55)『政教社文学集』所収
- (20) 1888 年 (明治 21) 6 月 21 日「讀賣新聞」著者代表志賀重昂 (昭和 55)『政教社文学集』所収
- (21) 長澤別天「日本対亜細亞大陸」『日本人』明治三十一年一月二〇日 著者代表志賀重昂 (昭和 55) 明治文学全集 37『政教社文学集』所収
- (22) 「所謂日本の天職」(内藤虎次郎 (昭和 46)『内藤湖南全集』第二巻『燕山楚水』「禹域論纂」所収)
- (23) 内藤虎次郎 (昭和 46)『内藤湖南全集』第二巻
- (24) 「日本文化とは何ぞや (其二)」(内藤虎次郎 (昭和 44)『内藤湖南全集』第九巻所収)
- (25) 内藤虎次郎 (昭和 44)『内藤湖南全集』第九巻
- (26) 入江昭 (1966)『日本の外交』中央公論新社 中公新書 113 (2000) 4 月 25 日 32 版を使用。

## 橋川文三 研究ノート

—橋川文三（1985,1986）『橋川文三著作集』第1巻—第8巻を中心として—

藤 田 昌 志

橋川文三 研究札記

—橋川文三（1985, 1986）《橋川文三著作集》以从第1巻到第8巻为中心—

FUJITA Masashi

### 【摘要】

橋本文三は‘戦時派’（在战争期间度过青年时代的人）、是在战争中成长起来的。橋本文三力图在逐渐美国化的战后日本这个背景下重新评价日本的过去。也就是说、他是重新审视明治以后近现代日本“过去”的学者。可以推测其思想来自对战争时期丧生的朋友们的赎罪意识。本研究札記以橋本文三《著作集》为主要资料来考察他重新审视日本‘过去’的思想。

キーワード：ナショナリズム 超国家主義 近代日本と中国 竹内好

### 1 序に代えて

橋川文三は「戦中派」（1945年の敗戦時に10代後半から20代前半の青年期であった世代を指す）<sup>(1)</sup>で、戦争中に育った人である。戦争が正常で平和が異常であるという感覚を抱いて、しばしば「戦死」への憧れを語った世代の一人である。戦中派の代表的存在には評論家の吉本隆明や作家の三島由紀夫がいる<sup>(2)</sup>。吉本隆明の『共同幻想論』も今となっては懐かしいが、三島由紀夫の『金閣寺』は破滅へ向かう世界のなかで「金閣寺」が美の絶対的象徴と化したのち、戦争が終わり、生きることを強要された主人公がかつて滅亡への道を共有したと思った唯一美、絶対美としての「金閣寺」に復讐する小説である。金閣寺を焼いた主人公が「一ト仕事を終えて一服している人がよくそう思うように、生きようと私は思った。」と述べて、小説は終わる。『金閣寺』の主人公は「死」を賛美する世界から、真逆の「生」を賛美する世界へコペルニクスの転回を体験させられたのである。

橋川文三は戦争で死んでいった者と生き残った自分の関係に悩み、「死」ぬべく運命づけ

られていると思っていた自分が生きていかなければならない「とまどい」の思いを持ちながら、戦後を生きた。橋川は安易に戦前の過去を美化しないし、丸山真男のように否定もしない。こうした人は三島由紀夫に自伝を書くように依頼され、竹内好のような人と親しくし、とりわけ竹内好からは週に一度、中国語を習うほどの親密さを保った。二人には敗戦前の日本を意識して生きるという共通点があった。

『橋川文三著作集』1—8（＝第1巻から第8巻。以下、同様に「第」と「巻」を略し、数字だけとする。）は1985年から1986年にかけて筑摩書房から刊行され、のちに増補版が出版されている。今回は最初の1—8の『橋川文三著作集』（以下、『著作集』と略す。）を中心に研究ノートを書いてみたい。将来、書く予定の橋川文三論の前の研究ノートとした。『著作集』1—8には巻末に「解題」が付されていて、「解題」の最初の頁に松本健一氏によるその巻の簡単な解説（＝内容要約）が記されている。

## 2 『著作集』について

『著作集』1は“日本浪漫派批判序説”と“美の論理と政治の論理”の二つの項目を大見出しとしている。“日本浪漫派批判序説”では政治に対する美の優越と日本の精神的伝統を以て、悪しき現実（軍部や政治的強権）を俯瞰し、「無限の自己否定」として自己を主張した日本浪漫派の文明批判<sup>(3)</sup>のエトスを橋川文三はイロニイと呼んでいる。

“美の論理と政治の論理”と同名の橋川の論文「美の論理と政治の論理」は—三島由紀夫「文化防衛論」に触れて—とサブタイトルにあるように、三島の1968年（昭和43）『文化防衛論』に対して書かれたものである。それに対して三島からすぐに反批判「橋川文三氏への公開状」が書かれたが、橋川はそれへの返事は発表しなかった。（三島の「文化防衛論」は1968年（昭和43）7月号『中央公論』に発表され、橋川の「美の論理と政治の論理」は同年9月号の同誌に発表され、三島の反批判は同年10月号の同誌に掲載された。）

三島由紀夫の「文化防衛論」（のち1969年4月新潮社刊 所収）は「反相对主義」的の性格が濃厚で、「天皇制」を日本文化の基本と仰ぎ、「絶対主義」の主張を展開した<sup>(4)</sup>が、本論文で橋川は、三島は「日本文化における美的一般意思ともいべきものを天皇に見出ししている」（p.243）と述べている。ここに言う「一般意思」とはルソーの言うそれであり、「すべての個人の特殊な利害関心に基づく多様な意思の集合に対し、一つのネーションとしての統一的意味を付与するものこそ、絶対に誤ることのない自然法則のごとき一般意思である」（同）と言うのがルソーの「一般意思」である。つまり、「天皇」こそが日本というネーションの美的統一を与える根本の存在であると三島は考えたのだと橋川は言う。もっとも「天皇」には「文化概念としての天皇」と「政治概念としての天皇」があり、前者

が「日本の文化的伝統のすべてを象徴するとともに、またあらゆる日本人の多元的な横への拡がりによって生成する政治や文化におけるすべてのアナーキーをも包摂しなければならなかった」(p.249)のに対して、後者は「どこまでも権力の集中化と秩序化、それに対応するあらゆる「正統的」文化＝イデオロギーのみと結びつくものであることはいうまでもない」(pp.249-250)と橋川は述べている。久野収の言う「顕教」としての天皇と「密教」としての天皇(＝天皇機関説)<sup>5)</sup>を彷彿とさせるが、三島が天皇擁護のために「天皇と軍隊とを榮譽の絆でつないでおくことが急務」とされ、しかもその目的は「政治概念としての天皇ではなく、文化概念の天皇としての復活を促すものでなければならぬ」という部分について、「その論理がどうなるのかほとんどわからない」(pp.256—257)と橋川は言う。

橋川は三島は「文化概念としての天皇」が現実化したのちに、はじめて成立しうのような天皇と軍隊の関係をロマンチックに先取りしているのではないか(p.257)と述べ、「もしそうだとすれば、それは論理的にはもちろん、事実の手順からいっても、不可能な空想で」(同)あり、実現の可能性があるのは、天皇の政治化以外のものではないと言う(同)。

(1968年当時の)共産革命防止を究極の目的として天皇と軍隊の直結を言うのなら、政策論として少しも非論理的ではないが、三島の目的化が「文化概念としての天皇」の擁護にあるとするなら、それは論理的でもなく、現実的でもない(pp.257—258)と橋川は述べ、最後に「私には「文化」の一般意思と政治のそれとが一致するような人間生活のシステムを考えることはむずかしいのである」と文を結んでいる。『日本浪漫派批判序説』の中で橋川は「天皇支配の原理は国家構造の底辺細胞をなす家族と部落共同体においてもひとしく貫通しており、天皇権力への懐疑はそのまま個人生活の日常的局面における自壊を意味した」(p.85)として、日本政治における天皇制の政治観念は近代的神政政治ともいべきシステムである(同)と述べている。もっとも橋川は天皇支配を美化しているわけではなく「近代史以降、天皇は「一度もその本質である『文化概念』としての形姿を如実に示されたことはなかった」(筆者注:三島の言辞)ということは、凡そ近代国家の論理と、文化概念としての、いわば美の総覧者としての天皇の論理とがどこかであい入れないものを含んでいたことにもとづくはずである」(p.256)と近代史以降、「文化概念としての天皇」が「政治概念としての天皇」化して来たことを鋭く指摘し、「実現の可能性があるのは天皇の政治化という以外のものではない」(p.257)と述べて、三島の「ロマンチック」な「先取り」を「不可能な空想」と断じている。そこには橋川の「絶望」が述べられている。三島は1968年10月号の『中央公論』に「橋川文三氏への公開状」を掲載し、橋川への反批判を行っている。その中で三島の反共の根拠は文化概念としての天皇の保持する「文化の全体性」の防衛にあるという考えは天皇のフレキシビリティにどこかで歯止めをかけたいという

欲求から生まれたもので、この欲求の中に文化の意思が働いている、また天皇と軍隊を榮譽の絆でつなげるには天皇の榮譽大権を武官にも復活すればよいだけの話だと三島は述べている<sup>(6)</sup>。橋川はそれに対してなんらの反応もしなかった。

『著作集』2 は“日本ナショナリズムの源流”と“柳田国男”が大項目として提示されている。(1967年発表)「日本ナショナリズムの源流」では、日本の近代的ナショナリズムをデモクラシーの基盤に置いて考えるのは基本で、「自由民権運動の登場をまって、はじめて理論的にナショナリズムとして論じうることになる」(p.7)とし、ナショナリズムとデモクラシーの同一性を仮説して、近代ナショナリズム運動が発達したのは、個人主義と一般意思の理念を結びつけ、「服従」と「自主的支配」の全体的政治形態を考え、そこにはじめて近代ナショナリズムの一般理論を提示した、ナショナリズム理論の始祖、ルソーの場合もそうである(同)と述べている。“ナショナリズムの源流”の部分について、松本健一氏による的確な解説が「解題」の始めに以下の内容で付されている。前半にナショナリズムを軸とした群を置き、後半に「靖国思想の成立と変容」を含むナショナリズムの諸展開を扱った論稿を置き、「これによって、著者の問題意識がその後、パトリオティズムとナショナリズムとの関係、そして忠誠意識(ロイヤルティ)の問題、またその日本の特殊性ともいえる国体論、あるいは天皇制の問題へと視界をひろげていったことがみてとれるはずである。なお、こういった視界に接続する著作として、『ナショナリズム』(1968年、紀伊国屋書店)ならびに「水戸学の源流と成立」(1974年、中央公論社刊『日本の名著』29「藤田東湖」の解説)などが生まれた(『著作集』2「解題」p.359)としている。

もう一つの項目“柳田国男”については「常民」概念によって日本のナショナリティ(民族性)を抽出しようとした柳田民俗学を橋川は「新しい国学」として位置づけようとした(同 p.359)のであり、それを世界思潮の中に位置づけようとし、橋川の柳田国男への問題意識はその後、ロマン主義の対極に位置する保守主義への関心をひきよせた(同)と松本氏は簡潔に、的確にまとめている。

『著作集』3 の大項目は“明治人とその時代”“西郷隆盛・乃木伝説の思想”である。

“明治人とその時代”では同名の論文「明治人とその時代」で、西南戦争終結から明治22年の憲法発布に到る期間の日本を動かしたものは「未来の国家像の熱烈な模索」であったとし(p.8)、日清戦争の勝利によって人々は明治国家建設の方針は正しかったとみなした(p.9)、明治30年代の日本には帝国主義者(ex.高山樗牛)とキリスト教系もしくは自由民権派系の社会主義者が生まれ(pp.10-11)、日露戦争後には立身出世コースが固定化する反面、「高等遊民」が増大し、「煩悶」の時代が始まった(p.11)としている。石川啄木はその時代の典型的、象徴的存在と言えよう。

“西郷隆盛・乃木伝説の思想”では西郷を大久保の西洋的国家関係観とは異なる、東洋的「道義」外交で「朝鮮」問題に対処しようとした人と考え（「西郷隆盛の謎」p.316）、乃木の信じたものは「イデオロギーとしての国家」ではなく「シンボルとして実在する天皇のペルソナ以外のものではなかった」（「乃木伝説の思想」pp.356-357）としている。

『著作集』4 の大項目は“歴史意識の問題”と“歴史と世代”である。「解題」の最初の松本健一氏の解説がコンパクトによくまとまっている。以下、その要約である。橋川は日本の思想伝統には本来的に「歴史意識」が欠如しており、それを形成する最初の可能性が「戦争体験」論であるが、歴史意識の形成を阻害してきたものの一つが伝統的な「世代論」であると橋川は言う。第4巻は全巻を通して「戦争体験」論に収斂する作品を集めている、ということもできるが、その「戦争体験」論を、歴史意識と世代論との切尖によって普遍性へと開いてゆこうとしたところに、橋川の独自の思索の展開があった。（松本健一による本巻の「解題」の最初の解説 p.349。）

第4巻はかなり難解な巻であるが、橋川がコリングウッド、マイネッケ、トレルチ、マンハイム、ノイマンなどを広範に読んでいることがわかり、和漢洋の思想を橋川が渉猟していたことに橋川の深い教養を感じる。現在にはこうした和漢洋の幅広い教養を持つ人文系研究者はほとんどいないであろう。

『著作集』5 の大項目は“昭和超国家主義の諸相”と“戦争体験論の意味”である。

前者については「昭和超国家主義の諸相」（pp.3-63）が出色である。橋川は超国家主義を「現状のトータルな変革を目指した革命運動」（p.26）としてとらえ、井上日召、北一輝、石原莞爾等について論じている。超国家主義を国家を超えるものを志向する主義としてとらえ、丸山真男のように国家主義が極端にまで突き進められた主義としてとらえていない。「超国家主義の中には、たんに国家主義の極端形態というばかりでなく、むしろなんらかの形で、現実の国家を超越した価値を追求するという形態が含まれていることを言ってもよいであろう」（p.63）と橋川は述べている。“戦争体験論の意味”の項目では、戦中派の世代的関心に発する作品が多く集められ、前半では「戦争体験論を「普遍的なるもの」へひらいてゆこうとする作品が多く」後半では「体験じたいに即した作品が多い」。（松本健一氏による解説 p.367。）

『著作集』6 の大項目は“日本保守主義の体験と思想”と“現代知識人の条件”である。

「状況のなかにある自己を（筆者注：柳田国男の）「常民」の視点において洗い出さねばならない」と橋川は「次第に考えるようになったのではないだろうか」と松本健一氏は「解題」の最初の「解説」（p.329）部分で述べている。橋川という人は生真面目な人で、研究対象への目の付けどころや論の展開の仕方など極めてユニークで、そして難解である。「過去」

を忘れず、「過去」の謎解きを意識的に「現在」の中で行おうとしている。

本巻所収の「魯迅と蘇峰」(pp.264-266)は浅薄な蘇峰への批判の文章である。『大唐三蔵法師取経記』という稀覯本について、魯迅が元代のものかもしれないと書いているのに対して、蘇峰はその本の現物を持っている上に、金石の大家、羅振玉もそうじゃないと書いているじゃないかと学問的權威を背景としてもものを言っていることを魯迅が反批判しているのを橋川は紹介している(pp.265-266)。山路愛山が蘇峰について「布団の上で成人した人物で、世間のことがわかるはずはないんだよ」と言っていたことを紹介して、「どうも書物という世間(世界)についても同じことがいえそうに思われる」(p.265)と橋川は蘇峰を批判している。

『著作集』7の大項目は“近代日本と中国”である。近代日本は中国とどう向き合い、また向き合わなかったのか、扱われる人名、事項だけでも福沢諭吉、岡倉天心、伊藤博文、田中義一、幣原喜重郎、東亜共同体論、尾崎秀実、郭沫若、魯迅、竹内好と多種多様である。橋川の文章は独特で、今の人には敬遠されやすいであろう。

「本巻に収められた作品の多くが雑誌『中国』の諸企画、および筆者と竹内好とが中心になった『朝日ジャーナル』の「近代日本と中国」と題した連載企画のもとに執筆されたことも、こういった著者の精神史のありよう(筆者注：竹内好とのつながりを通して橋川自身が日本ナショナリズムのアジア的展開の命運に目を開いてゆく過程それ自体でもあったこと)を推測させるはずである」(松本健一の解説 p.381)というのは本巻所収の作品の的確な解説であろう。

「福沢諭吉の中国文明論」(pp.3-52)では1985年(明治18)の福沢諭吉の『脱亜論』について、書かれた状況や福沢の究極の目的との関係などから評している。橋川は「脱亜論」を善玉悪玉論で断罪するというようなことはしていない。そうした姿勢は日本浪漫主義をパトリオティズムの視点から解明しようとし、単純な善玉悪玉論で断罪する姿勢をとらなかったことと通底するものがある。師友ともいべき竹内好にも善玉悪玉論を取らない姿勢はあったが、「アジア主義」の再検討を提議したまではいいが、「言いつばなし」が竹内好の一大特徴であり、「アジア主義」の場合もその御多分に漏れない。橋川には竹内の影響のもとに竹内の問題意識を発展的に探究したという面がある。このことについては後述する。

本題に戻って福沢の「脱亜論」であるが、福沢の中国観は1869年(明治2)『世界国<sup>くに</sup>尽<sup>し</sup>』にはっきりと表れていて「文明開化後退去、風俗しだいに衰えて、徳を修めず智をみががかず、我より外に人なしと、世間知らずの高枕」「負けて戦いまた負けて、今の姿に成行きし、その有様ぞ憐なり。」と中国に対して容赦ない批判を浴びせている<sup>(7)</sup>。1871年に結ばれた

日清修好条規のような日清提携論もあるにはあったが、福沢は1874年（明治7）3月頃から執筆を始め、翌1875年（明治8）3月に脱稿した『文明論之概略』で中国の停滞性や尚古主義を批判した。あいまいな「徳」よりも「智」を重視し、「智」の中でもとりわけ経済学を重視したことは創始した慶應義塾大学の特徴にも反映している。

諭吉の「脱亜論」の猛烈な中国批判は福沢の究極の目的から出てくるもので、その究極の目的とは「日本国民を文明へと進め、そのことによって日本国の独立をかちとることであった」<sup>(8)</sup>。

「脱亜論」にも問題はあり、橋川はそれを①福沢は権力と権威の一元的集中が中国だと批判するが、それは日本の方ではないか②福沢は儒教＝中国文明と考えているがそれは中国社会の実態ではなく福沢の解釈に過ぎない——としている<sup>(9)</sup>。しかし、①②だけではなく、福沢は①②を知りながら、自分の空想性、非現実性を知りながら、あえてその主張＝「脱亜論」を立てたのではないか、「脱亜論」は福沢におけるもう一つの「瘦我慢の説」ではなかったろうか<sup>(10)</sup>と橋川は言う。その理由として、福沢が「脱亜論」当時の反動＝復古の傾向への反撃を目論んだこと、欧化主義を採った以上、それを貫徹すべきであると考えたことを挙げている<sup>(11)</sup>。橋川は「福沢の「脱亜」は、そのまま後世の多くの坊たちが信奉したような安易な中国蔑視論の模範ではなかったということだけは銘記すべきことであろう」<sup>(12)</sup>と述べている。

橋川の福沢「脱亜論」への総合的評価は以下のようなものである。福沢「脱亜論」の目指したものは日本の「独立」であり、それは日清戦争で成し遂げられたが、「脱亜論」は、その有効性のめざましきの記憶によって、その後もながく政治指導者と国民の多くの信条として継承された。「脱亜論」にこめられた一定の自覚的な問題の限定は忘れ去られ、その形骸としての中国—アジア侮蔑の自然感情だけが残されることとなった。端的に言うならば、日清戦争後、日本人は何か別の人間になってしまったという印象である。本来の日本人というより、文明種日本人という変型人種のようなものになったかのようなのである。天心の「アジアは一つ」という声は、そうした日本人の魂が失われようとする時期の孤独な叫びにほかならなかった<sup>(13)</sup>（「福沢諭吉と岡倉天心」）。橋川は本質的に無効になった「脱亜」の目標のかわりに、天心が新しい理想を告知したと言い、人間における「究極と普遍を求める愛」の源泉がアジアにあることを告知して、人々の自覚を呼び覚まそうとしたと言う。続けて天心を次のように総括している。「あの戦闘的な『東洋の覚醒』の中に「西洋の光栄はアジアの屈辱」という有名な言葉があるが、天心はその屈辱を屈辱ともしない魂を目ざますために、何人の眼をもあざむかない「美」のアジア的普遍性を人々に気づかせようとした。多様なアジアの美は、そうした天心の献身を通してはじめて一つなるものと

して統一されたわけである」<sup>(14)</sup>。天心は西洋美術より東洋美術の方が深いと考えていた人であり、「気韻生動」の重視などの中にその考えは見てとれるが、アジアの美の多様性を知悉しつつ、アジア的普遍性を人々に気づかせようとした先覚者であったと言えよう。

「尾崎秀実と中国—継がれざる遺産—」(pp.252-270)では、ソ連、中国共産党がヘゲモニーを握った形の中国、資本主義機構を離脱した日本という三民族の緊密な結合を中核としてまず東亜諸民族の民族共同体の確立を目指すとして「訊問調書」で述べた(pp.266-267)尾崎秀実について、橋川は中江丑吉、鈴江言一らとともに「いずれも私は日本人として輝かしい名前であると思っている。」(p.270)と述べている。橋川という人は過去や過去の人物について再評価する名手である。戦中派として戦中の日本浪漫派を独自の視点で再評価、再分析したことがその原点にあるように私には思われる。

「竹内さんの『魯迅』」(pp.365-368)では曹聚仁が竹内好の『魯迅』は平凡であると言っており、台湾の蘇雪林という女流評論家は魯迅嫌いで、女師大事件以来、魯迅嫌いになり魯迅を「妖怪」そのものだと言っていることを紹介している。続けて「竹内さんは魯迅を「妖怪」ともみなさず、かといって君子聖人もみなしておらず、「それはどういう意味になるだろうか。私は竹内さんの新訳進行の目的は、その間の事情を自分なりに答えておられるのだろうと考えている。」(p.368)と述べている。竹内好が等身大のありのままの魯迅を新訳で表そうとしているという謂いであろうか。「竹内中文の思い出」(p.368-377)では橋川が竹内好に毎週金曜日2時間、1970年4月からの1年間、代々木の「中国の会」事務所で中国語の初歩を習ったことを書いている。橋川は中国語を習い始めてから、漢文を、頭からまっすぐ下へ(筆者注：しょうとうちよつか 従頭直下(頭からまっすぐ下へ))読む習慣が付き始めた(p.371)と述べている。竹内好と橋川の関係については後述する。

『著作集』8の大項目は“対馬幻想行”“序跋集”“初期作品集”である。松本健一氏の解説(p.373)によると「この第8巻は、全体がおおよそ著者自身の精神史に関わる作品によって成立している。その意味で、本巻を通読すれば、著者の精神的生涯のあらすじを辿ることができるはずである」という内容である。橋川氏は対馬生まれで、広島へ移り、後に更に進学のために東京へ移り住んでいる。対馬という辺境から日本を見る視点があり、それは西郷隆盛を論じるときにも反映されている。

以上、『著作集』1から8を通観して思うのは、橋川文三という人が過去の日本の「負」の歴史の中に未来に役立つものを発掘しようとした人であるということである。日本浪漫派、日本ナショナリズム、乃木希典、超国家主義、すべて戦後、日本人が「負」として切り捨てて顧みなかったものである。西郷隆盛や戦前中国への評価は賛否両論が存在する。橋川はそれらへの鎮魂歌レクイエムを捧げつつ、未来への糧となるものを探求したのであった。

竹内好も過去の中から未来に役立つ糧となるものを見つけようとした人であった。もともと竹内の場合は「言いっぱなし」で終わることが多く、その根本理由は中国語をきちんと勉強していないからのように私には思われる。中国古典を非常に嫌い、中江兆民が徳育のために孔孟の教えを官立の外国語学校で科目の一つにしようとしたことを「悲惨な感じに打たれた」(＝「情けない」という意味であろう)と言った(竹内(1949)「日本人の中国観」竹内好(1980)所収 p.15)竹内の依るべきものは、自分を旧時代の産物と位置づけ、白血球が病原菌を退治したら死滅するように、自らも死滅し忘却されることを望んだ魯迅であった。主観教条性の塊の「竹内魯迅」は現在では研究者にまともに相手にされないが、橋川文三は竹内好と交流する中で、竹内の課題を継承し、より明確な形で論じ、独自の展開をした人物<sup>(15)</sup>であると言えよう。

以下、田澤晴子(2018)によって、竹内の橋川への影響と継承、発展について述べてみたい。竹内からの影響として、田澤晴子(2018)はまず、柳田国男についての竹内から橋川への影響を挙げている。①柳田国男と魯迅が「アジアにおける一定の歴史時代の暗黒さを共通に象徴」していると指摘している点②柳田の「常民」が天皇制国家の「臣民」と対峙する可能性に言及している点——という二点を橋川が竹内から影響を受けた点としている。①については、田澤晴子(2018)は古いものへの近親憎悪と啓蒙者としての発足を具体的に挙げ、②については、自民族の生活伝統への深い関心を持った認識者であることを挙げる。それらがいずれも竹内の具体的影響であるとする。そして、逆に、魯迅と柳田の決定的な違いとして、柳田の各国の相互理解への信頼感やアジアが先端となるという「楽天主」性とは反対に、魯迅は帝国主義を「人が人を食う」(“吃人”)世界とみていたとする。詳細は橋川の「魯迅と柳田国男」(1964年)「柳田学のこれから」(1975年)などを御覧いただきたい<sup>(16)</sup>。

田澤晴子(2018)は更に、橋川の西郷論は竹内の「第二革命」としての西南戦争論を継承する「西郷隆盛の反動性と革命性」(『著作集』3 pp.291-306)から出発しているとし、竹内の影響として、①橋川は竹内と西郷を重ねている②橋川は西郷伝説あるいは西郷の思想にアジア型の近代の可能性を見いだそうとする——という二点を挙げている。①については近代的な価値と「前近代への傾向」をあわせ持つ「二重人格」である竹内と維新革命の象徴でありつつ封建的反動でもある矛盾した存在の西郷を橋川はオーバーラップさせ、②については、竹内の「京都で行われた最後の講演」(1976年10月18日)を手がかりに、近代日本における魯迅の小説の特徴が西郷伝説において成立した可能性について橋川が示唆していること、また、西郷の「征韓論」にアジア連帯の可能性を読み込もうとしているのは、竹内を継承する側面があると田澤(2018)は言う<sup>(17)</sup>。②については田澤(2018)は

(注 21 で) 橋川 (1985) 『西郷隆盛紀行』あとがきに代えて (『著作集』3 pp.327-331) は「魯迅『阿 Q 正伝』等の小説に「カオスから出てカオスに消える」形式があり、それが「無名の民衆の姿」を写すものとし、西郷が死後民衆伝説となったこととあわせ、西郷が魯迅と同様「無名の民衆」の代表者であり「民族独立の英雄」となる可能性があることを指摘している<sup>(18)</sup> としている。橋川は竹内の (近代的価値と「前近代への傾斜」を矛盾して持つ) 「二重人格」と西郷の (維新革命の象徴でありつつ封建的反動である) 「二重性」をオーバーラップさせ (①)、西郷が死んで西郷星になったという前近代的な西郷伝説にこそ、「アジア型の近代の可能性」を見いだそうとした = 「前近代」で「近代」を越えようとした (②)、とすることであろうか。

『著作集』3 では、既述のように橋川は西郷を大久保の西洋的国家関係観とは異なる、東洋的「道義」外交で「朝鮮」問題に対処しようとした人と考えた (「西郷隆盛の謎」(p.316) という。同巻の「西郷隆盛の反動性と革命性」(pp.307-319) では毛利敏彦『明治六年政変』を「日本近代史記述の傑作とっていい」(p.307) と絶賛し、「この本の主たる論点は西郷が征韓論者ではなく、ただ平和使節として韓国に行かんとしたにすぎないということ」(p.313) であると述べている。以下は、上記「西郷隆盛の謎」(p.316) と同様の橋川の考えを述べた部分である。「西郷は日本と韓国の情勢を見るに一種東洋的な感触をもったのに対し (それは参議中の副島・板垣・江藤らの考え方に近い)、大久保はそれをどこまでも西洋流の国家と国家の既成概念で見ている。我々はその後日清戦争を経験するが、その下関における講和会議において、李鴻章と伊藤の対立を描いたものともよく似ている。／西郷は朝鮮の無礼を東洋的な事実としてみており、大久保は同じものを西洋的な論理に照らして試みている。一方はそれで「道義」外交を柱とし、他方はそれに「論理」を以てむくいんとしているとでも言うておこう。このことは日清戦争期における李と伊藤の関係にもよくあらわれていると思うが、この日韓関係では結局一つの「秘策」が用いられ、そして伊藤はそのために知能をつくしている」(pp.315-316)。最後の「秘策」とは天皇の「転向」が作用することを指す (p.317) と、橋川は述べている。明治天皇が心変わりして「征韓論」(正確には東洋的王道論であろう) から転向したというのである。

天皇、天皇制については「日本浪漫派批判序説」(『著作集』1)「日本ナショナリズムの源流」(『著作集』2)「天皇感情についての断片」(『著作集』2)「乃木伝説の理想」(『著作集』3)などに言及があり、それらについては今までにも一部、触れたが、橋川文三という人の独創性は既成の学問の「規範」で物事を考え、分類するというをしないところにある。それゆえ、文章は難解である。あまり人に理解してほしいとも思っていないようで、丁寧な説明ということをしんどしない。

咲き咲きしふちの紫ちりはてて若葉の緑ひとりのこれり

あんなにたくさん咲いていたふちの紫も散り果てて「一人」若葉だけが残っている。目に見える「若葉」という「現在」は、咲き咲いていた「ふち」のこと＝「過去」は知らないようだが、「現在」は「過去」を知ることによらずしては成立しないと言っているような短歌（『著作集』8 1936年（昭和11）7月15日発行『アカシア』第79号に発表された橋川の三連作の短歌「初夏の光」の三句目 p.289）である。

### 3 結びに代えて

1945年（昭和20）の敗戦以後、アメリカによる実質的な占領支配が行われ、日本人は物の豊かさを追求することが心の豊かさに通じると思い、朝鮮戦争による特需や所得倍増計画の効果もあって、日本は経済大国になっていった。日本人もよく働いて、高度成長期には日本はどんどん右肩上がりの経済発展をしていった。しかし、バブル崩壊後の日本は元気をなくし、不況が20年も続く中で、グローバリゼーションという名の、実体はアメリカナイゼーションの中で、現在、日本人は拝金主義に覆われた社会の中で生きている。今から30年ほど前、古都と言われる京都の町中にもセブンイレブンなどのコンビニが雨後の筍のようにできていった。外国人留学生も多く来日し、その中の6割ほどは中国人であるのに、国際化とは英語化であると勘違いしている輩によって、英語教育が極端に重視され、多くの日本人もそれを受け入れている。本来なら、日本語教師はもっと中国語に通曉した人間が増えてもいいはずである。そうならないのは、日本語教育が英語の言語習得理論などに依拠しているからである。日本語教師には和語ばかりで日本語を書いて、漢語と和語のバランスの中に日本語の文章のメリハリの本質があることを知らぬ者も多いのではないだろうか。やはり日本は1945年から1952年までの、7年間のアメリカによる実質的占領支配の後遺症から、今も立ち直っていないということであろうか。出世頭は自らアメリカに留学し、もしくは企業派遣されて、帰国し、日本人を支配する地位に就くのが暗黙の常識となっている。

竹内好や橋川文三はアメリカ化する戦後日本で、日本の過去を見直そうとした人であった。竹内好の場合は、中国崇拜論者となり、日本を全面否定した人なので、正確には「見直し」た人ではないが、橋川文三という人は明治以後の近現代の日本の「過去」を「見直し」た人である。その根底には、戦争で死んでいった友人たちへの罪の意識のようなものがあつたのではないかと想像する。こうした人こそ本来の日本人なのではないか。国際化

という「名」の曖昧性に騙されることなく、国際化時代の日本人として橋川文三のような過去の「発掘」を今後もすることを肝に銘じたいと思う。

〔注〕

- (1) 平野敬和 (2014) p.27。
- (2) 同 (1)。
- (3) 橋川文三 (1985) 『著作集』1 p.44。
- (4) 青木保 (1999) pp.112-115。
- (5) 久野収 (1975) 朝日ジャーナル編集部編 (1975) 所収。
- (6) 中央公論編集部編集 (2010) pp.206-208。
- (7) 『著作集』7 p.13。
- (8) 『著作集』7 p.28。
- (9) 『著作集』7 pp.42-44。
- (10) 『著作集』7 pp.44-45。
- (11) 『著作集』7 p.45。
- (12) 『著作集』7 p.46。
- (13) 『著作集』7 p.72。
- (14) 『著作集』7 p.73。
- (15) 田澤晴子 (2018) 黒川みどり・山田智 (2018) 所収 pp.272-273。
- (16) 田澤晴子 (2018) 黒川みどり・山田智 (2018) 所収 p.272 参照。
- (17) 同上 p.273。
- (18) 田澤 (2018) p.279。

【引用文献・参考文献】

- (1) 平野敬和 (2014) 『丸山真男と橋川文三 「戦後思想」への問い』新曜社
- (2) 橋川文三 (1985—1986) 『橋川文三著作集』1—8 筑摩書房
- (3) 青木保 (1999) 『日本文化論の変容 戦後日本の文化とアイデンティティ』中央公論新社 中公新書
- (4) 久野収 (1975) 「北一輝《革命の実践》」朝日ジャーナル編集部編 (1975) 所収
- (5) 朝日ジャーナル編集部編 (1975) 『新版 日本の思想 下』朝日新聞社 朝日選書 46
- (6) 中央公論編集部編集 (2010) 『中央公論特別編集 三島由紀夫と戦後』中央公論新社
- (7) 田澤晴子 (2018) 第二部 思想と近代史—各論編— 二 明治維新の展開 黒川みどり・山

- 田智 (2018) 所収
- (8) 黒川みどり・山田智 (2018) 『竹内好とその時代 歴史学からの対話』 有志舎
- (9) 竹内好 (1949) 「日本人の中国観」 竹内好 (1980) 所収
- (10) 竹内好 (1980) 『竹内好全集』 第四巻 筑摩書房



中島岳志著 (2017)  
『アジア主義—西郷隆盛から石原莞爾へ—』潮文庫

藤 田 昌 志

中島岳志著(2017)『亚洲主义—从西乡隆盛到石原莞爾—』潮文庫

FUJITA Masashi

【摘要】

19 世紀後半，歐美列強侵略亞洲的勢頭有增無減，亞洲主義就為了對抗歐美侵略行徑而展開的。中島岳志先生在本書中體系性地探討了從西鄉隆盛到石原莞爾的亞洲主義，同時對相關的學者竹內好和橋川文三也有所涉及。中島岳志先生在批判了社會進化論和單一論之後，摸索構建亞洲連帶的思想體系，他表示今後還將繼續果敢地在亞洲主義這個‘虎穴’之中前進下去。

キーワード：アジア主義 近代の超克 社会進化論 多一論 国民国家

1 序に代えて

アジア主義は 19 世紀後半に盛んになった欧米列強のアジア侵略（彼らはその植民地主義を文明を伝えるものと美化したが、基本的に、経済的利益の獲得を中心とし、政治的支配は二次的なものとした）に対抗する方策として展開されたものである。本書で中島岳志氏（以下、敬称略。）は西郷隆盛から石原莞爾まで包括的にアジア主義を検討し、関係する論者である竹内好や橋川文三の言説にも言及し、検討している。

2003 年 3 月 20 日、アメリカのイラク攻撃が始まった。沖縄で訓練を受け、翌年 4 月に普天間基地から飛び立っていったアメリカ軍の海兵隊員がファルージャの町に大量の爆弾を投下した時、中島は日米安保を超えてアジアと共に生きる道を選ばなければならないことを確信し、理屈を超えたアジア主義的心情が自分の中で確固たるものになり、「イラク戦争は、私にとって『アジア主義』を引き受ける覚悟と意思を決定的にした出来事だったのです」<sup>(1)</sup>とイラク戦争が「アジア主義」に主体的に取り組む契機であったことを述懐している。

欧米列強のアジアへの侵攻がアジア主義の萌芽であった。日本にとって、それは他人事

ではなく、アジアとの「連帯」や思想的な「近代の超克」（＝合理主義的認識論、社会進化論、相対主義の超克）、「侵略」が切実な現実的課題として、取り組まなければならない差し迫った問題として浮上したことを意味する。中島はアジア主義を日本の近代の歩み同様、全否定も全肯定もできないと言う。アジア主義のプロセスにおいて「日本とアジアの深い交流が生じ「思想としてのアジア」が構築された事実」<sup>(2)</sup>を重視し、その思想は「西洋近代に対する東洋からの巻き返しにおいて、きわめて重要な意味」を持つとして、「アジア主義の思想的可能性を追求していきたい」<sup>(3)</sup>と述べている。

## 2 中島岳志（2017）『アジア主義——西郷隆盛から石原莞爾へ』について

### 2.0

本書は序章から終章まで合わせると 21 章に及ぶ。2014 年 7 月に潮出版社より刊行された単行本を文庫化し、2017 年 2 月に初版発行されたものである。

**序章 なぜ今、アジア主義なのか** では 1. 序に代えて で引用した部分を含む中島のアジア主義へ向かう姿勢、決意が述べられている。

第一章～第十九章では竹内好の論文「日本のアジア主義」、西郷隆盛と征韓論、自由民権運動と玄洋社、金玉均、頭山滿、樽井藤吉の『大東合邦論』、天佑侠と日清戦争、宮崎滔天、孫文、岡倉天心、黒龍会、韓国併合、辛亥革命、大川周明、田中智学、石原莞爾、アジア主義の周辺—ユダヤ、エチオピア、タタール、日中戦争と大東亜戦争——などがテーマとして取り上げられている。**終章 未完のアジア主義** では「アジアの教訓と遺産」を振り返り、更に竹内好の「方法としてのアジア」を乗り越えることを提案し、岡倉天心らのアジア的「多一論」をアジアを「一つの世界」として構成してきたものとして高く評価し、既述のようにアジア主義の思想的可能性を追求していきたい<sup>(4)</sup>と述べている。

### 2.1 社会進化論と単一論

各章の詳細は本書を読んでいただきたいが、中島が批判するものとして①社会進化論②単一論がある。そのことについて以下、述べてみたいと思う。

まず①**社会進化論**について。19 世紀に活躍したイギリスの哲学者、スペンサーは生物や自然が進化を遂げてきたように人間社会も理想的な姿に向かって進化するという「**社会進化論**」を唱えた<sup>(5)</sup>。社会進化論は社会主義革命を正当化する論理に援用され、1880 年代、日本でもスペンサーブームといえる状況が生まれ、樽井藤吉『大東合邦論』もこのスペンサーの社会進化論に大きく影響を受けて、社会の段階は進化によって「世界統一」が成し遂げられるという見通しを説き、社会進化の先駆的取り組みとして、日本と朝鮮の対等合

邦を成立させるべきであると説いた<sup>(6)</sup>。(もっとも1910年に再版された『大東合邦論』の「再刊要旨」では、韓国併合を追認する論理を展開してしまっている(p.173)。

石原莞爾の「最終戦論」は日蓮仏法と融合した社会進化論で、石原は世界統一という理想社会を近未来に設定して、そのユートピア実現に向けた闘争を説いたが、石原のアジア主義は「不透明な多元性に耐えることができ」ず、ここに社会進化論の延長上に構築されたアジア主義の破綻が顕在化したと中島は述べている<sup>(7)</sup>。単一な一方向へ社会が進化するという単一論の謬論への中島の批判である。それは②単一論の批判へと続く。

②単一論の批判と多一論へのパラダイムの転換の必要性について。アジア主義には「合理主義的認識論に対する根本的な批判が含まれて」いて、それが岡倉天心、南方熊楠、柳宗悦、西田幾多郎、鈴木大拙らが構想してきた「多一論」である<sup>(8)</sup>と中島は言う。「多一論」とは「バラバラでいっしょ」という考え方で単一論の対極にあるものとして中島は考えている。岡倉天心の「アジアは一つ」というかつて政治に利用された言葉は、正確に言えば「アジアは多にして一つ」となり、アジアには中国、インド、日本といった個性豊かな文化が存在し、ヒンドゥー教、イスラム教、仏教、儒教といった複数の宗教が存在し、それらはバラバラに見えて、実は唯一の真理を内包していて、「多は一であり、一は多である」というアジアが発信する不二元論の世界観だというのが天心の強い主張であり、そうした(二而一<sup>ににしていち</sup>という)アドヴィダ(=不二元論)に基づくヴィジョンは、ヴィヴェーカーナンダ(天心がカルカッタで会った宗教指導者)によって教示されたと同時に、天心自身が以前から老荘思想を通じて体得していた思想である<sup>(9)</sup>と中島は述べている。

## 2.2 第二章 西郷隆盛と征韓論 について

中島は 終章 未完のアジア主義—いまアジア主義者として生きること で「アジア主義の教訓と遺産」を振り返り①「王道」と「霸道」をめぐる問題②感情的な「抵抗としてのアジア主義」の問題③「思想としてのアジア主義」の問題—の三つに分けて論じているが第二章 西郷隆盛と征韓論 は①の「王道」と「霸道」をめぐる問題に関する章の一つである。

朝鮮の「皇」の字のための「書契」(=後日の証として書きつけられたもの。またその文字。)の受け取り拒否により「征韓論」が日本国内で台頭し、日本は朝鮮問題の解決のためには清との対等外交関係の樹立が先決と判断し、1871年に対等平等な日清修好条規を締結したが、西郷の朝鮮への使節派遣をめぐって明治6年の政変が起こる。毛利敏彦(1978年)『明治6年の政変の研究』有斐閣 は西郷征韓論者全面否定論を主張し、西郷は平和的、道義的交渉論を展開したとするもので、中島は「西郷の「使節派遣論」を政府主流派が歩

んだ「反革命」という文脈でとらえると、「霸道」的な「征韓論」となって浮かび上がって」くるが、一方、「永久革命のシンボル」という文脈で捉えれば、「王道」的な連帯論となって現れる、これが竹内好の提議した「西郷という問題」であり「アジア主義の課題」である<sup>(10)</sup>と述べている。竹内好は西郷を「永久革命のシンボル」と見るか、「反革命」と見るかといった視点を「解説 アジア主義の展望」<sup>(11)</sup>で提出しているが、竹内好について、中島は竹内好はアジア的価値に実態はないと言い「方法としてのアジア」を唱えたが、思想的アジア主義の価値を掘り下げることができなかった<sup>(12)</sup>とし、そこに「竹内の限界」を見いだしている。竹内好という人は問題提議はするが、「言いつばなし」で問題解決のために地道な研究をするといった人ではない。『魯迅』で「幻灯事件」が魯迅の「文学への転向」のきっかけではないと執拗に繰り返したが、その証拠は何も述べていない。このことには多くの魯迅研究者が疑問を持ち、魯迅研究者の代田智明氏も随分悩んだ<sup>しろたともはる</sup>ということ述べている。

「王道」と「霸道」については、孫文の1924年（大正13）11月28日、神戸での講演「大亜細亜問題」が有名で、日本は西方の「武力で他者を圧迫する文化」＝「霸道」の手先となるのか、東方の「感化することを本質とする、仁義・道徳に基づく文化」＝「王道」の防壁となるのか、と孫文は日本に問うた（pp.394—400）。もっとも、孫文も「滅満興漢」から「五族共和」＝「中華民族」の創出へ辛亥革命後、目標転換し、日本の援助と引き換えに「満州」權益を日本に渡すという従来の姿勢を変えていった。そのことにより「満州」に固執する日本との間に齟齬が生じていった。孫文はソ連を高く評価し、「王道」国家であると1925年の講演でも述べている（pp.397月—398）から、日本との関係は更に懸隔ができるものとなっていった。日本は孫文の後継者、蒋介石を相手にせず、軍閥支援などを行い、日中関係は泥沼化していく。

孫文の変貌について、その日本への影響はあまり大げらに述べられず、1924年の講演「大亜細亜問題」における、日本は「王道」を行くのか「霸道」を行くのかという孫文の言辞だけクローズアップされることが多いが、現実はそのような単純な二分法で片づくものではない。譚璐美（2017.10）『近代中国への旅』白水社 は、広東人の孫文には革命支援の資金援助と引き換えに、日本に対して「満州租借」をすることなど、痛痒を感じないことであつた、なぜなら「そんな土地は広東人にとって、ちっとも惜しくない」からである（譚璐美（2017.10）p.151）と述べている。革命運動は決して一枚岩ではなく、湖南派と広東派、それに浙江派も加わり、中国同盟会の結成当初から争いは絶えず、辛亥革命の成功後まで尾を引き、とりわけ湖南派と広東派の派閥争いは湖南省出身の毛沢東や劉少奇の時代まで延々と繰り返された（同 p.184）。「武昌蜂起」に孫文は一切関知しておらず、それは湖

南派のもたらした成功であった(同 p.190)。こうした指摘から中国の「省」という「地域」が、ひとつの「国」のような存在であったことが理解できる。中国崇拜派の日本人は、かつてこうした中国の実態を冷静に見ようとしなかったし、今は逆に、少しでもケチをつけて、下に見ようとする中国全面批判派の輩が多すぎる。どちらも真実からは程遠い。日本人は「排外」か「排外」のどちらかしか、外国に対する態度を採れないようである。

### 2.3 第三章 なぜ自由民権運動から右翼の源流・玄洋社が生まれたのかについて

第三章は 1874 年 1 月の「民撰議院設立建白書」をきっかけに始まったデモクラシー運動である自由民権運動と玄洋社をテーマにして、国民主権、国民国家、ナショナリズム、天皇(制)の関係(性)について考察している。

1789 年のフランス革命によって身分制度と絶対王政が批判され、国民主権の原則が導入された。「国家は国王のものである」という考えから「国家は国民のものである」(=国民主権)という考え方への転換がなされたフランス革命は「国民国家」(ネーション・ステイト)の生みの親であり、新しい国民意識(=国民主権)に基づくナショナリズム運動であった。ナショナリズムは 20 世紀のアジア・アフリカの独立運動にもみられ、ナショナリストは欧米の帝国主義的支配からの独立を叫び「国民主権」の実現を勝ち取るための闘争を行った。ナショナリズムは「愛国」を基礎とし、自由民権運動の闘士は「民権を訴えたのに愛国を唱えた」のではなく、「民権を訴えたからこそ愛国を訴えた」のであり、事実、彼らは 1874 年 4 月 12 日「愛国公党」を結成し、翌年、「愛国公社」創立大会を開いて、運動の全国展開と各結社の連帯を目指したのであった<sup>(13)</sup>。もともと、現在では「国民主権」に基づく「国民国家」のエゴの超克も視野に入れなければならない地点に我々は立っている。

フランス革命ではアンシャン・レジーム(旧体制)を崩壊させ、ルイ 16 世をギロチンにかけ、その存在を否定したのに対して、日本では「君主」の存在が前面に出され、「一君万民」の原則をテコにして封建的な専制政治の打倒を訴えた。それは日本型デモクラシーを支えた原理であり、右翼の源流とされる玄洋社は「天皇」「ナショナリズム」(=愛国)「国民主権」という三つの原理を根本原則とした<sup>(14)</sup>。中島は、玄洋社は「民権論」から「国権論」へ「転向」したのではなく、民権論と国権論は不可分なものとして展開され、三つの原理を貫き通したそのこと自体のゆえに、その論理から帝国主義的要素が芽生えてきた<sup>(15)</sup>と述べている。問題はナショナリズムで、国家の超克をどう位置づけるかにあるのかもしれない。アジア主義には負の面だけではなく、正の面、国家の超克の面があったのではな

いだろうか。そこに中島の視点がある。それは橋川文三氏が超国家主義に対して持った視点に通じるものである。

## 2.4 国家を超えるもの

超国家主義を国家を超えるものを志向した主義と考えたのは橋川文三であった。中島は多一論的アジア主義を主張するが、「一つのアジア」という政治的統合を志向せず、国民国家を超えた「アジア統合」「連邦国家としてのアジア」を目指す一部のアジア共同体の潮流には反対している<sup>(16)</sup>。何故かという、それは必ず他者に対する同一化や価値の強制が生じるからだという。リベラルな諸制度を維持するために、当面、国民国家という枠組みは有効だとする中島は、国民国家の範囲やナショナル・アイデンティティの枠組は伸縮するから、それらは固定的なものではない<sup>(17)</sup>と過激な急進主義は採らないものと見受けられる。

## 3 結び

終章の最後で中島は次のように述べて自らの抱負を表明している。「現在のような東アジアの不幸な状況を打破し、アジアの連帯を構築するためには思想が必要です。そして、それは歴史の中に埋もれています。/虎穴に入らずんば虎子を得ず——。/私はアジア主義という「虎穴」の中を果敢に進んでいきたいと思います」<sup>(18)</sup>。

グローバリゼーションがアメリカナイゼーションに墮し、多元論が単一論に圧倒され、拝金主義が世界を席捲するとき、董仲舒<sup>とうちゆうじよ</sup>の天人相関説の具現化かと思われるような大雨、洪水が梅雨時期、夏季に猛威を振るい、自然災害、人的被害が勃発する日本の現状（2018年12月現在）で、近現代の歴史を比較文化学の視点から再検討する必要があることを痛感する。アジア主義も日本からの視点とともに、アジア各国からの視点も視野に入れる必要があるであろう。国際化時代の研究とはそうした双方向のものであろう。かつて「西学東漸」に対して「東学西漸」を説いたのは岡倉天心であったことを想起されたい。（岡倉天心（1894年（明治27））「支那の美術」参照。）

### 〔注〕

- (1) 中島岳志（2017）p.15。
- (2) 中島岳志（2017）p.587。
- (3) 中島岳志（2017）p.588。
- (4) 中島岳志（2017）p.587。

- (5) 中島岳志 (2017) p.168。
- (6) 中島岳志 (2017) pp.168—169。
- (7) 中島岳志 (2017) pp.477—478。
- (8) 中島岳志 (2017) p.577。
- (9) 中島岳志 (2017) pp.274—275。
- (10) 中島岳志 (2017) p.84。
- (11) 竹内好編集 (1963) p.63。
- (12) 中島岳志 (2017) pp.576—577。
- (13) ここまでの記述は中島岳志 (2017) pp.85—99 による。
- (14) 中島岳志 (2017) pp.100—104 による。
- (15) 中島岳志 (2017) pp.100—105。
- (16) 中島岳志 (2017) p.579。
- (17) 中島岳志 (2017) p.579。
- (18) 中島岳志 (2017) p.587。

#### 【引用文献・参考文献】

- 中島岳志 (2017) 『アジア主義——西郷隆盛から石原莞爾へ』 潮出版社 潮文庫 な-1  
竹内好編集 (1963) 『現代日本思想体系 9 アジア主義』 筑摩書房  
譚璐美 (2017) 『近代中国への旅』 白水社  
岡倉天心 (1894 年 (明治 27)) 「支那の美術」 東京美術学校校友会誌『錦巷雜綴』所収



実践報告

## 外国人留学生を対象とした三重県内インターンシップ実践： 留学生を対象としたアンケート結果から

正路 真一・福岡 昌子・松岡知津子

### Internship project in Mie for international students: Questionnaire-based research with international students

SHOJI Shinichi, FUKUOKA Masako, MATSUOKA Chizuko

〈Abstract〉

This report is based on a questionnaire that international students answered regarding their internship experiences. The results indicate that the international students gained positive experiences, specifically from their interactions with company staffs and from their working experiences. Further, the internship contributed to their Japanese language knowledge as well as business-related knowledge.

キーワード：インターンシップ、留学生、日本語、ビジネスマナー、事後アンケート

#### 1. はじめに

近年、大学生の就職活動の一環としてのインターンシップの普及が進んでいる。例えば2017年度に卒業した大卒新社会人の7割以上が学生時代にインターンシップの経験があるとしている（就職情報研究会 2017）。学生にとってのインターンシップの意義として、文部科学省・厚生省労働・経済産業省（2014）は、「学生が自己の職業適性や将来設計について考える機会となり、主体的な職業選択や高い職業意識の育成が図られる。また、これにより、就職後の職場への適応力や定着率の向上にもつながる」という点を挙げており、三浦（2016）の研究においても、短期インターンシップを経験した学生と経験していない学生の進路決定率を比較した場合、インターンシップを経験した学生（90.5%）の方が経験していない学生（68.3%）よりも有意に高いことが示されている。更にインターンシップに参加した学生には筆記試験や面接などの選考回数を減免するなどの優遇措置が設けられることが多いため、学生の側にとってもインターンシップは就職活動を進める上で欠かせないものになりつつある（就職情報研究会 2017）。

筆者ら三重大学地域人材教育開発機構グローバル人材教育開発部門教員は、特に外国人留学生を対象として2017年度からインターンシップを実施しており、本稿はその取り組

みについて、特に留学生を対象としたインターンシップ終了後アンケート調査の結果を報告するものである。当インターンシップに参加した学生の多くは短期留学生・交換留学生であるので、前述のような日本人学生が就職に直結するものとして参加するインターンシップとは一線を画している。筆者らが留学生を対象としたインターンシップを実施する意図としては、外国人留学生に現実場面における日本語使用および日本社会体験の機会を与えるという点が挙げられる。外国人留学生達が日本に留学する意義とは、留学先大学で日本語を勉強し、日本人学生達と交流することはもちろんであるが、日本語の使用と文化・社会学習の場が教室内に限られず、生活の中のあらゆる場面で体験できることが大きなアドバンテージとしてあることにある。大学の外側のコミュニティーに存在している日本人・日本社会との交流は、留学生にとってより効果的な語学・文化・社会学習につながると考えられ、企業・団体でのインターンシップに参加することも、そういった機会が得られる一つの場であると考えられる。

## 2. 三重大学の留学生対象インターンシップ事業について

### 2.1 概要

三重大学地域人材教育開発機構グローバル人材教育開発部門は、2017年度から2018年8月現在に至るまで、下記表1にあるように、合計23人の留学生を、12の企業あるいは団体にインターンとして派遣した(インターンシップを実施した時期の順に記載)。

表1の内、⑨機械製造会社でのインターンシップは筆者らグローバル人材教育開発部門が企画したインターンシップではなく、三重大学キャリア支援センターが主管のインターンシップであるが、筆者らの呼びかけに応じた留学生2人をキャリア支援センターに紹介して派遣したものである。また、⑧地域貢献団体とは、主に地域の子どもたちを対象として、スポーツ教室や講演会またはその他のイベントを実施している団体であり、今回のインターンシップでは、地域の小学生を対象とし、寺院を学習の場とした夏季学習プロジェクト(「リアル寺子屋プロジェクト」)に留学生がインターンとして参加したものである。更に、⑫IT企業でのインターンシップに参加したアメリカ人学生は、前年度に三重大学に短期留学をしていた学生であるので、インターンシップ当時は三重大学所属の学生ではない。彼は現在所属する米国大学の夏休みを利用して、表1の中で唯一長期のインターンシップを行ったものである。

表1に示されるように、インターンシップの日数は3~5日間のものがほとんどであり、またインターンシップに参加した留学生の多くは女子学生であった(女18:男5)。また大部分のインターン留学生は留学期間が1学期ないしは2学期の短期留学生であるが、こ

外国人留学生を対象とした三重県内インターンシップ実践：留学生を対象としたアンケート結果からは筆者らが受け持つ授業を受講している学生の大多数が短期留学生であるため、口頭で直接参加を呼びかけることができたのが主に短期留学生であったことに起因すると思われる。

表1 インターンシップ参加学生と受け入れ企業一覧

受け入れ企業・団体の業種（インターンの就業場所）	インターン留学生（国籍・性別）	インターン留学生（短期・正規）	時期（日数）
①リゾート（美杉町）	中国人・男	短期留学生	2017年度2月（5日間）
②ホテル（鳥羽市）	中国人・女	短期留学生	2017年度2月（5日間）
	ベトナム人・女	短期留学生	
③国際交流団体（鈴鹿市）	イギリス人・女	短期留学生	2018年度6月（2日間）
	インドネシア人・女	生物資源学部 正規大学院生	2018年度7月（3日間）
④国際交流団体（津市）	台湾人・女	短期留学生	2018年度6月（5日間）
	ベトナム人・女	短期留学生	2018年度6月（3日間）
⑤ゲストハウス（志摩市）	フランス人・女	短期留学生	2018年度6月（5日間）
	中国人・女	短期留学生	2018年度6月（4日間）
⑥製薬会社（津市）	韓国人・女	短期留学生	2018年度7月（3日間）
	韓国人・女	短期留学生	
⑦食品会社（伊勢市）	タイ人・女	短期留学生	2018年度7月（3日間）
⑧地域貢献団体（津市）	中国人・男	短期留学生	2018年度8月（5日間）
	ベトナム人・女	短期留学生	
	ベトナム人・女	短期留学生	
	ロシア人・女	短期留学生	
	イギリス人・女	短期留学生	
⑨観光（鳥羽市）	中国人・女	短期留学生	2018年度8月（4日間）
	ブルガリア人・女	短期留学生	
⑩機械製造（津市）	ベトナム人・男	工学部 正規学部生	2018年度8月（10日間）
	韓国人・女	短期留学生	2018年度8月（3日間）
⑪英会話教室（津市・松阪市）	インドネシア人・男	生物資源学部 正規大学院生	2018年度8月（3日間）
⑫IT（松阪市）	アメリカ人・男	米国大学 学部生（過去の三重大学交換留学生）	2018年度5月～8月（3ヶ月間）

## 2. 2 事前準備

### 2. 2. 1 インターンシップの期間と時期の決定

インターンシップ期間を何日間に設定するかということにあたっては、三重大学の他部局のインターンシップの事例を参考にした。これまでの三重大学の日本人学生のインターンシップは、いわゆるワンデーインターンシップから数カ月に渡るものまで多様であったが、5日～10日間のものが最も多かった。更に、三重大学の人文学部では、以前から人文学部所属の留学生を対象にインターンシップ事業を行ってきたが、こちらも5日～10日間のものとして実施されていたため、筆者らもこれを基準に5～10日を目処としてインターンシップ先企業の開拓にあたることとした。

どの時期にインターンシップを実施するかという問題については、2017年度に初めてインターンシップを企画した際には(表1 ①②)、大学の長期休暇中を選んだ。これは、5～10日間のインターンシップをするために普段の大学の授業を休まなくてもいいようにという配慮であったが、結果的にこの設定は失敗であったと思われる。というのは、特に短期留学生は、長期休暇に入ると日本各所に旅行に出かける留学生が多いため、2017年度2月のインターンシップは、参加希望者が当初1人だけしか集まらなかった。その時点までに受け入れ企業を2社確保していたため(表1 ①②)、このままでは少なくとも1社でのインターンシップをキャンセルするという可能性が濃厚となった。そうした事態は、キャンセルとなる企業との今後のインターンシップ受け入れ交渉に影響を及ぼすと考えられたため、少なくとも各社に1人ずつのインターン留学生を確保して、インターンシップのキャンセルを回避する必要があると考えた。最終的には筆者らから直接数人の留学生に個人的に参加を持ちかけ、結果合計3名のインターン学生を(表1の①に1名・②に2名)確保した。この内2人からは、インターンシップ日数を短縮するという希望を汲んで了承を得た。こうした経験から、2018年度(表1 ③以降)はインターンシップ時期を、留学生が確実に三重大学周辺にいる学期中に設定した。具体的には6月末と11月末を基本線として企業・団体と交渉にあたり、各受け入れ企業・団体の希望に沿う形で具体的な日程を個別に設定した。これにより、インターンシップ参加期間中は、インターン留学生は大学の授業を欠席しなければならないということになったが、参加希望学生の獲得に苦労することはなくなった。授業を欠席するというのは留学生の日本語学習にとってマイナスであるという見方もあるが、インターンシップに参加して日本の会社での仕事に従事すること自体が長時間の日本語演習および日本のビジネス文化学習の場であるとも考えられるので、授業の欠席については重大な問題とは捉えなかった。

## 2.2.2 参加留学生の募集と事前学習

インターンシップに参加する学生の募集は、留学生への一斉メール、募集要綱の大学内での掲示、筆者ら教員による授業中での呼びかけによって行った。前述の通り、2017年度に実施した二つの企業でのインターン募集は設定時期のために難航したが、2018年度に実施したインターンシップの参加学生の募集は比較的容易であった。ただし、2018年度にインターンシップに参加した20人の留学生の内11人が、2017年度の参加者と同様、インターンシップ日数の短縮を希望したことには注意を払う必要がある。おそらく留学生の、インターンシップに長期間参加することに対する不安の表れではないかと思われるが、これに関しては、後述のインターンシップ修了後のアンケート結果報告の章で触れる。

インターンシップの事前準備として、インターンシップ参加予定の留学生を、筆者らが2017年12月9日と2018年6月23日に実施した「留学生対象ビジネス日本語講座（2時間・会場：三重大学）」、そして三重地域留学生交流推進会議主催が2018年6月5日に名古屋外国人雇用サービスセンターから講師を招いて実施した「留学生対象企業インターンシップのためのビジネスマナー講座（1時間・会場：三重大学）」に出席させた。これらの講座の内容としては、挨拶、自己紹介、ビジネスシーンでよく使われる表現などの言語的知識から、お辞儀、名刺の渡し方、服装、「ハウ・レン・ソウ（報告・連絡・相談）」などのビジネスマナー、日本で一般的に行われている就職活動の流れやインターンシップの説明などの非言語的なものまでを広く取り上げた。これらの講座には、インターンシップに参加する留学生は出席必須、それ以外の留学生も出席可としたが、実際には、2017年12月9日のビジネス日本語講座には2017年度にインターンシップに参加した3名の留学生を含む12名が出席、2018年6月23日の同講座には2018年度にインターンシップに参加した20名のうち7名のみ出席した。インターンシップ参加予定でありながら6月の講座を欠席した留学生（13名）が多かった理由としては、13名の5名は既にインターンシップ期間に入っていて出席ができなかったこと、1名がその時点でまだインターンシップ参加が決まっていなかったことがあるが、その他7名は「諸用による」などを理由とした単なる欠席である。当日の天気が雨であったことも影響したかもしれない。正路・福岡・松岡（2019）に述べられているように、この講座で学習する内容は、受け入れ企業・団体がインターン留学生に事前に習得しておいて欲しいとするものと一致しているので、今後はインターンシップに参加する学生には出席させることを徹底したい。また、2018年6月5日のビジネスマナー講座に関しては、2018年度にインターンシップに参加した20名のうち13名を含む20名が出席した。インターンシップに参加予定でありながら欠席した7名については、1名が既にインターンシップ期間中であったことにより、また5名がその時

点でまだインターンシップ参加が決定していなかったことにより、そして残る 1 名が諸用により欠席した。

### 2.3 インターンシップ中の対応

留学生のインターンシップ期間中は、筆者らが学生とメール等で連絡を取り、問題がないかどうか逐次確認した。その中で、表 1 にある 23 人の留学生のうち、4 人の学生が、インターンシップ開始後に、途中で辞めたいと申し出た。それぞれの理由としては、「インターンシップの内容が、想像していたものと違った」、「急にアルバイト先に欠員が出たため自分が入らなければいけない」、「お金が足りなくなってきたのと、人前で通訳をする仕事が怖いため」などであった。インターンシップが就業体験である以上、一旦始めた仕事を中断するというのは就業者としての意識に欠けているし、また受け入れ先機企業・団体にも不信感や不満感を与えるものであろう。今後は、留学生がインターンシップに参加する前に、生半可な理由で中断することは許されることではないと説明する必要があるという教訓が得られた。

### 3. 実践報告：インターンシップ修了後の留学生対象アンケート

インターンシップが終わった後、留学生インターンと受け入れ企業・団体を対象として、アンケートを実施した。この節では留学生インターンを対象としたアンケートの結果を報告する。インターンシップに参加した全 23 人中、19 人から回答を受領した。このアンケートで問うた質問は以下の 8 問である。

---

質問 1. インターンシップをして、どうでしたか。

- a. とても良かった
- b. まあまあ良かった
- c. 良くも悪くもなかった
- d. あまり良くなかった
- e. 全然良くなかった
- f. その他 ( )

→ どうしてそう思いましたか。



質問 8. その他のコメント・感想

上記質問の中で、質問 1、2、および 8 は、インターンシップに関する留学生の感想を聴取するもの、質問 3、4 はインターンシップの仕事内容について確認するもの、質問 6、7 は今後のインターンシップ実施について、筆者らの参考とするために留学生の意見を求めたものである。

質問 1「インターンシップをして、どうでしたか」と質問 2「仕事内容や会社の人の指示について、どう思いましたか」は、選択回答式の質問で問い、その理由を自由記述式で回答させたが、選択回答式の質問の結果を下の表 2 に示す。

表 2 「インターンシップをして、どうでしたか (質問 1)」、「仕事内容や会社の人の指示について、どう思いましたか (質問 2)」の選択式回答の結果

回答選択肢	学生数：質問 1「インターンシップをして、どうでしたか」	学生数：質問 2「仕事内容や会社の人の指示について、どう思いましたか」
とても良かった	16	18
まあまあ良かった	2	1
良くも悪くもなかった	1	0
あまり良くなかった	0	0
全然良くなかった	0	0
その他	0	0

これらの回答から、外国人留学生にとってのインターンシップの印象は概ね良かったと言える。またこの質問 1 と質問 2 の選択式質問の回答に対して、「どうしてそう思いましたか」という自由記述式質問を添えたが、この質問 1 と質問 2 の自由記述式回答内容、更に質問 8 でその他のコメント・感想を自由記述式で回答させた内容が重複するものが多かったので、まとめて下記表 3 に報告する。回答の内容はいくつかのカテゴリーに分けて、これらに該当する記述をした学生の人数を併せて表 3 に示す。ただし、一人の学生が複数のカテゴリーに該当する記述をしたものが多数あるので、アンケートに回答した学生数 (19 人) と表にある学生数は一致しないことに留意されたい。更に、全ての回答を「ポジティブな回答」と「ネガティブな回答」に大別して示す。

表 3 に示されるように、ポジティブな回答の中で、「社員が親切だった」という回答が最も多い。社員との交流は、Zhang (2009) がインターアクション (学習対象言語でのやりとり) は言語習得の大きな鍵の一つであると主張するように、インターン留学生の日本語コミュ

表3 「インターンシップをして、どうでしたか（質問1）」、「仕事内容や会社の人の指示について、どう思いましたか（質問2）」、「その他のコメント・感想（質問8）」の自由記述式回答の結果

	回答（自由記述）	学生数
ポジティブな回答	社員が親切だった	17
	日本語の勉強になった・日本語をもっと勉強したいという気になった	2
	日本文化の勉強になった	4
	仕事内容を学ぶことができた	4
	仕事が楽しかった・仕事が興味深かった	9
	仕事が簡単だった・仕事が分かりやすかった	6
	いい経験になった・新しい経験ができた・いい思い出ができた	9
	またこのインターンシップ先を訪れたい	2
	インターンシップ先の食べ物が美味しかった	1
ネガティブな回答	仕事が簡単すぎた・つまらなかった	3
	インターンシップの期間が短すぎた	1
	通勤が大変だった	2
	社員の説明が少なかった	1
	社員がいない時にお客さんの対応をしなくてはいけなかった	1

コミュニケーション能力向上に寄与するものであると考えられる。この回答は、「日本語の勉強になった」という直接的な回答と合わせて、留学生の日本語能力の向上に貢献するものであると考えられる。また、「日本文化の勉強になった」という回答はこのインターンシップが文化学習の機会となったことを示すが、この回答をした学生数は4と比較的少なく、更に4人の回答者の内3人は寺院を就業現場としたインターンシップに参加した学生であったため、日本文化に言及するのは当然であったとも思われる。一方、「仕事内容を学ぶことができた」、「仕事が楽しかった・仕事が興味深かった」という回答は合わせて15と多いが、これは各企業・団体の業務内容に対する興味を示すもので、インターンシップの本来の目的の一つである、インターン学生が進路決定に貢献するものとして解釈できる。その他の回答は、今回のインターンシップに対する一般的な好印象を示すものとしてまとめられる。

一方、ネガティブな回答も複数寄せられたが、その中で「仕事が簡単すぎた・つまらなかった」、「インターンシップの期間が短すぎた」という回答に関しては、「もっと充実感の得られるような仕事がしたかった」、「もっと長い期間したかった」という感想であると解釈できる。インターンシップのやり方に対するネガティブな回答ではあるが、インターンシップに対する留学生のポジティブな意欲を表すものであると言えるであろう。

質問 3 では、どんな仕事をしたかについて聴取した。この質問も、自由記述で回答させたが、回答の内容を「通訳・翻訳」、「その他の具体的な作業」、「単純作業」の三つに分けて下の表 4 に示す。

表 4 「どんな仕事をしましたか (質問 3)」の結果

回答 (自由記述)	学生数
通訳・翻訳	6
その他の具体的な業務	14
単純作業	5

「通訳・翻訳」の業務は、特に留学生の強みを生かしたものであり、こうした業務を留学生インターンに課したのは国際交流団体や観光関係の企業であった。また、表 4 の中で「その他の具体的な業務」と分類したものは、例えばホテルでのフロント業務、国際交流団体での資料作成、製薬会社での商品開発・包装の補助、また食品店で商品の包装などがこれに該当する。一方、企業や団体における就業に限らず一般的な生活で必要とされる作業、例えば掃除、荷物の運搬などは、「単純作業」としてまとめた。「その他の具体的な業務」が最も多い回答となったことは、インターンシップ先企業が単純作業以上の業務を体験させたということであり、これが表 3 (質問 2) において「仕事内容を学ぶことができた」、「仕事を楽しかった・仕事が興味深かった」という回答が多かったという結果に繋がったと考えられる。

質問 4 では、インターン留学生が大変だと感じたことを聴取した。この質問は選択回答式としたが、「その他」という選択肢を選んだ上で大変だったことを自由に記述させた内容も含め、下の表 5 に示す。

表 5 「大変だったことは何ですか。(質問 4)」の結果

回答選択肢		学生数
仕事がつまらなかった		0
仕事が忙しかった		0
仕事が難しかった		2
会社の人とのコミュニケーションが難しかった		3
通勤が大変だった		6
その他	暑かった	1
	インターンシップ先の立地が、つまらない場所だった	1
	ずっと立っていることが大変だった	1
	日本の小学生達が初めあまり話してくれなかった	2
特になし・無回答		6

外国人留学生を対象とした三重県内インターンシップ実践：留学生を対象としたアンケート結果から

表5にある回答の内、「日本の小学生達が初めあまり話してくれなかった」というものは、地域貢献団体（表1⑧）の地域小学生を対象とした夏季学習プロジェクトに関するものである。全ての回答の中で最も多かったものは「特になし・無回答」と「通勤が大変だった」の二つである。この内通勤については、インターンシップ先企業の立地と交通の便の問題であるので、解決することは難しい。その他の回答は全て少数であり、インターン留学生にとって概ね今回のインターンシップが負担とはならなかったことを窺わせる。

質問5では、自分が体験したインターンシップを、他の留学生に薦めるかどうかについて聴取した。結果、19人全ての留学生が「おすすめる」と回答した。その理由についても自由記述式で回答させたが、その結果をいくつかのカテゴリーに分けて下の表6に示す。

表6 「このインターンシップを、後輩の留学生におすすめしますか。  
（質問5）」の自由記述式回答の結果

回答（自由記述式）		学生数
社員が親切だから		1
日本語の勉強になるから・日本語をもっと勉強したいという気になるから		4
日本文化の勉強になるから		2
仕事内容を学ぶことができるから		7
仕事が楽しいから・仕事が興味深いから		2
仕事が簡単だから・仕事分かりやすいから		2
いい経験になるから・新しい経験ができるから・いい思い出ができるから		6
注意事項	人との交流が好きではない人には薦められない	1
	通勤に1時間（通勤代が2000円）かかるのが気になる人には薦められない	1
無回答		1

ここで挙げられている回答は、概ね表3に表される結果と重複しているが、回答数が大きく異なっているのは、表3で多数であった「社員が親切」、「仕事が楽しい・仕事が興味深い」という回答が少なく、「仕事内容を学ぶことができる」という回答が最も多くなっていることである。これは、インターンシップに参加した学生たちにとって最も印象に残ったことは「社員が親切」であり、「仕事が楽しく、興味深い」ことであった一方で、インターンシップに参加する意義は「仕事内容を学ぶことができる」ことにあると考えていることを示唆している。この捉え方は、就職や進路の決定に貢献するというインターンシップ本来の意義と一致するものである。

質問6では、自分が体験したインターンシップに他の留学生が参加することになった場

合の注意事項・アドバイスを自由に記述させた。回答をいくつかのカテゴリーに分けて下の表 7 に示す。

表 7 「このインターンシップを、後輩の学生がすることが決まったら、その後輩にアドバイスはありますか。(質問 6)」の結果

回答	回答の具体的な内容	学生数
持参すべき物についての助言	疲れにくい靴・着替えの服	3
	弁当	2
	宿泊に際して (シャンプーなど)	1
日本語に関する助言	通勤時の駅のアナウンスを注意して聞く	1
	「鉛筆」や「ハサミ」といった言葉を知っておく	1
	敬語を勉強しておく	1
	挨拶や自己紹介を考えておく	1
通勤に関する助言		3
ビジネスマナーについての助言		1
知っておくべき事柄についての助言		1
就業現場の施設・環境に関する助言		1
その他	緊張せず、気楽にすること	3
	仕事を頑張ること	3
特になし・無回答		3

表 7 に示される通り、持参すべきものについてのアドバイスが最も多かった。これは筆者らが次回のインターン留学生に伝えることができるもので、そのまま役立てられる情報である。また、日本語に関する助言の中で、「『鉛筆』や『ハサミ』といった言葉を知っておく」というものがあるが、これは、授業で教わることが少ない日常用品の名称に関するものである。大菅 (日本語教育学会中部支部研修会 発表 2018. 8. 24) が、日本の小学校に通う多くの外国人児童が、普段使っている「上履き」というものの名称を知らなかったという事例をあげ、一見して用途のわかるものの名称は覚える必要性がなく、また敢えて教わるものでもないという現象を報告しているが、「鉛筆」や「ハサミ」も同様の事例として解釈できる。こうしたものの名称は、教室外での生のコミュニケーションから学ぶ実用的な言葉であるという点で、インターンシップの語学教育上の効果が認められる。また、「挨拶や自己紹介を考えておく」という回答に関してであるが、挨拶や自己紹介などはインターンシップ前に実施したビジネス日本語講座で学習している筈の内容である。この回答からは、ビジネス日本語講座で扱っている内容が正しいことが確認できたと同時

外国人留学生を対象とした三重県内インターンシップ実践：留学生を対象としたアンケート結果から、こうした講座のインターンシップ参加学生の受講を徹底させることが必要であるという教訓が得られる。

質問7では、今回実施したインターンシップ事業に関して、学生視点からの改善点などの指摘を求めた。自由記述回答であったが、回答をいくつかのカテゴリーに分けて下の表8に示す。

表8 「このインターンシップについて、「改善したほうがいい」、「直したほうがいい」と思うことは何ですか。(質問7)」の結果

回答 (自由記述)		学生数
インターンシップ期間をもっと長くするべき		4
インターンシップの時期を大学の授業がない時期にするべき		1
その他	インターンシップ先に宿泊施設が欲しい	1
	インターンシップ先に宿泊するにあたって、生活用品を揃えて欲しい	1
	通勤手当が欲しい	1
	もっと色々な仕事をさせて欲しい	1
	日本語面での準備を充実させて欲しい	1
	インターン留学生は二人以上いたほうがいい	1
特になし・無回答		9

「特になし」という回答が最も多いが、意外にも「インターンシップ期間をもっと長くするべき」という回答が4人の留学生から寄せられた。前述の通り、2017年度にインターンシップに参加した3人中2人、そして2018年度に参加した20人中11人の留学生が、インターンシップ応募時に日数の短縮を希望しているが、上記表8で「インターンシップ期間をもっと長くするべき」と回答した4人の学生の内3人は、応募時にインターンシップ日数の短縮を希望した学生である。この回答のミスマッチは、複数の学生が、インターンシップに参加することが不安で短い日数を希望して応募したが、実際にやってみると「もっとやりたい」と感じたということを示唆している。一方、筆者ら企画・運営をする側にとっては、はじめからインターンシップ期間を長く設定すると応募者が少なくなるかもしれないという不安がある。この問題に対しては、インターンシップの実施を重ねるに連れ、留学生の間で「インターンシップは良いものだ」という評判が広まり、その結果日程短縮を希望する留学生が減ることを待つといった受動的な対応が現実的であると考えられる。

#### 4. 考察

今回のインターンシップに参加した留学生達を対象としたアンケート結果によると、イ

インターンシップでの就業経験を良かったとする留学生が多い。彼、彼女らがポジティブな印象を持った理由として最も多いものは受け入れ企業・団体の社員の親切さである(表3)。筆者らがインターンシップを実施する意義として挙げたものの一つは、大学の外での日本人との交流によって、留学生達の日本語演習、日本文化学習の場を与えることであったので、社員との交流が留学生の印象に強く残っているという結果は、本事業の成果としてカウントできる。また、最も直接的に日本語学習に寄与した結果として、「『鉛筆』や『ハサミ』といった言葉を知っておく」ことが必要だとする留学生の気づきがある(表7)。前述の通り、これは日本人なら誰でも知っているような言葉でありながら学習者が日本語の授業で教わる機会が少ない言葉であり、実際に日本で生活する上で実用的な語彙に関する学習である。ただし、インターンシップ修了後のアンケート作成に関しての反省点として、留学生の日本語能力の向上を問う「インターンシップをして前よりも日本語がうまくなったと思うか」、「インターンシップをして学んだ新しい日本語の言葉は何か」といったような質問が欠けていたという問題があり、今後の課題としたい。

また、インターンシップに参加した留学生達が、「仕事内容を学ぶことができる」(表6)ことを理由として、他の留学生にインターンシップをお勧めすると回答していることが着目すべき点として挙げられる。これは、就職や進路の決定に貢献するというインターンシップ本来の意義と一致するものであり、インターンシップでの体験が留学生達にとっての職業選択や進路決定に貢献し得ることを示している。今回インターンシップに参加した留学生の大半が短期留学生であったことから、彼、彼女らがインターンシップ先企業または他の日本企業に就職する可能性は高くないが、三重大学の正規の学生である留学生がこうしたインターンシップに参加した場合、その留学生達の就職に大きく貢献する可能性がある。筆者らは今回のインターンシップを参加留学生の就職に直接寄与するものとしては実施していなかったため、インターンシップ修了後のアンケートには就職に関する質問は含まなかったが、今後のインターンシップ実施の際には「日本で就職することについて、インターンシップの前と後で自分の気持ちに変化があったか」、「今回インターンシップをした企業に就職したいと思うか」などといった質問を含め、留学生の就職意欲についてより直接的に検証したい。

## 5. おわりに

本稿は、2017年度から2018年度8月までに、三重大学地域人材教育開発機構グローバル人材教育開発部門が実施した外国人留学生対象インターンシップ事業について、特に参加留学生を対象としたインターンシップ修了後アンケートの結果を報告したものである。

外国人留学生を対象とした三重県内インターンシップ実践：留学生を対象としたアンケート結果から

このインターンシップ事業では、留学生の学び、とりわけ日本語演習の機会と会社での仕事内容について学習する機会を与えることができた。また、今回、インターンシップ参加留学生の事前準備（ビジネス日本語講座など）や修了後アンケートの内容についていくつかの課題が確認された。今後こうした課題を解消し、インターンシップ事業の改善に努めたい。

#### 参考文献

就職情報研究会（2017）『就活のやり方 [いつ・何を・どう?] ぜんぶ！（2019年度版）』実務教育出版

正路真一・福岡昌子・松岡知津子（2019）「企業を対象とした留学生インターンシップ事業の実践：受け入れ企業へのアンケート結果から」『三重大学国際交流センター紀要』vol.15.

三浦一秋（2016）「インターンシップの教育効果についての分析－学習意欲向上と就業意識向上効果の観点から－」『インターンシップ研究年報』vol.19, pp. 1-10.

文部科学省・厚生省労働・経済産業省（2014）『インターンシップの推進に立っての基本的考え方』（[http://www.meti.go.jp/policy/economy/jinzai/intern/sanshou\\_kangaekata.pdf](http://www.meti.go.jp/policy/economy/jinzai/intern/sanshou_kangaekata.pdf) 2018年8月26日取得）

Zhang, S. (2009) The role of input, interaction and output in the development of oral fluency, *English Language Teaching*, 2 (4), pp.91-100.



実践報告

## 企業を対象とした留学生インターンシップ事業の実践： 受け入れ企業へのアンケート結果から

正路 真一・福岡 昌子・松岡知津子

### Internship project for companies with international students: Questionnaire-based research with companies

SHOJI Shinichi, FUKUOKA Masako, MATSUOKA Chizuko

〈Abstract〉

This report is based on a questionnaire that companies and organizations answered regarding their experiences of working with interns who were international students. The results indicate that responses from the companies and organizations are roughly positive, and they all are likely to accept future interns. On the other hand, authors found that we must solve some problems in this project, which include that student interns should acquire business manners and that we should research student interns' preferences about food.

キーワード：インターンシップ、留学生、日本語、ビジネスマナー、企業アンケート

#### 1. はじめに

近年、企業の採用活動の一環としてのインターンシップの普及が進んでいる。例えば2017年度においては、従業員が5000人規模以上の企業でインターンシップを実施している企業の割合が90%を超えている（就職情報研究会 2017）。このようにインターンシップが普及したのは、特に2016年度卒業生を対象とした採用スケジュールにおいて、それまで12月であった企業の広報活動の解禁が3月に変更されたことが大きな要因として挙げられる。学生と直接接することを3月まで待たざるを得なくなった企業側が、その前にインターンシップを実施し、企業の宣伝および優秀な学生の発掘を早期に行うケースが急速に増えたのである（就職情報研究会 2017）。

筆者ら三重大学地域人材教育開発機構グローバル人材教育開発部門教員は、特に外国人留学生を対象として2017年度からインターンシップを実施しているが、本稿はその取り組みについて、特にインターン留学生の受け入れ企業・団体を対象としたインターンシップ終了後アンケート調査の結果を報告するものである。当インターンシップに参加した学生の多くは短期留学生・交換留学生であり、またその多くは1週間程度の短期インターン

シップであるので、こうしたインターンシップを通じては、将来社員となる人材を育成・確保するという企業にとっての意義を担保することは不可能に近い(芦塚 2016)。それでもなお、筆者らが留学生を対象としたインターンシップを実施する意図としては、インターンの受け入れ企業側に、留学生のプレゼンスを認知させる効果を狙うという点が挙げられる。三重県における県民人口に対する外国人人口の割合は、2017 年時点で東京、愛知、大阪に次いで第 4 位であり(三重県ダイバーシティ社会推進課多文化共生班ホームページ)、大都市圏を除いては例外的に外国人の数が多き県となっているが、主に製造関係工場等での就業のために外国から直接雇用された外国人就業者がほとんどである。一方、三重県内の外国人留学生の県内就職率は低い数値に止まっており、例えば三重大学の外国人留学生の県内就職率は僅か 3.2% (日本全体での留学生就職率は 25.4%) となっている(外国人留学生雇用セミナー 三重大学キャリア支援センター課長 発表 2017.11.27)。三重県内の外国人就業者が多いにも関わらず外国人留学生の三重県内就職率が低いという事実は、多くの県内企業が、日本で大学等の高度教育を終了した外国人留学生を採用のターゲットとして認知していないという可能性を示唆している。筆者らの留学生を対象としたインターンシップは、企業側に、工場勤務などに限定せず、日本人と同じように働くという前提で外国人留学生を採用するという可能性を認知させることをその意図の一つとしている。

## 2. 三重大学の留学生対象インターンシップ事業について

### 2.1 概要

三重大学地域人材教育開発機構グローバル人材教育開発部門は、2017 年度から 2018 年 8 月現在に至るまで、下記表 1 にあるように、合計 23 人の留学生を、12 の三重県内企業あるいは団体にインターンとして派遣した(表 1 は正路・福岡・松岡 2019 から引用)。

### 2.2 インターンシップ受け入れ企業の確保

インターンシップ先となる企業・団体の確保については、筆者らが過去の諸活動で交流のあった企業・団体の社員・職員、または筆者らの人的コネクションを通じて紹介してもらった企業・団体にメールでコンタクトを取り、求められれば直接訪問して挨拶・説明をした上で、インターンシップ受け入れの了承を得るという形で進められた。インターン留学生の受け入れを了承した企業・団体に対しては、問い合わせアンケートに記入してもらい、担当者名と連絡先、就業場所とその場所への行き方、食費や交通費または宿泊にかかる手当の有無、留学生が持参すべきものおよびドレスコード、その他の注意事項などを確認した。

表1 インターンシップ参加学生と受け入れ企業一覧

受け入れ企業・団体の業種（インターンの就業場所）	インターン留学生（国籍・性別）	インターン留学生（短期・正規）	時期（日数）
①リゾート（美杉町）	中国人・男	短期留学生	2017年度2月（5日間）
②ホテル（鳥羽市）	中国人・女	短期留学生	2017年度2月（5日間）
	ベトナム人・女	短期留学生	
③国際交流団体（鈴鹿市）	イギリス人・女	短期留学生	2018年度6月（2日間）
	インドネシア人・女	生物資源学部 正規大学院生	2018年度7月（3日間）
④国際交流団体（津市）	台湾人・女	短期留学生	2018年度6月（5日間）
	ベトナム人・女	短期留学生	2018年度6月（3日間）
⑤ゲストハウス（志摩市）	フランス人・女	短期留学生	2018年度6月（5日間）
	中国人・女	短期留学生	2018年度6月（4日間）
⑥製薬会社（津市）	韓国人・女	短期留学生	2018年度7月（3日間）
	韓国人・女	短期留学生	
⑦食品会社（伊勢市）	タイ人・女	短期留学生	2018年度7月（3日間）
⑧地域貢献団体（津市）	中国人・男	短期留学生	2018年度8月（5日間）
	ベトナム人・女	短期留学生	
	ベトナム人・女	短期留学生	
	ロシア人・女	短期留学生	
	イギリス人・女	短期留学生	
⑨観光（鳥羽市）	中国人・女	短期留学生	2018年度8月（4日間）
	ブルガリア人・女	短期留学生	
⑩機械製造（津市）	ベトナム人・男	工学部 正規学部生	2018年度8月（10日間）
	韓国人・女	短期留学生	2018年度8月（3日間）
⑪英会話教室（津市・松阪市）	インドネシア人・男	生物資源学部 正規大学院生	2018年度8月（3日間）
⑫IT（松阪市）	アメリカ人・男	米国大学 学部生（過去の三重大学交換留学生）	2018年度5月～8月（3ヶ月間）

インターンシップ先企業・団体を開拓する中で筆者らが得た印象としては、企業・団体にインターンシップの受け入れに関して難色を示されるケースは少なく、概ね受け入れに協力的な姿勢を示してくれた。筆者らはインターン留学生を受け入れた企業・団体には謝金（1週間に1万円を基本とする）を支払ったが、1社を除き、インターンの受け入れに

ついて交渉する段階では謝金については伝えず、受け入れを了承してもらった後に謝金の支払いについての説明をした。それにも関わらず、多くの企業・団体は謝金の存在を伝えていない段階でインターンの受け入れを受諾した。(表 1⑥製菓会社については、謝金の受領を辞退した。)

前述の通り、特に短期留学生を対象としたインターンシップは、受け入れ企業にとってのメリットは少ない。日本人学生の就職活動の一環として実施されるインターンシップと違って、短期留学生がそのままインターンシップ先に就職することはほぼないと考えられるからである。それでもなお、企業が留学生のインターンシップ受け入れを了承する理由は、恒松 (2011) が報告するように「社会貢献のため」であり、企業としては留学生インターンの受け入れをコミュニティサービスの一環として捉えていると考えられる。

ただし、日本で社員として実際に働いている外国人が従事する業務として一番多いのは翻訳・通訳業務となっていることから (法務省 2017)、こうした業務が必要とされる企業については、外国人留学生のインターンシップが採用に関連づけられる可能性もあると考えられる。筆者らが行なった留学生インターンシップ受け入れ企業の中でも、表 1 の②ホテルに関しては、「インターンシップの時期を、特に外国人の観光客の多い 2 月 (東アジアに広く普及している旧暦の正月に当たる) に設定し、留学生インターンは中国語か英語が話せる学生に限定してほしい」という具体的な要望を受けた。こうした外国人としての強みが活かせる業務を行っている企業をインターンシップ先として開拓していけば、インターン留学生の将来的な就職にも繋がる可能性がある。

### 2.3 インターンシップ中の対応

留学生のインターンシップ期間中は、筆者らが必要に応じて受け入れ企業・団体とメール等で連絡を取り、問題がないかどうか確認した。その中で、インターンシップ期間中に、受け入れ企業の側から相談を受けたケースが二件あった。その内一件は、インターン留学生が、途中でインターンシップを切り上げたいと申し出たというものであった。企業側の説明によると、魚介類が苦手、賄いの海産物が食べられないといった事情もあり、インターンシップを楽しめていないのではないかとということであった。急ぎ筆者らが当該のインターン留学生に連絡を取ったところ、お金が足りなくなってきたこと、また人前で通訳するのが怖いことを理由に、インターンシップを短縮したいとのことであった。この学生にはインターンシップの短縮を認めることとしたが、こうした形での中止は礼を失することであり、受け入れ企業に不満感や不信感を与える可能性が高い。後述の通り、この受け入れ企業からは「事前にインターン留学生の食べものの好みを確認してほしい」という要

望が出されたが、食の面での事前調査が必要であることが確認された。

またインターンシップ期間中に受け入れ企業から連絡を受けたもう一件のケースは、インターン留学生の日本語能力が不足しており、社員の説明が良く分かっていないようであるが、このままインターンシップを続けさせるべきかどうかという相談であった。この留学生は工学部の学部生として、普段から大学で日本人学生に混じって大学の授業を受けている学生であるので、日本語の授業を中心に受講している短期留学生などと比べると日本語環境には慣れているはずである。しかし、大西（2008）が、日本人の中で生活している留学生が、日本人と自らを比較し、時が経つにつれて逆に自信を喪失していく事例を報告しているが、このインターン留学生もこの例にあたるかも知れない。つまり自信を失って、日本人と会話する時に自分は日本語が理解できていないことを前提として受け入れてしまっている可能性がある。この受け入れ企業からの連絡を受けて至急筆者らが留学生インターン本人に様子を聞くと、「社員の方々は優しく楽しいが、自身が日本語がもっと理解できればよかった」という返事であり、自分でも日本語能力の不足を感じているようであった。しかし短期留学生ではないこの学生の場合、日本人学生の場合と同じように将来の就職に直結するものとしてインターンシップを位置付けられるため、こうした学生のインターンは是非成功させたい。筆者らと当該企業の担当者とのやりとりの末、この留学生はとにかくインターンシップ期間を満了して終了させるということで合意した。

### 3. 実践報告：インターンシップ終了後の受け入れ企業・団体対象アンケート

インターンシップが終わった後、留学生インターンと受け入れ企業・団体を対象として、アンケートを実施した。この節では受け入れ企業・団体を対象としたアンケートの結果を報告する。インターンを受け入れた12の企業・団体全てから回答を受領した。また、二人の留学生が異なる時期にインターンシップに参加した一つの国際交流団体（表1③）に関しては、二人の留学生それぞれについて二枚のアンケートに記入してもらったため、回収したアンケート枚数は13となった。このアンケートで問うた質問は以下の8問である。

---

#### 質問1. インターンシップに対するご感想

- a. とても良かった
- b. まあまあ良かった
- c. 良くも悪くもなかった
- d. あまり良くなかった

- e. 全然良くなかった
- f. その他 ( )

質問 2. インターン学生の就業態度は全体的にどうでしたか。

- a. とても良かった
- b. まあまあ良かった
- c. 良くも悪くもなかった
- d. あまり良くなかった
- e. 全然良くなかった
- f. その他 ( )

質問 3. インターン学生が困っているようなことはありましたか。

- a. 仕事がつまらなさそうだった。
- b. 仕事が忙しく、大変そうだった。
- c. 仕事がむずかしく、大変そうだった。
- d. 会社の人とのコミュニケーションがむずかしそうだった。
- e. 通勤が大変そうだった。
- f. その他 ( )

質問 4. インターン学生の日本語能力はどうでしたか。

- a. とても良かった
- b. まあまあ良かった
- c. 良くも悪くもなかった
- d. あまり良くなかった
- e. 全然良くなかった
- f. その他 ( )

質問 5. 今後もしインターン学生を受け入れることになった場合、就業前に大学で教えておいてほしいこと、注意しておいて欲しいことがありましたらお書きください。

質問 6. 今後もしインターン学生を受け入れることになった場合、手続きのやり方等を含め、大学に対するご要望がありましたらなんでもお書きください。

質問7. 今後も学生のインターンシップを受け入れてくださいますか。

- a. 受け入れる
- b. 受け入れる方向で検討する
- c. 検討する
- d. 受け入れない
- f. その他 ( )

質問8. その他のコメント・感想などがございましたらお書きください。

---

質問1「インターンシップに対するご感想」と質問2「インターン学生の就業態度はどうでしたか」は、インターン留学生に関する感想を聴取したものである。これらの質問について選択回答式で得られた結果を、これらに丸をした企業の数併せて下の表2に示す。

表2 「インターンシップに対するご感想（質問1）」、「インターン学生の就業態度はどうでしたか（質問2）」の結果

回答選択肢	質問1「インターンシップに対するご感想」	質問2「インターン学生の就業態度はどうでしたか」
とても良かった	8	9
まあまあ良かった	5	4
良くも悪くもなかった	0	0
あまり良くなかった	0	0
全然良くなかった	0	0
その他	0	0

上記に示されるように、外国人留学生インターンシップに対する受け入れ企業・団体側の印象は概ね良かったという結果になっている。

質問3では、インターン留学生が困っているようなことがあったかについて聴取した。選択回答式で得られた結果を、下の表3に示す。

表 3 「インターン留学生在が困っているようなことがありましたか (質問 3)」の結果

回答選択肢		企業数
仕事がつまらなさそうだった		2
仕事が忙しく、大変そうだった		0
仕事が難しく、大変そうだった		0
会社の人とのコミュニケーションが難しそうだった		3
通勤が大変そうだった		1
その他	慣れない仕様の PC の仕様に苦労していた	1
特になし・無回答		7

受け入れ企業・団体側が、留学生在が困っていたと認知できた事柄は少数であり、困ったことは少なかったというインターン留学生的の感想 (正路・福岡・松岡 2019) と矛盾しない。企業側の回答と留学生側の感想との間でやや異なるのが、通勤の大変さについてである。インターン留学生的の中には、1 時間前後の時間をかけて電車を乗り継いで出勤する留学生も複数おり、そうした留学生からは通勤が大変であったとする意見が寄せられたが (正路・福岡・松岡 2019)、実際に就業している企業の社員にとって、その程度の通勤は困難であるとは判断されないことが反映されている。ただし、通勤についての学生と社会人の認識の違いは、外国人留学生に限ったことではなく、日本人学生においても同様である可能性がある。

質問 4 では、インターン留学生的の日本語能力について聴取した。選択回答式で得られた結果を、下の表 4 に示す。ただし、複数のインターン留学生を受け入れた企業が、各インターン留学生的によって別々の回答をしたものもあったので、表の中の企業数は、回収アンケート枚数 (13) と必ずしも合っていないことに留意されたい。

表 4 「インターン留学生的の日本語能力はどうでしたか (質問 4)」の結果

回答選択肢	企業数
とても良かった	8
まあまあ良かった	4
良くも悪くもなかった	0
あまり良くなかった	1
全然良くなかった	1
その他	0

留学生的の日本語能力については、概ね受け入れ企業・団体の期待に沿うものであったという結果になっている。「予想以上に日本語のレベルが高くて驚いた」と記述する受け入

企業を対象とした留学生インターンシップ事業の実践：受け入れ企業へのアンケート結果から

れ企業・団体も数社あった。1社のみ、留学生インターンの日本語能力が「全然良くなかった」とする回答があったが、これは、英会話教室（表1⑪）でのインターンシップに参加した留学生のものである。これは、英語能力さえあれば高い日本語能力は要求されない筈の業務であったので、筆者と受け入れ企業側は当該学生の日本語能力の低さについては事前に把握していた。ただ、このインターン留学生（インドネシア人）の英語能力の方も想定していたよりも低いレベルであつたらしく、この学生の英語能力と就業先で求められる英語能力とをチェックしていなかったのは筆者らの落ち度であった。

質問5では、インターンシップ留学生に事前に教えておいて欲しいことについて聴取した。この質問は、自由記述で回答してもらったが、回答の内容と回答数を下の表5に示す。

表5 「今後もしインターン学生を受け入れることになった場合、就業前に大学で教えておいてほしいこと、注意しておいて欲しいことがありましたらお書きください。（質問5）」の結果

回答（自由記述）	企業数
ビジネス日本語の教育（出退勤時の挨拶、電話の対応など）をして欲しい	2
ビジネスマナーの教育（名刺の渡し方、受け取り方など）をして欲しい	1
真面目な学生が欲しい	1
積極的に人との交流をする学生が欲しい	2
分からないことは理解したふりをせずに質問すべきだと教えておいて欲しい	1
食べ物の好き嫌い（特に海産物や魚介類）を確認しておいて欲しい	1
持参すべき持ち物を確認しておいて欲しい	1
特になし・無回答	8

表5にある「ビジネス日本語の教育（出退勤時の挨拶、電話の対応など）をして欲しい」、「ビジネスマナーの教育（名刺の渡し方、受け取り方など）をして欲しい」といった企業・団体の要望について、こうした項目はインターンシップ前に筆者らがインターンシップ参加留学生を対象に実施したビジネスマナー講座とビジネス日本語講座で既習のものである（正路・福岡・松岡 2019）。にも関わらずこうした要望が企業・団体から寄せられるということは、上記講座への留学生の出席率が低かったこと、あるいは講座を受講した留学生が学習したことを実践の場で生かしていないことを示している。今後の取り組みにおいて徹底すべき課題である。また、表にある「食べ物の好き嫌いを確認しておいて欲しい」といった要望に関しては、前述の通り、受け入れ先企業が提供する賄いに含まれる海産物を、インターン留学生が食べられないという事情があった。今後インターン留学生を派遣する際には、宗教やアレルギーなどの情報も含め、食べ物の好き嫌い等を確認する必

要があるという教訓が得られた。

質問 6 では、インターンシップに関する手続き等、筆者ら実施担当教員に対する要望について聴取した。この質問も自由記述で回答してもらったが、回答の内容と回答数を下の表 6 に示す。

表 6 「今後もしインターン学生を受け入れることになった場合、手続きのやり方等を含め、大学に対するご要望がありましたらなんでもお書きください。(質問 6)」の結果

回答 (自由記述)	企業数
事前にインターン留学生の日本語のレベルを教えて欲しい	2
事前にインターン留学生と面接する機会が欲しい	1
事前にインターン留学生の、仕事の内容に関する要望を教えて欲しい	1
事前にインターン留学生、大学、受け入れ企業の情報共有を徹底して欲しい	1
インターンシップ期間中に、企業と大学が面談する機会が欲しい	1
インターンシップ期間を延長して欲しい (最低 1 週間)	1
インターン留学生が女性の場合、その国の習慣や女性特有の悩み、メンタルな問題などをサポートする仕組みが欲しい	1
日本語能力試験 2 級以上の取得者のみをインターンの条件として欲しい	1
特になし・無回答	7

「事前にインターン留学生の日本語のレベルを教えて欲しい」、「日本語能力試験 2 級以上の取得者のみをインターンの条件として欲しい」という要望については、ある意味簡単に対応できることではあるが、適切な対応が難しいとも解釈できる。一般的に言って、例えば大学で上級レベルと判定されている日本語学習者も、実務経験がない留学生がほとんどであるため、実務で使える日本語能力を備えている留学生は極めて少ない (恒松 2011, 2014) というのが実情だからである。留学生インターンの日本語能力試験の取得状況や三重大学でのクラスレベルを伝えること、またアルバイトなどで日本人の中で仕事をした経験があるかなどを伝えることで対応するのが現実的な策であると思われる。「事前にインターン留学生と面接する機会が欲しい」、「事前にインターン留学生の、仕事の内容に関する要望を教えて欲しい」、「インターンシップ期間中に、企業と大学が面談する機会が欲しい」という要望は、企業の、留学生受け入れに対する積極的な姿勢、充実した内容のインターンシップを実施したいという姿勢を反映していると考えられる。特に「インターン留学生の仕事に関する要望」と「インターンシップ期間中の大学との面談」に関するものは同じ一つの企業 (表 1 ⑫) から出された要望であるが、この企業は、今回のインターンシップの中で唯一外国人学生の長期インターンシップ (3 ヶ月) を受け入れた IT 企業で、将

企業を対象とした留学生インターンシップ事業の実践：受け入れ企業へのアンケート結果から

来的に当該のインターン学生を正式に採用したいという意思を示す段階にまで話が進んだ。これは三重県内の中小企業が、外国人学生の能力が就業するに足るレベルにあると判断したということであり、今回のインターンシップ事業の大きな成果となるべきものである。ただし、この企業でのインターンシップに参加した外国人留学生在が、待遇面を理由に就職することに難色を示している。今後も継続して当該学生との意見交換を続ける予定である。

また、「インターンシップ期間を延長して欲しい」という要望については、別稿（正路・福岡・松岡 2018）でも述べたが、実際、募集時には1週間未満の短期インターンシップを希望する学生が多いため、筆者ら企画・運営側にとっては、インターンシップ期間を長く設定すると応募者が少なくなるかもしれないということが懸念される。対応策としては、従来通り、一週間程度のインターンシップを設定し、留学生在が日程の短縮を希望すれば、これに応じざるを得ず、一週間程度のインターンシップが苦ではないという評判が留学生在の間に広まるのを待つしかないと思われる。

質問7では、今後も留学生在のインターンシップを受け入れる意志があるかどうかを確認した。この質問について選択式回答で得られた結果を下の表7に示す。

表7 「今後もインターン留学生在を受け入れますか。(質問7)」の結果

回答選択肢	企業数
受け入れる	10
受け入れる方向で検討する	3
検討する	0
受け入れない	0
その他	0

表7に示される通り、すべての企業・団体が「受け入れる」または「受け入れる方向で検討する」と回答した。この結果から、少なくとも今後の受け入れが拒否されるような評価を今回のインターン留学生在達が与えられなかったことが確認できるものであり、来年度のインターンシップ事業継続を保証するものである。

質問8では、コメント、要望などを自由に記述してもらった。回答の内容をいくつかの категорияに分けて下の表8に示す。

表 8 「その他のコメント・感想 などがございましたらお書きください。(質問 8)」の結果

	回答 (自由記述)	企業数
ポジティブな回答	一生懸命・真面目に仕事に取り組んでいた	7
	分からないことはその場で質問して解決するという積極性があった	1
	常識を備えていた	1
	一緒に働いて楽しかった	1
	日本語のレベルが高かった	2
ネガティブな回答	消極的・遠慮がちだった	2
	日本語のレベルが低かった	1

企業・団体からのコメントは、インターン留学生に対する評価が概ね高いことを示している。「一生懸命・真面目に仕事に取り組む」という要素は、就業に参加するものとして最低限の資質であると思われるが、「分からないことはその場で質問して解決するという積極性があった」、「常識を備えており、このレベルの学生であったら今後も問題ない」、「一緒に働いて楽しかった」、そして「消極的・遠慮がちだった」という回答については、究極的にはそれぞれの学生の人間性に寄るとと思われる。一方、「日本語のレベル」に関しては、普段の教育とビジネス日本語講座などで筆者ら教員が最も直接的に寄与できる部分である。

#### 4. 考察

受け入れ企業・団体を対象としたアンケート結果からは、インターン留学生に対する全体的な印象 (表 2, 8)、インターン留学生の日本語能力 (表 4) などに関して好意的な反応が認められ、今後も留学生インターンを受け入れるまたは受け入れる方向で検討するという回答が得られたことは収穫であった。ただし、受け入れ企業・団体の回答から今後筆者らが徹底すべき課題として、インターン留学生を事前学習として実施しているビジネス日本語講座に出席させるという点がある。事前学習で既習の筈の内容が、受け入れ企業・団体から「事前に学習させておいて欲しいこと」として要望に挙げられているのは反省すべき点であり、比較的容易に改善できる点である。

また、アンケートの作成に関する課題として、今回のアンケートには、留学生を実際に就職させることについての企業の意識を問う質問がかけていたことが挙げられる。今後の留学生インターンシップの際には、「今回インターンシップに参加した留学生が御社に就職したらやっていけると思うか」、「今回インターンシップに参加した留学生が御社に就職することを希望していると仮定した場合、現時点でこの学生に欠けているものは何か」と

企業を対象とした留学生インターンシップ事業の実践：受け入れ企業へのアンケート結果から

いった質問も加えていきたい。

## 5. おわりに

本稿は、三重大学地域人材教育開発機構グローバル人材教育開発部門が実施した外国人留学生対象インターンシップ事業について報告したものである。このインターンシップ事業では、三重県内の企業・団体に、高度教育を終了し、高い日本語能力を持った外国人留学生の存在を、潜在的な採用のターゲットとして認知させることができた。現在三重県では15歳~25歳の年齢層の人口の県外への流出が進み（三重県 2017）、特に県内の中小企業が人材確保に悩むケースが増えている。これは若者達の大都市志向を反映するものであるが、対照的に三重県内大学の留学生は、日本での就職を希望する留学生の中の53%が「就職する地域にはこだわらない」とし、そして43%が「就職先企業の規模を問わない」としている（福岡 2015）。こうした報告は、地方の中小企業の人材不足を埋めるリソースとして大きなポテンシャルを持っている。筆者らが継続してインターンシップ事業を実施することで、外国人留学生の三重県内企業への就職に繋げたい。

## 謝 辞

今回、お忙しい中、留学生のインターンシップを快く受け入れてくださった企業・団体の皆様に心よりお礼申し上げます。

## 参考文献

- 芦塚格（2016）「長期実践型インターンシップが中小企業に与える効果にかんする探索的検討」『商経学叢』vol.63, pp.95-115.
- 大西好宜（2008）「インターンシップにおけるコミュニケーションの重要性：国際連合大学・留学生支援プログラム（UNU-FAP）を題材として」『学習院女子大学紀要』vol.10, pp.1-33.
- 就職情報研究会（2017）『就活のやり方 [いつ・何を・どう?] ぜんぶ！（2019年度版）』実務教育出版
- 正路真一・福岡昌子・松岡知津子（2019）「外国人留学生を対象とした三重県内インターンシップ実践：留学生を対象としたアンケート結果から」『三重大学国際交流センター紀要』vol.15.
- 福岡昌子（2015）「留学生の就職に関する意識調査とビジネス日本語教育への示唆」『三重大学国際交流センター紀要』vol.10, pp.1-18.
- 三重県（2018）「三重県の人口移動状況（社会減）について」『Hello!とうけい』vol.246 (<http://www.pref.mie.lg.jp/DATABOX/000217003.htm> 2018年8月26日取得)
- 三重県（2018）「H 29 外国人住民調査結果詳細資料」(<http://www.pref.mie.lg.jp/common/content/000767191.pdf>)



実践報告

## 「グローバル人材育成」における産学官連携の可能性 ～出口治明氏（立命館アジア太平洋大学学長）を迎えて～

栗田 聡子

**The potentials of industry-university-government collaboration  
for globally competent human resources education – Inviting Mr. Haruaki Deguchi**

KURITA Satoko

〈Abstract〉

In October 17 of 2018, the Center for International Education & Research of Mie University invited Mr. Haruaki Deguchi, President of Ritsumeikan Asia Pacific University and offered “Seminar for globally competent human resources” to students, faculty and staff. The event owes the success not only to President Deguchi’s excels in scholarship and wisdom, but also to the industry-academia-government collaboration with Mie Prefectural Government and Chubu International Airport Promotion Council. Since such collaboration was the first attempt for the center, this paper reports on the event including introduction of the Council and pre and post questionnaire collected from the participants. Answers in post questionnaire shows that many students were strongly inspired and encouraged by President Deguchi’s words and way of thinking. The importance to promote industry-university-government collaborations for globally competent human resources education is discussed.

キーワード：グローバル人材教育、産学官連携、国際交流

### 1. はじめに

不可逆的に加速する世界のグローバル化を背景に、世界各国の大学機関は国家プロジェクトとしての「留学」の必要性を強調している。日本は「グローバル人材育成推進会議」を2012年に設置、国家の成長を支えるグローバル人材の育成と活用が重要な課題であると提言した。「失われた20年」と呼ばれるように、バブル崩壊以来、経済的・社会的停滞を経験している日本においては、国の牽引力になりうる国際的に活躍できるグローバル人材は、経済界だけでなく学術や政治を含めた様々な分野で切望されている。それは、「産業・経済の急速な高度化・グローバル化の中で、我が国がこのまま極東の小国へと転落してしまう」（グローバル人材育成推進会議，2012，p.10）ことを回避するためでもあるとされている。

国の要請に応じ、各高等教育機関は「グローバル人材育成」を推進するべくカリキュラムの見直しや外国教員の増員、語学留学や海外研修に参加するよう学生を促すことに尽力してきた。三重大学は「三重の力を世界へ」をスローガンに、地域創生貢献大学でのナンバー・ワンを目指しており (三重大学, 2019)、地球規模の視野から地域の課題に取り組める「グローバル人材」の育成に力を入れている。

しかしながら、「グローバル人材 (財)」という言葉が多用されている割には、学生がその実体を把握し、必要性を明確に理解しているかという疑問である。「グローバル人材とは?」「どうして必要なのか?」「そのような人材になるために、今すべきことは?」等の問いに対し、深い教養を基盤に、長年にわたる実務経験から答を構築してきた人物が、「学生にわかりやすい言葉で」語る機会が望まれる。そのような知的人物から発せられる言葉は学生にとって「リアル」な響きで説得力を持つだけでなく、「不透明な未来」を生きる彼ら (と大学組織) に指針を与えてくれるものとなるかもしれない。本学国際交流センターはその必要性も考慮し、中部国際空港 (セントレア) の若者層渡航促進に携わる三重県庁地域連携部交通政策課との共催で三重大生を主に対象とした「グローバル人材セミナー」を 10 月に開催した。セミナーの講演者は「知の巨人」と称され、メディアでも注目されている立命館環太平洋大学 (APU) の出口治明学長であった。本編はその実施内容の報告とともに、セミナー開催の実現を可能にした産学官連携のグローバル人材教育に対する有効性について検討していく。

## 2. グローバル人材 (財) とは

前述の「グローバル人材育成推進会議」(2012)において、「グローバル人材」の定義そのものについては、明確な記述が見られない。そのかわり、必要な「素養」が主に 3 つの要素に分類されており、要素Ⅰ：学力・コミュニケーション能力、要素Ⅱ：主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命感、要素Ⅲ：異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティ、であるとされている。他に必要な資質としてあげられているのが、「幅広い教養と深い専門性、課題発見・解決能力、チームワークと異質な者の集団をまとめるリーダーシップ、公共性・倫理観、メディア・リテラシー等」(p 12)である。

それらと共に、本学は地域創生貢献を第一の目標としていることで、グローバルな視点から地域の発展や課題に取り組む「グローバル」な思考ができる学生を育成していく役割と義務がある。だが、果たして異なる資質や才能を持つ学生らが社会に出る前にこれだけの素養を一様に持つことができるのか、持つ必要があるのか、については別の議論が必要

「グローバル人材育成」における産学官連携の可能性～出口治明氏（立命館アジア太平洋大学学長）を迎えて～であろう。それら全ての要素を身に着けることを期待される側の学生に漠然とした不安を与えるだけかもしれない。大学時代という貴重な時間の中に生きる彼らが「今」をどのように過ごすべきなのか、説得力をもって指針やヒントを与えることができる知識人の言葉が必要である。

### 3. 中部国際空港利用促進協議会の設立と同空港の課題

出口浩明学長を招聘しての「グローバル人材セミナー」を可能にしたのは中部国際空港利用促進協議会とそのメンバーである三重県庁、三重大学国際交流センターとの産学官連携とも言えるタイアップである。中部国際空港利用促進協議会は2001年に設立、東海3県と名古屋市、（一社）中部経済連合会、名古屋商工会議所、中部国際空港(株)および関係企業・団体等から構成されている。設立の目的は、「周辺地域が一体となり、中部国際空港セントレアの利用促進・活用等の取り組みを推進し、十分にその機能を発揮させる」（中部経済連合会、2019）こととされている。

近年、セントレアにはLCCの新規就航や増便が相次ぎ、2019年にはLCC向けの新たなターミナルも設立されるなど事業規模は拡大している。だがその一方で、中部国際空港利用促進協議会の会議資料（2017年7月）によると、1997年以降、全体的に20歳代の出国者数が減少しており、1997年と2016年対比で37%減（▲169万人）との報告がある。2016年度における20歳代の出国率は、愛知で約24%（ほぼ全国平均）で、岐阜県は約22%、三重県は約20%と、東海三県で三重県は最下位である。この東海三県の現状を改善するためには、若年層のアウトバウンド数の減少をくい止めることが課題であると協議会で議論され、2016年度以降、愛知県下では「大学」×「セントレア」×「LCC（航空会社）」という産学（官）連携の施策のもと様々なタイアップ企画が実施されている（表1）。

基本的に、グローバル人材教育を担う教育機関と国際空港や航空機の利用率向上を目指す機関はお互いの役割と目的において相性が良い。表1にあるような連携授業は、国際空港と航空会社にとっては経済的な促進事業であるが、その事業を通して大学は学生の国際感覚を高め、海外留学を含めた海外渡航へ踏み出すきっかけを作ることができる。また、国際空港や航空会社が抱える課題をテーマとした実践的な教育は、将来国際空港や航空会社への就職を希望する学生には、就職準備のための貴重な機会にもなりえる。留学生とのワークショップでは、日本人学生が英語などの語学を通じて国際交流できる場も提供することが可能である。これだけの利点だけでも、国際空港の利用を推進する機関と大学とのタイアップはグローバル人材育成を推進していく上で大いに意義があり、ステークホルダー間での相乗効果も期待できる枠組みであると言えよう。

表 1. 2016 年度 中部国際空港利用促進協議会による若年層渡航促進事業 (一部)

イベント	イベント内容
海外渡航セミナー	南山大学：海外渡航者の体験談
連携授業	名市大×エアアジア・ジャパン：インバウンド施策共同研究 名大×デルタ航空：留学生とのワークショップ 愛知大×タイガーエア台湾：日台学生交流プロジェクト 名城大×エアアジア・ジャパン：産学連携授業 講師登壇 淑徳大×ジェットスター・ジャパン：産学連携事業 講師登壇 名商大×エアアジア・ジャパン：キャリアセミナー 日福大×エアアジア・ジャパン：キャリアセミナー
パスポート取得応援 キャンペーン	セントレアから海外渡航する旅行者の中から期間中にパスポート新規取得・更新する人を対象とし、抽選で 100 名に 1 万円分の電子マネーをプレゼント。
「はじめての旅」	高校・大学・イベントで 5,000 部発行。(改訂発行)

\* 中部国際空港利用促進協議会資料より

2016 年度以降、愛知県下の大学でこの若年層渡航促進事業が継続されている事実 (セントレア, 2019) は、大学関係者が産学 (官) 連携の価値を認識し、同時に国際空港と航空会社がターゲット層に直接働きかける場を提供できる高等教育機関との連携を重要視していると推測できる。

#### 4. 出口治明学長 (APU) 招聘への経緯

出口学長は三重県津市 (旧：美杉村) 出身で、公募により 2018 年から立命館アジア太平洋大学 (APU) の第四代学長に就任している。京都大学卒業後に大手生命保険会社に勤めた後、ライフネット生命保険 (株) を創業した経歴の持ち主である。

APU は 2000 年に「自由・平和・ヒューマニズム」「国際相互理解」「アジア太平洋の未来創造」を基本理念として大分県別府市で創立された私立大学であり、現在では教員も学生も約半数が外国人という国内では比類ない多文化共生キャンパスを構築している (APU, 2018)。そのグローバル人材教育を牽引する APU が出口氏を学長に選出したのはビジネスの手腕だけでなく、類まれな教養によるものと評されている。読書と旅を愛し、訪れた世界の都市は 1200 以上、読んだ本は 1 万冊を超える (出口, 2017) とのこと。特に歴史への造詣が深く、過去には京都大学の「国際人のグローバル・リテラシー」特別講義では歴史の講座を受け持ち、東京大学総長室アドバイザーも務めた経歴もある。著書は、話題作の『仕事に効く教養としての「世界史」』(2014)「人生を面白くする 本物の教養」(2015)『「働き方」の教科書』(2017)をはじめ、近著の「知的生産術」(2019) など過去 20 冊以上にも及ぶ。

「グローバル人材育成」における産学官連携の可能性～出口治明氏（立命館アジア太平洋大学学長）を迎えて～

出口学長は三重県出身ということもあり、かねてからサミット関連のイベントをはじめ、三重県知事や津市長との対談などに参加しているが、本学での講演会は未だ実現されていなかった。著者は以前から出口学長の卓越した教養と精神性に注目しており、時代のリーダーである出口学長のグローバルな視点や考え方というものを本学の学生に直接共有してほしいと望んでいたが、予算的な制限もあり実現には至っていなかった。そのような折、5月に県庁交通政策課の職員の方から若年層渡航促進事業についての説明と、出口学長が10月に県庁の「若手・中堅職員養成塾」での講演のために来県されるとの情報を得た。そこで、その機会を契機にし、県庁での講演の前に出口学長を事業の予算で本学へ招聘させていただく企画となった。イベントのタイトルは『グローバル人材育成セミナー「今」だからできること、すべきこと。』と、大学生の「今」という時間の尊さに訴えるものとした。出口学長の講演の他に、若年層渡航促進事業の一環として、県庁より海外渡航キャンペーン等について案内する時間も設けることとなった。

## 5. 参加者の募集

セミナーの参加者は三重大学の学生と留学生を中心に約60名を設定し、本学と三重県庁のHP、そして学内一斉メールで募集した。出口学長を招聘できる貴重な機会であるので大ホールで地域住民の方々にも公開した方が良いのでは、という声も上がる中、比較的少人数に限定した。その主な理由は、①ターゲットを「学生」に限定して「グローバル人材教育」のテーマに絞るため、②出口学長と学生との間を表情まで伝わる距離にするため、③質疑応答の時間に学生が質問をしやすいするため、そして、④環境・情報科学館のPBL空間を使用するためであった。環境・情報科学館（メープル館）は3階に開放教室があり、主に問題発見・解決型学（PBL）を実践する授業で使用されている。環境に配慮した設計であるだけでなく、デザインが開放的で温かい場の雰囲気を作りやすい（写真1）。加えて、



写真1. 会場に使用した環境・情報科学館3F

三重大学国際キャリアアップ

だからできること、すべきこと。

「今、求められるグローバル人材とは？」  
この度、三重県出身でビジネスの国際舞台で活躍された経歴を持つ出口治明氏（立命館アジア太平洋大学学長）をお招きし、学生を対象にお話いただくことになりました。  
高校生の皆様のご参加もお待ちしております。  
【無料・事前にお申込みください 締切10/4（木）】

グローバル人材育成セミナー  
日時：2018年10月17日（水）  
15:30～17:00 ※15:10～受付 15:30～主催者より  
※16:00～北学生発表会  
会場：三重大学 環境・情報科学館 3階  
三重大学国際キャリアアップ推進協議会の定員枠内分  
定員：60名（先着順）※定員に達し次第、締切させていただきます。

出口治明氏（立命館アジア太平洋大学 学長）  
1948年、三重県美杉村（現・津市）生まれ。1972年に京都大学法学部を卒業して日本生命保険相互会社に入社し、ロンソン現地法人社長、国際業務部長などを歴任。2008年にラオスファクトリー生命保険株式会社を創業し、代表取締役社長に就任。同社代表取締役会長を2017年に退任し、2018年1月から立命館アジア太平洋大学学長に就任。

参加のお申込み：右記QRコードを読み取り、応募フォームからお申込みください。  
お問い合わせ：三重大学国際交流チーム E-mail: kokusai@ab.mie-u.ac.jp  
主催：国立大学法人三重大学・三重県（中部国際空港利用促進協議会）

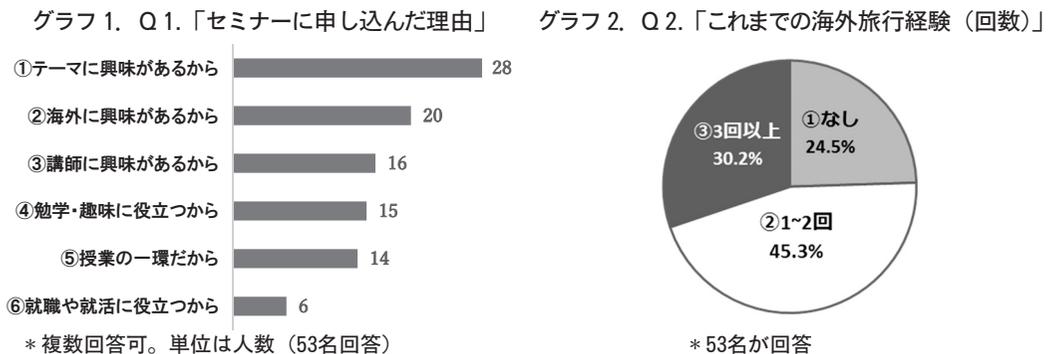
図2. イベント周知用ポスター

セミナー開催日は一部の学生が参加を義務づけられたインターンシップ説明会や本学がホストを務める学会等イベントが多く、開催の時間枠は多くの授業とも重なることから、残念ではあるが参加可能な学生はそう多くないと予測していた。

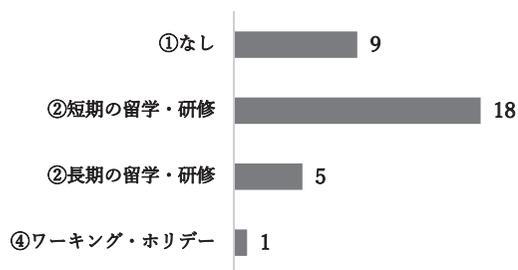
大学と県庁の HP で掲載する周知用のポスターは、8 月中旬頃、本学の大学院生に作成を依頼した。彼女はかねてからデザインの美しい研究発表用のスライドやポスターを作成しており、参加者の年代にアピールできるポスターをデザインできると期待してのことである。タイトルの「今」がマークとして強調され、タイトルにあわせて時計をデザインに組み入れるなどの工夫もあり、全体的に温かい雰囲気のパoster が作成された (図 2)。セミナーの時間 (15 時 30 分から 17 時) から高校生の参加は難しいと予測していたが、事務チームからの提案もあり「高校生の皆様のご参加もお待ちしております」の一文を加え、応募を待った。募集の結果、グーグル・フォームからの応募者は計 53 名で (日本人学生 29 名、留学生 23 名、教職員 1 名: 当日の教職員数は 16 名)、残念ながら、高校生からの応募は皆無であった。留学生は、日本語レベルが上級のアジアからの学生が大半で、日本人学生との交流の場を設けるため、同時刻に開講されている国際交流センターの授業の日本語教員に参加を要請していた。当日の司会は 2 名の大学院生 (インドネシアからの男子留学生と日本人女子学生) に依頼した。グローバルな雰囲気を作り、国際交流を促進させるためである。

## 6. 事前アンケートの結果: 過去の海外渡航歴と留学への興味等

当日 68 名の参加者のうち、53 名の参加希望者は、国際交流チームが作成したグーグル・フォームから登録を行い、アンケートに答えた。内容は、国際交流センターが事前に把握しておきたい個人の渡航歴や留学への興味、そして県庁交通政策課が過去の若年層渡航促進事業等で使用した質問を組み合わせたものである。結果は以下の通り。

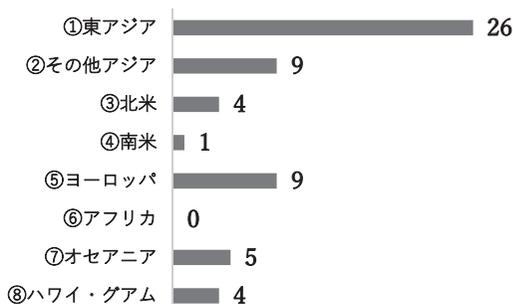


グラフ 3. Q 2-1. 「これまでの海外旅行経験（目的）」



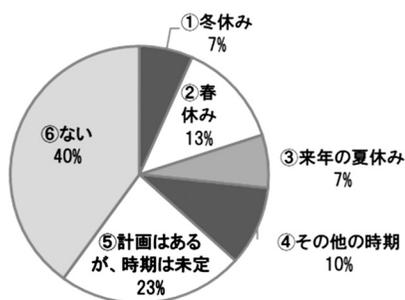
\* 複数回答可。単位は人数（33名回答）  
\* その他、自由回答には「学会」「観光」「父の仕事」があった。

グラフ 4. Q 2-2. 「これまでの海外旅行経験（国）」



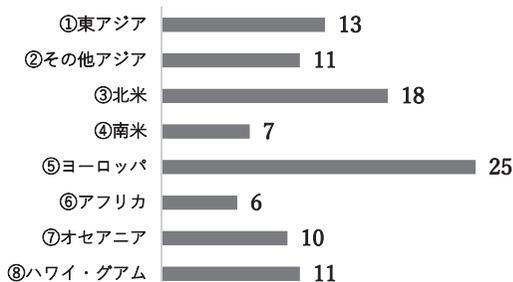
\* 複数回答可。単位は人数（33名回答）  
\* 東アジア（中国、台湾、香港、マカオ、韓国、北朝鮮、モンゴル）

グラフ 5. Q 3. 「これからの海外渡航の計画（時期）」



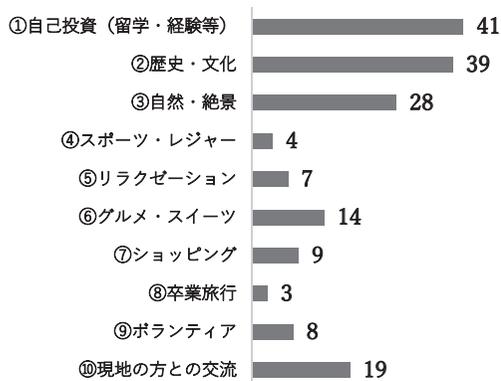
\* 30名が回答

グラフ 6. Q 3-1. 「行ってみたい海外の地域」



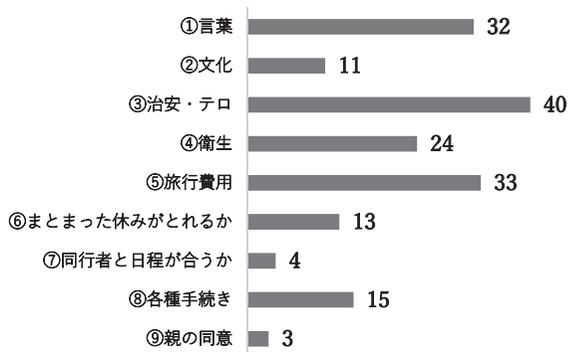
\* 複数回答可。単位は人数（35名回答）

グラフ 7. Q 4. 「海外旅行の目的や興味等」



\* 複数回答可。単位は人数（53名回答）  
\* その他、自由回答には「学会・調査」、「様々な現地の人々の価値観を知りたい」があった。

グラフ 8. Q 5. 「海外旅行で不安な点」



\* 複数回答可。単位は人数（53名回答）

**Q6. 「講演者の出口学長に、質問したい事は何ですか？自由にお書き下さい。」**

回答された質問を、内容により 3 つに分類した。

<留学・異文化交流について>

- 三重県のような地方都市に生まれた子どもたちが、海外に目を向け飛び出していくために必要な資質について、具体的な経験から考えられることをお聞かせください。
- 私は海外に憧れがあるものの、語学学習が苦手です。出口さんはニッセイ時代、海外で活躍されていたそうですが、語学面はどのように勉強していましたか？
- 異なる文化圏の方々と交流する際、文化の違いという壁を乗り越えるためにはどうすべきだとお考えですか。やはり互いの文化について学ぶことが一番なのでしょう。
- 海外で吸収するべきこと（語学力を除いて）は何ですか。また逆に日本人として海外の人に伝えるべきことは何ですか。

<社会に出てからの成長と生き抜く力について>

- これから社会に出て求められる力は何だと思えますか？
- 今の、そして 10 年後のグローバル社会を生き抜くために必要な力。10 年後勝ち上がるために何をすべきか。
- これから社会人になりますが、社会人になってからは休み等も取りにくくなってくると思います。4 年生の残りの期間や社会人になってからでもできるグローバルな人材への成長の方法などあれば教えてください。
- 休学して留学に行く。会社を辞めワーキング・ホリデーに行く。これらに対して世間は冷たい目で見がちで就職が不利になりがちです。これについてどのようなお考えをお持ちですか。

<読書や教養について>

- 読書のようにインプットばかりでは記憶に残らないと思うが、どのようなアウトプットがお勧めでしょうか？
- 学長が大事にしてきた考え方。

**Q7. 「三重大学に希望（期待）することは何ですか？自由にお書きください。」**

<留学や研修について>

- 中期（3 か月程度）の留学・研修プラン、留学の奨学金やサポートの充実。
- もっと日本人学生に対する留学支援などを手厚くしていただけると嬉しいです。
- 1 年生の時に短期留学に行かせていただきました。これからもそのような体験を後輩の子たちにもできるよう、お願いしたいです。

「グローバル人材育成」における産学官連携の可能性～出口治明氏（立命館アジア太平洋大学学長）を迎えて～

<留学生との交流について>

- 海外にさほど興味がなくても留学生と交流できる機会を設ける。
- 国際交流センターや他学部の留学生との接点が少ないので、積極的に催しを実施してほしいです。

<講演会やイベントについて>

「講演会やプロジェクトの向上」「色々な講演会、サポート」

## 7. 「グローバル人材育成セミナー」の実施と内容

当日は15時10分から会場である環境情報科学館の3Fで受付を開始し、同館内の別室では30分ほど、出口学長を囲んで本学学長と国際交流センター長、副センター長との四者による意見交換会が行われていた。初対面ということもあって、出口学長の三重県での思い出にはじまり、APUの運営に関連した話題が上がっていたとのことである。セミナー会場では15時半から日本人（女子）とインドネシア人（男子）の大学院生が司会となり、出口学長を迎える前のアイスブレイキング・イベントを開始した。

### 第1部 アイス・ブレイキング（15：30～15：45）

受付時に参加者へ席番号を記載した紙を配り、3名掛けの机に着席してもらったため、前列に空席がでることはなかった。また、中央に留学生が着席するようにして日本人学部生と留学生との交流を促した。「これまでの訪問国の数」をグループごとに競うゲームを実施し、一番多くの国（6カ国）を訪問したグループには賞品を渡すなど、和やかな雰囲気づくりを行った。

### 第2部 若年層渡航促進のための情報提供（15：45～16：00）

大学生が世界を旅した動画で開始、県庁交通政策課の職員からグローバル人材の育成を含めた開催趣旨について説明がされた。セントレア利用の呼びかけとともに、「多様性」の理解がグローバル人材として重要であるなどの話も組み込まれた。LCC（格安航空会社）やFSC（既存の航空会社）の活用法やセントレアが企画している「旅券取得キャンペーン」等が紹介され、最後に伊勢志摩サミットで作成した三重県のPR動画を流して終了した。



(上) 司会の大学院生2名  
(中) 県庁職員による渡航促進案内  
(下) 出口学長による講演の様様

### 第 3 部 出口学長の講演会 (16:00~17:10)

#### ① 講演の主な内容

盛大な拍手が沸き起こる中、出口学長が登壇。学長は、数々の著書でも論じているとおり、タテ（歴史）とヨコ（世界）からの分析、そして感情よりも「数字・ファクト・ロジック」を基に思考することが必要だと言ひ、そのためには、人と会うこと、本を読むこと、旅をすることで様々な情報をインプットするとよい、と話した。その他、今の日本社会は、大量生産、大量消費に適した年功序列や一括採用に基づいており、戦後の製造業社会から「風呂・飯・寝る」という働き方がまだ継続されているが、GAFA（グーグル、アップル、フェイスブック、アマゾン）に代表されるように、柔軟な発想によるアイデア勝負の時代にはそぐわないと警告し、日本企業も、アメリカの大学のように「どれだけ学んだか」を測るため成績を重視しなければならない、と大学で真剣に学ぶことの大切さを強調した。参加学生らには、「好きなことがあれば極め、もし何がしたいかわからないのであれば、見つかるまでしっかり勉強すればよい。今すぐ始めて欲しい」等、数々のアドバイスを与えた。集中した雰囲気の中、出口学長のことばに熱心に耳を傾け、必死にノートをとる学生の姿もみられた。

#### ② 質疑応答

出口学長の話は 15 時 50 分頃に終了し、質疑応答に移行した。自ら質問する学生は少ないと想定して事前アンケートの「出口学長に質問したい事」リストを用意していたが、次々と手が挙がったのは嬉しい驚きである。出口学長は当初予定の 2 倍の時間をとって、質問をした学生全員に明快かつ丁寧な回答を与えてくださり、講演会は 10 分延長して終了。「他に質問がある方は立ち読みで良いので僕の本にのせているアドレスにメールください」と言い残し、感謝の拍手の中会場を去られた。質疑応答の内容は以下の通り。

質疑 1. (男子学生 A) 「ベーシックインカムについてどう思われますか？」

応答 (出口学長) : ゼロからスタートするならよいが、コストが高い。本「教養としての社会保障」の一読を。

質疑 2. (男子学生 B) 「タテ・ヨコの考えに至ったきっかけは何ですか？」

応答 (出口学長) : 人、本、旅。人間の考えはすぐ変わるものではない。毎日インプットをしっかりとやる繰り返して血肉となる。自分は本 50%、人 25%、旅 25% である。

質疑 3. (男子学生 C) 「将来起業したいのですが、アドバイスはありますか？」

応答 (出口学長) : 「天の時、地の利、人の和」という孟子の教えにあるとおり、人知を超えたものがある。自分が学長職に就いたこともそう。風が吹いた時にしっかり風が上がるよう自己投資をしておくことが大事である。

「グローバル人材育成」における産学官連携の可能性～出口治明氏（立命館アジア太平洋大学学長）を迎えて～

質疑 4. (男子学生 D) 「人文系不要論、理系系偏重」の風潮にあるが、どう思われますか？」

応答 (出口学長) : GAFA やユニコーンの創業者や経営者は文理両方の博士号を持つ者が多い。例えば自動運転には、その技術に加えて道路交通法や保険の見直しが必要なように、現実社会では文系、理系両方の頭脳が必要。文系、理系の区別があるのは日本だけである。

質疑 5. (男子学生 E) 「どうして公募で教育界に転身されたのですか？」

応答 (出口学長) : 他薦により学長に選ばれたので、諦めた。人間の運命は人知を超えており、それに従った。

質疑 6. (男子学生 F) 「(旧体質な会社で) どのようにクリエイティブになれますか？」

応答 (出口学長) : 組織風土を変えるには 1 人ではできない。4~5 人異分子がいると変わるの、仲間づくりが必要。

質疑 7. (女子学生 A) 「企業の足切り面接についてよく聞き、就活に不安を感じる。」

応答 (出口学長) : 大企業ほど硬い。今は売り手市場でもあり、変に妥協しないことが大切。

## 8. 事後アンケート結果 (セミナーについての感想等)

県庁交通政策課が受付時でアンケートを配布し、回収した回答結果 (41 名) を紹介する。

Q1. 今回のセミナーはいかがでしたか。その理由もお教えてください (役だった点やもっと知りたかった点等)。

(選択肢)

- ①大変満足
- ②やや満足
- ③普通
- ④やや不満
- ⑤大変不満

※ 「大変不満」を 1 名が選択したが、理由から

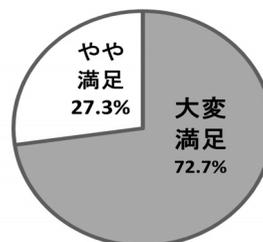
「大変満足」の間違いと判断し、変更した。

【理由「大変満足」を選択した学生】

<新しい知見や価値観、視点>

- 本を読めとやたらと言われる理由が、先生の講演をきいてよくわかりました。いろいろ勉強になりました。

グラフ 9. Q1. 「セミナーの満足度」



- 教科書以外のことをいろいろ知り、とても勉強になりました。
- 濃度が高い。普段と違う価値観にふれあえた。
- 新しい価値観が得られたから。
- 自分の世界が広がった。
- 新しい考え方などを知ることができたから。
- これまで広い視点から日本をとらえたことがなかったので、今後就職活動をしていく時に、広い視点から考えることを理解できてよかったです。
- 現実的で実用的なことを教えてくださったため。
- 日本の労働システムの現状が、世界競争についていけなくなることを知った。年功序列が日本だけにあることに衝撃を受けた。
- 現在大学 2 年生ですが、これからの日本社会について、知見を広げることができたから。
- ものの見方や考え方について知ることができたから。また自分のやりたいことを見出すことができたから。

<社会に出ることに関しての不安を解消・軽減>

- 大学生が社会に出る不安を解消できたり、もっと深く考えるきっかけとなるようなお話でした。
- 自分は 4 年生で、これから社会人になっていく時に、「人・本・タビ」とどのようにお付き合いしていけば良いのか不安なので、また出口様にメールを送らせて頂きたいです。
- 日本の現状と今後の課題が知ることができた。今、自分がどうしていくべきか知ることができた。

<出口学長の教養や魅力>

- 出口さんに会ってみたかったので、満足です。
- 話し方が人を引き付けるもので、大変ためになりました。
- 出口学長の講演の内容も豊富、見解も深いです。
- お話が大変面白く、教養がとてもある方で魅力的でした。

<勉強することの重要性>

- 学生として必要なことが分かったから。
- 色々な話を聞けて勉強になりました。義務教育で歴史を勉強する理由がわかりました。

<実践するための意欲と感動>

- 今からでも動いてみよう！やってみよう！という気がわきました。
- 「人・本・タビ」これから実践していきたいと思いました。言葉の 1 つ 1 つがとても胸に響きました。

「グローバル人材育成」における産学官連携の可能性～出口治明氏（立命館アジア太平洋大学学長）を迎えて～

（留学生と思われる感想）

- いろいろなことが勉強しました。
- 難しそうな内容でしたが、大変易しくわかりやすかった。
- Very interesting way of thinking is totally different from other Japanese people.

Q2. またこのようなセミナーをする場合、どのようなテーマや講師に興味がありますか。

（自由記述）回答は、「テーマ」「講師」別に以下のとおりであった。

A. テーマ

「人間関係や人との向き合い方」「ヒトとして大切なこと、人生に必要なもの」

「就職や生き方」「これからの生き方」「現代社会において必要な生き方、持つべき考え方」

「ビジネス関係」「グローバル」「異文化」「政治と文化」「文化と発展」「女子 issue」

「子供のための教育」「数学や哲学」「生物系」

- 大学生のお客さんがメインだと思うので、大学生に身近なテーマがいいと思います。それこそ大人の方が「もし今大学生だったらこんな事知っておきたかったな」ということを、こちらが教えていただきたいです。
- 国際交流、グローバルなことに興味があるので、また卒業するまでにこのようなセミナーに参加させて頂けたら嬉しいです。
- セントレアや航空会社が今後海外へ事業を広げるうえで、課題になることなど。

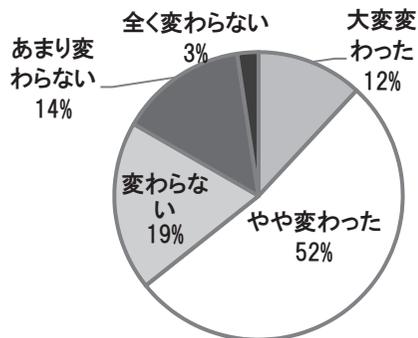
B. 講師

「発展途上国支援に関わる人」「海外にたくさん行っていて、いろんな国の話をしてくれる講師」「三重県出身の方」「今をときめく、GAFAの日本法人とか？」

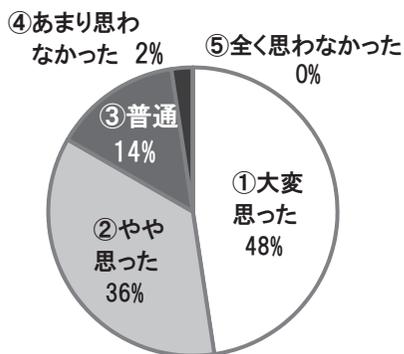
（留学生からと思われる回答）

- 人文学部の山田雄司先生と吉丸雄哉先生です。忍者について受講したいと思います。
- 日本でのインターシップ。
- 日本文化や日本地理など日本に関係があるテーマに興味があります。
- Seminar about popular books (International & Japanese books)

グラフ 10. Q3.「今回のセミナーを受講して、LCC のイメージは変わりましたか？(利用しなくなりましたか?)」



グラフ 11. Q4.「今回のセミナーを受講して、海外旅行や留学をしたくなりましたか?」



### 9. 考察

本稿では、10月に三重大学国際交流センターが産学官連携のもと実施した「グローバル人材セミナー」の経緯と内容、実施結果について報告した。このイベントは、中部国際空港が愛知県を中心に繰り広げている若年層渡航促進事業の一環であり、その事業に携わる三重県庁交通政策課との初のタイアップにより実現されたことにもなる。大学だけでは内容や予算面で実現が難しいイベントや授業も、今回のような産学官連携事業により実現可能な場合があり、それを享受する学生が受ける恩恵は測り知れない。その結論に至ったのは、今回のセミナーに招聘した出口治明学長の卓越した教養と言葉のパワー、「一期一会」を大事にされる人柄の魅力、そして熱心に耳をかたむけ、積極的に質問する学生の姿であった。

今回のイベントの充実した雰囲気は、留学生との交流を促したアイス・ブレイクも含め、留学生以外の日本人学生は「参加希望者」に限定したことにもよるとも考えられる。出口学長(2017)によると、「人材は育てる」というよりも「見つけ出すもの」であるらしい。人には様々な個性や資質があるのだから、「育てる」という考え自体が傲慢であると感じるとのこと。教育機関はすべての学生に向けて平等に教育を施す義務があるが、学生には個性が異なる興味がある。イベントを差別化することは、学生の「二極化」という課題に対応するための一つの方策であるかもしれない。

セミナー内容で特に印象に残ったのは、出口学長がかねてから発言されているリベラルアーツや人文分野の重要性である。質疑応答の時間、「人文系不要論、理科系偏重」について意見を求めた男子学生に対し、出口学長は、「文理両方の頭脳が必要」という答を、ファクトとロジックの思索から明確に説明された。それは、世界を牽引する企業の創業者

「グローバル人材育成」における産学官連携の可能性～出口治明氏（立命館アジア太平洋大学学長）を迎えて～

や政治家の多くが文理両方で博士号を持つというファクト、自動運転を実現する社会には、法律や哲学的な思考が必要であるというロジックからとも言える。それは、文系やリベラルアーツを軽視しがちな日本に対する警告であるだけでなく、学生の表情をパッと明るくさせるだけの力があるエールでもあった。人文軽視の風潮が、大学運営だけでなく、学生の心にまで大きく作用している（不安にさせている）事実が見えた瞬間でもあった。

セミナーに対する参加者の満足度は大変高く、程度の差はあれ、結果的に全員が「満足」した結果となった。最も多くの学生が理由としてあげたのは「新しい知見や価値観、視点」を得たことである。「濃度が高い、普段と違う価値観」や「知見を広げることができた」ことで、「自分の世界が広がった」り、「広い視点から日本をとらえたことがなかった」学生の就職活動を支援することに繋がったことがわかった。もともと向上心の高い学生が多く参加している中で、彼らに「衝撃を受けた」と感じさせる出口学長の視点や教養は、普段の講義や教科書からは得られない異質で特別のものであったことがわかる。

次に多かった理由は、「社会に出る不安を解消（軽減）」と「出口学長の教養や魅力」によるものであった。就職活動や社会に出ることへの不安は、言うなれば「今」という時をどのように過ごすべきかわからない、という心の表れとも無関係ではないだろう。本イベントのタイトルが、その種の不安感を持つ学生らを惹きつけたとも考えられる。だとすれば、彼らの不安を解消（軽減）できた本セミナーの意義は極めて高い。不安が解消された以上に、すぐに学んだことを行動へ移したいという衝動を感じた学生もいた。実際、セミナーの終了後に、「すごく感動した！ありがとう！」「めっちゃ得した、出口先生、すご～い！」と高揚した顔で会場から去る学生が何人もいた。出口学長のメッセージは、多くの学生を不安感から救い、行動させる原動力に作用したようである。

その一方で、参加してくれた留学生の中には、「日本語や内容が難しかった」とアンケート等で感想を述べた学生が数人いた。彼らの日本語レベルは上級なのであるが、世界の経済や日本企業がかかえる問題等の話題を理解できるほどのレベルに達していなかったようである。その点は残念であるが、アイス・ブレイクの時間では日本人学生と共に交流を楽しむ姿がうかがえた。事前アンケートで収集した「三重大学への要望」に対する答では、「留学や研修に対する奨学金やサポート」と共に、「留学生との交流」を求めるものが多かった。今後は、留学生と日本人学生が交流できる場を充実させ、双方とも「大変満足」と感じられるようなイベントの企画が必要であると感じている。

「今回のセミナーを受講して、海外旅行や留学をしたいと思いませんか？」という問に対しては、80%以上の参加者が海外渡航に対して興味を持ったことがわかった。しかしながら、もともとテーマや海外留学に興味を持っていた学生が大半であったことから、効果

を測ることは難しい。その一方で、「LCC のイメージは変わりましたか (利用したくなりましたか) ?」という問に対して、LCC を利用しての海外渡航に興味を持った学生が 64 %もいた。「もっと世界のいろいろなところに飛び出して行きたくなりました」と答えた学生や、「セントレアや航空会社の事業展開や課題」について学びたい、と希望する学生もおり、海外渡航促進事業の意味でも一定の効果が得られたと考えられる。

事前アンケートにも含まれていた「三重大学への要望」から、海外留学の奨学金やサポートの他に、今回のようなセミナーや講演会の実施を希望する学生が多いことも判明した。各部署が講演会を含めて様々なイベントを企画・実施してはいるが、「グローバル人材育成」に関連するイベントの数は年間を通じて決して多いとは言えない。主な理由として、国立大学の法人化以後、削減され続けている国立大学予算の影響があげられる。削減された予算により、大学運営は厳しい局面を迎えており、そのあおりを学生が受けている。本セミナーに支出された予算は膨大なものではなかったが、産学官連携による予算がなければ実現することはできなかった。予算面の理由だけでなく、今回のような産学官連携による「グローバル人材教育」は実践的授業や留学生と日本人学生が交流する機会を大学に与えることもできる。今後も、本学を含めた三重県下の高等学校、高等教育機関において、若年層の海外渡航促進事業を中心とした「グローバル人材教育」が様々なかたちで継続されていくことを期待している。

## 10. おわりに (謝辞)

今回、本学は県庁と中部国際空港利用促進協議会との連携により、立命館アジア太平洋大学の出口学長をお招きする幸運に恵まれた。その実現のために企画から実施、アンケート収集まで尽力いただいた県庁職員 (牧田拓巳氏) は本学人文学部の卒業生である。イギリス留学も経験している彼からは、三重県下における若年層の渡航促進とともに「グローバル人材教育」に対する熱意も感じられた。今回、多くの学生は出口学長から、将来につながる「今」を懸命に生きることの大切さ、自分自身の価値観を築き上げるヒントと力 (パワー) を受け取ることができたのであるが、この恩恵は「地域貢献」や「ローカルな視点」を併せ持つ牧田氏をはじめとした方々の存在なしには得られなかっただろう。こう考えた場合、ある意味、この事業は、本学が「ローカルな視点を持ったグローバル人材」をすでに輩出できていることを確認する場でもあったのかもしれない。

中部国際空港利用促進協議会と三重県庁地域連携部交通政策課の関係者の皆様、そして協力してくれた学生と事務スタッフの皆様に、厚く御礼を申し上げます。

「グローバル人材育成」における産学官連携の可能性～出口治明氏（立命館アジア太平洋大学学長）を迎えて～

<参考文献>

グローバル人材育成推進会議（2012）『グローバル人材育成戦略（グローバル人材育成推進会議 審議まとめ）』, <<http://www.kantei.go.jp/jp/singi/global/1206011matome.pdf>>

（2018年12月23日アクセス）

セントレア「セントレアの産学連携」<<https://www.centrair.jp/corporate/torikumi/industry-collab/>>

（2019年1月7日アクセス）

中部経済連合会「中部国際空港利用促進協議会」<<http://www.chukeiren.or.jp/outline/organization/2013/09/post-9.html>>（2018年12月21日アクセス）

出口 治明（2017）「本物の思考力」小学館.

三重大学（2017）「トピック」, <<http://www.mie-u.ac.jp/topics/kohoblog/2019/01/post-1727.html>>

（2019年1月8日アクセス）

立命館アジア太平洋大学「APUについて」, <[http://www.apu.ac.jp/home/about/content 12/](http://www.apu.ac.jp/home/about/content%20/)>

（2018年12月20日アクセス）



## 外国人留学生在日本で働くために必要なもの： 三重県で働く外国人就業者への取材から

正路 真一・松岡知津子

### What international students need to know in order to work in Japan: Interview research with international workers in Mie

SHOJI Shinichi, MATSUOKA Chizuko

〈Abstract〉

This report summarizes the interviews with 12 international (non-Japanese) workers in the Mie prefecture. The interviews have been conducted in order to gain the international workers' experiences of studying the Japanese language, searching for jobs, and working in Japan. The information gained from the interviews is possibly useful resources for current international students who will be potentially working in Japan.

キーワード：外国人就業者、留学生、インタビュー調査

#### 1. はじめに

本稿は、三重県で働く12人の外国人就業者を対象としたインタビュー調査の結果をまとめて報告するものである。三重県における外国人人口の県民人口に対する外国人人口の割合は東京、愛知、大阪に次いで第4位であり（三重県 2018）、大都市圏を除いては例外的に外国人の数が多いい県となっている。一方、三重県では15歳から25歳の若年層の県外流出が激しく、主に就職や就職に際して三重県以外の県を選択する若者が多いと考えられる（三重県 2018）。こうした人材の不足を埋める人的資源として現在更なる外国人の活用が望まれている。

三重県内の大学における外国人留学生を対象とした調査では、日本での就職を希望する留学生が全体の71%、その中で、就職する地域には「こだわらない」とする留学生が53%となっている（福岡 2015）。これは、三重県の若者が県外に流出する傾向が高い一方で、人材不足に悩む三重県内の特に中小企業の人的ギャップを埋めるリソースとして、留学生は大きなポテンシャルを持っていることを示している。

筆者らは、特に三重県内の高等教育機関で学ぶ外国人留学生在が三重県の企業に就職するにあたり参考となる情報を得ることを目的とし、現在三重県内で就業している外国人（以

下「調査協力者」と呼ぶ)を対象に取材を行った。取材の対象となった調査協力者の就職活動の経験、日本語学習に係る経験を中心に、日本で生活する上での苦労などを含めた情報を聴取し、留学生に伝えることを目的として、2017年夏から聞き取り調査を実施した。

## 2. 外国人留学生の日本での就職状況

2008年、日本政府は2020年を目標に「留学生30万人計画」を打ち出したが、2017年5月時点で留学生数は267,042人を数え、直近の4年間で各年25~30%ほどの増加率を維持している(JASSO 2017)。留学者数の増加に伴い、外国人留学生が日本での就職を目的として在留資格変更許可申請を行った数も2015年は17,088人(前年比20.6%増)、2016年は21,898人(前年比28.1%増)と、大きく増加し続けている(法務省 2016, 2017)。しかし、上記の数字は、専門学校を含む様々な形の留学全てを含む留学生のデータであり、大学または大学院の留学生に限定すると、企業の留学生採用者数は減少傾向にある。リクルート社が行った調査(2017)によると、2015年度卒の留学生の採用割合は23.6%、2016年卒は19.6%、2017年卒は19%となっている。つまり日本で高等教育を修了した外国人留学生の採用が減少しているということが推測される。実態として、日本で就職する外国人留学生の数が増加する一方、就職を希望する留学生の内実際に就職できているのは希望者の約半数であるということも報告されている(文化審議会国語分科会 2018)。

一般的に、外国人留学生の日本での就職を阻む要因の一つとしては、語学力不足という根本的な問題がある。「外国人留学生の就職および定着状況に関する調査結果」(新日本有限責任監査法人 2015)によると、企業の38.9%が外国人留学生採用にかかる問題として「日本語能力の不十分さ」を挙げ、最大の課題となっている(日本語教育大会 2018 報告)。また企業の見解を聴取した「外国人留学生の採用に関する調査」(株式会社ディスコ 2010; 回答社数923社)によると、7割以上の企業が、文系、理系共に留学生の採用において日本人と区別することはなく、そして新卒採用した外国人留学生の配属先については8割以上が「日本での勤務」と回答している。つまり留学生の就職活動にとって、外国人ならではの強みを生かせる機会はほとんどなく、従って日本人と一緒に働いても支障のないレベルの日本語能力を持った人材が求められていると考えられる。これに対して、例えば大学で上級レベルと判定されている日本語学習者も、実務経験がほとんどない留学生が大半であるため、実務で使える日本語能力を備えている留学生は極めて少なく(恒松 2011, 2014)、従って就職に至る留学生の数も少ないということになる。

日本語能力の問題に加えて、日本企業の採用に至るまでのプロセスが、他の多くの国に比べて複雑であることも、留学生の日本での就職が果たされにくい要因となっている。例

外国人留学生在日本で働くために必要なもの：三重県で働く外国人就業者への取材から

例えばエントリーシートの記入、SPI等の筆記試験、グループディスカッションやディベートなどは、日本人学生であっても長期間をかけて準備するものであるが、こうした日本独自の就職活動は、外国人留学生にとって非常に把握しにくいものであり、高いハードルとなっている（守屋 2012）。更にエントリーシートには200～400字の長さの志望動機や自己PR等を日本語で書かなければならず、ここでも日本語能力の問題がオーバーラップしてくることになり、留学生にとっては大きな負担となっている（山本・岩津 2008）。外国人留学生を対象としたリクルート社の調査（2017）においても、留学生が就職活動における自身の弱みだと思ふこと、そして就職活動中に困ったことを問うたところ、大多数の留学生が、日本語能力不足、日本の就職活動というもの（エントリーシート、SPIなど）がよく分からなかったことを挙げている。

こうした厳しい状況にあって、実際に現在日本で働いている外国人達はどのように就職を果たしたのか。次節以降、筆者らが外国人就業者を対象として実施したインタビュー調査の結果を報告する。

### 3. 調査対象・調査方法

調査協力者は12人であるが、取材を行った順に以下の表に示す。表の中の「日本滞在歴」と「日本での就業歴」は、インタビューを行った時点（2017-2018年度）のもの

表1 日本滞在歴及び日本での就業歴

出身国等による属性	性別	勤務先	日本滞在歴	日本での就業歴
韓国人 A	女	大学（教授）	約 32 年	約 26 年
フィジー人	男	英会話教室（講師）	約 20 年	約 15 年
ラオス人	女	大学（医学部技術補佐員）	約 17 年	約 14 年
モンゴル人（中国・内モンゴル自治区）	女	プラスチック加工会社	約 12 年	約 2 年
スリランカ人	男	電機メーカー	約 21 年	約 14 年
ベトナム人	男 A	IT 企業	約 7 年	約 2 年
	男 B		約 2 年半	約 2 年半
	女		約 半年	約 半年
バングラデシュ人	男	土木関係	約 3 年	約 1 年
韓国人 B	女	光化学機器メーカー	約 5 年	0（就業開始1週間前に取材）
ネパール人	男	レストラン	約 8 年	約 8 年
ペルー人	男	国際交流団体	約 14 年	約 12 年

のである。また日本滞在歴と日本での就業歴について、複数回日本滞在経験がある場合および複数の企業での就業経験がある場合は、その合計年数を記す。

この 12 人の中で、大手企業に就職を果たしたのはスリランカ人と韓国人 B である。韓国人 B については、取材当時大学 4 年生であったが、既に日本企業から内定を得、入社式も終えており、次週から就業が始まるという時期に取材を行ったため、就業歴は「0」と記す。また、ベトナム人 3 人は同じ企業に勤務する同僚であり、同時に取材を行った。

筆者らは、上記の外国人就業者を対象に 1 人約 30 分のインタビューを、フリートークに近い半構造化インタビュー形式で行った。場所は、主に調査協力者らの勤務先または近隣のカフェ等であったが、ラオス人に関しては、時間の都合がつかなかったため、携帯電話アプリ LINE のビデオ通話機能を用いて、携帯電話の画面越しに取材を行った。また、ベトナム人の 3 人については、就業先の日本人社員立会いのもとで取材を行った。

インタビューで聴取した内容は記事の形式にしてまとめ、取材対象となった外国人就業者の了解の上、三重大学地域創発センターホームページの学生ブログ欄に公開し (<http://www.cocpls.mie-u.ac.jp/chiiki/blogs-by-students/>)、三重大学の留学生を含め誰もが閲覧できるようにした。また、許可が得られた場合は、調査協力者の e メールアドレスも掲載し、三重大学の留学生が調査協力者に直接コンタクトをとって質問することもできるものとした。

次節以降では、インタビューで聴取した内容を、「来日したきっかけ」「日本語の習得」「就職活動」「日本または三重県での就職を希望する留学生へのアドバイス」の 4 項目に分類していく。

## 4. 調査結果

### 4.1 来日したきっかけ

調査では、まず会話の導入として、調査協力者が来日したきっかけについて尋ねた。結果を以下に示す。

#### 4.1.1 留学をきっかけとして来日した場合

取材対象となった外国人就業者のうち、留学を機に来日した外国人が 12 人中 7 人 (韓国人 A、フィジー人、スリランカ人、バングラデシュ人、モンゴル人、ベトナム人男 A、韓国人 B) を占めた。この 7 人の中で、来日時に日本語能力が初級またはそれ以下であった者は 4 人 (韓国人 A、フィジー人、スリランカ人、バングラデシュ人) である。更にこの 4 人の内 2 人 (韓国人 A、スリランカ人) が、留学先となる日本の大学では英語で

表 2 来日のきっかけ

出身国等による属性	性別	勤務先	来日したきっかけとその後の進路
韓国人 A	女	大学（教授）	大学院留学→後に博士号取得（環境学専攻）
フィジー人	男	英会話教室	専門学校（ホテル関係）留学→後に修士号取得（マーケティング専攻）
ラオス人	女	大学（医学部技術補佐員）	日本人との結婚
モンゴル人（中国・内モンゴル自治区）	女	プラスチック加工会社	大学留学→後に修士号取得（教育学専攻）
スリランカ人	男	電機メーカー	大学留学→後に修士号取得（機械工学専攻）
ベトナム人	男 A	IT 企業	大学留学→学士号取得（分子工学専攻）
	男 B		母国にある子会社からの出向
	女		母国にある子会社からの出向
バングラデシュ人	男	土木関係	大学院留学→修士号取得（土木工学専攻）
韓国人 B	女	光化学機器メーカー	大学留学→後に学士号取得（国際関係学専攻）
ネパール人	男	レストラン	就職
ペルー人	男	国際交流団体	父親の仕事→後に就職のため再来日

授業が受講できるため日本語能力はさほど必要ないと聞いて来日したのだが、実際に来てみるとそれは間違った情報で、日本語ができないと大学の授業が受講できないことが判明したと回答した。バングラデシュ人については、留学先の大学院で、特に日本語能力を必要とされなかった。また、留学を目的として来日した7人の内、来日前にある程度の日本語能力を持っていた者は3人いるが（モンゴル人、ベトナム人男 A、韓国人 B）、調査協力者は自国の日本語専門学校または高校で日本語を学習しており、モンゴル人は日本語能力試験 2 級、韓国人 B は 3 級を取得済みであった。

#### 4.1.2 留学以外のきっかけで来日した場合

留学を目的とせず来日した5人の外国人（ラオス人、ベトナム人男 B、ベトナム人女、ネパール人、ペルー人）の中で、来日時にほぼ日本語能力がゼロに近かった者は、ラオス人とネパール人である。日本人との結婚を機に来日したラオス人は、来日前にハワイの大学でメディカルドクターの資格を取得しているが、その大学で日本語のクラスを2学期分受講している。しかし夫がラオス語を話せることもあって、来日時の日本語能力は初級程度であった。ネパール人については、来日前に母国のレストランでシェフをしていたところに日本人客が現れ、その客の誘いで日本のレストランでシェフとして働くに至ったという経緯であった。このネパール人は妻と娘を連れて来日したが、3人ともほぼ日本語を話

せない状態であったということである。

また留学を目的とせず来日した 5 人の内ベトナム人男 B とベトナム人女は、日本企業の子会社が母国にあり、そこの社員であったのだが、その子会社では週に 2 回無料で日本語のクラスが開講されていた。2 人ともその日本語クラスを受講し、1 人は来日前に日本語能力試験の 5 級を取得していた。この 2 人に関しては、日本で就職活動をして今の仕事に就いたという訳ではなく、ベトナムにある子会社からの出向という形で来日し、日本での就業を始めたものである。最後に、ペルー人に関しては、初めて来日したのは小学生の時であり、仕事の事情で先に来日していた父親を追って家族で引っ越してきたものであった。2 年半ほど日本で生活した後ペルーに帰国し、その後ペルーで 26 歳まで住んだ後に、日本で働きたいと思い来日したという経緯であったが、この 2 回目の来日時には、(本人曰く「日本人の子どもが話すような日本語」ではあったものの)、高水準の日本語コミュニケーション能力を持っていたと思われる。

#### 4.1.3 今後の日本滞在予定

現在母国の子会社から出向という形で来日しているベトナム人女は、一定期間の後帰国することが決まっており、また同じ会社のベトナム人男 A は、4~5 年は今の会社で働くが、そのあとはどうするか分からないと述べている。その他の 8 人は、特に大きな問題がなければ現在就業している会社で働き続け、日本に住み続けたいと言っている。この 8 人の内韓国人 A、ラオス人、スリランカ人、ペルー人は日本の永住権を取得しているが、フィジー人、モンゴル人、バングラデシュ人、韓国人 B、ネパール人は技術・人文知識・国際業務ビザを更新しながら日本での滞在を続けている。

#### 4.2 日本語の習得について

前述の通り、外国人が日本で就職するにあたっての大きな壁の一つは語学力の問題であるが、今回取材を行った外国人就業者はどのようにしてこの壁を克服したのであろうか。調査協力者は既に日本語でのコミュニケーション能力を獲得しているが、日本語の習得には現在進行形で苦勞・努力をしているという点で意見が一致している。日本に来て苦勞したこと、またはしていることを聞いたところ、フィジー人を除く全員が日本語の習得、運用であると回答した。例えば、スリランカ人は「日本語ができなくては何もできない」、ラオス人は「日本語の学習、これが一番厳しいところ」、バングラデシュ人は「今でも書類に漢字がたくさんあると、これを理解するだけで多大な時間を費やしてしまう」と実感を持って回答している。

取材では、協力者の外国人 12 人の日本語学習経験を聴取したが、まず調査協力者の日

外国人留学生在日本で働くために必要なもの：三重県で働く外国人就業者への取材から

本語能力を客観的に理解するために、彼らが取得した日本語能力試験のレベルを下の表に示す。（日本語能力試験のレベルは改定前は「1級」、改定後は「N1」と呼ばれるが、混乱を避けるために本稿では全て「1級」のように記述する。）

表3 日本語能力

出身国等による属性	性別	勤務先	日本語能力試験
韓国人 A	女	大学（教授）	1級
フィジー人	男	英会話教室	なし
ラオス人	女	大学（医学部技術補佐員）	なし
モンゴル人（中国・内モンゴル自治区）	女	プラスチック加工会社	1級
スリランカ人	男	電機メーカー	1級
ベトナム人	男 A	IT 企業	1級
	男 B		4級
	女		5級
バングラデシュ人	男	土木関係	なし
韓国人 B	女	光化学機器メーカー	1級
ネパール人	男	レストラン	なし
ペルー人	男	国際交流団体	1級

#### 4.2.1 日本語能力試験に合格している就業者の場合

取材協力者の中で現在までに日本語能力試験に合格している者は、韓国人 A、モンゴル人、スリランカ人、ベトナム人男 A、ベトナム人男 B、ベトナム人女、韓国人 B、ペルー人の 8 人である。まず韓国人 A とスリランカ人は、前述の通り、留学先となる日本の大学では英語で授業が受講できるため日本語能力はさほど必要ないと聞いて来日したものの、実際に来てみると日本語ができないと大学の授業が受講できないと判明したということであった。韓国人 A の日本語能力は来日時の大学の日本語レベル判定テストで最下位クラスのレベルであったが、半年後には最上位クラスに移行している。この韓国人 A は、日本の小学校 1 年生の教科書を全科目分購入し、これを教材として日本語を学習したと述べている。スリランカ人に至っては日本語能力がゼロの状態に来日したのだが、半年後には日本語能力試験の 1 級を取得し、大学入学試験に合格している。この 2 人の、「24 時間体制で死ぬかと思うほど勉強し（韓国人 A）」、「二度とあの時期に戻りたくない（スリランカ人）」という猛烈な状況がうかがえる。

留学を目的として来日した韓国人 B とモンゴル人、そしてベトナム人 A も、それぞれ留学先の大学または大学院在籍中に 1 級を取得している。この内韓国人 B とモンゴル人は、来日前に既に日本語能力試験のそれぞれ 2 級と 3 級を取得していたが、この 2 人も来日時は不自由なく日本語が話せるというレベルではなかった。例えば、韓国人 B は、スーパーマーケットでレジの人が言っていることが分からず、何も買わずに店を出たというエピソードを紹介した上で、「生きるために日本語を覚えるしかなかった」と笑顔で述懐している。

ベトナム人男 A と同じ会社に勤めるベトナム人男 B とベトナム人女は、ベトナムの子会社からの出向という形で来日しており、他の取材対象外国人と比べると日本語能力は低い方であるが、男 B は 4 級を取得、女は (前述の通り) 来日前に 5 級を取得している。

ペルー人に関しては、小学生時代に日本に 2 年半住んだ経験があるため、一定の会話能力はその時期に獲得していたが、成人後就職を目的に再来日した後、公文の日本語講座を受講し、再来日 1 年目に 3 級を、2 年目に 2 級を、3 年目に 3 級を取得している。

現在までに日本語能力試験に合格している 9 人の内、ベトナムの子会社からの出向という形で来日したベトナム人男 B とベトナム人女を除く 7 人全てが日本語能力試験の 1 級保持者であるという点、つまり高い日本語能力を持っているという点が、調査協力者の共通項として挙げられる。

#### 4. 2. 2 日本語能力試験に合格していない就業者の場合

現在までに日本語能力試験に合格していないまたは受験していない者は、フィジー人、ラオス人、バングラデシュ人、ネパール人の 4 人であるが。この 4 人は皆、来日時は日本語能力がゼロの状態であったが、ラオス人、バングラデシュ人、ネパール人の 3 人は普段の業務も全て日本語で行なっていることから、高い日本語コミュニケーション能力を持っていると言える。またフィジー人は英会話講師であるため、業務上のコミュニケーションは概ね英語で行っているが、他の 3 人と比べても遜色のない日本語能力を持っている。バングラデシュ人については、大学院での研究に日本語能力はさほど必要とされなかったにも関わらず、留学生対象の日本語クラスを受講することはもちろん、日本語の授業で使われた教科書に載っている単語は全て暗記したという。また結婚を機に来日したラオス人、日本のレストランに就職したネパール人は、日本での就学経験はないため、主に日本での生活の中で、そして市役所が開講する日本語教室に参加するなどしたりして、日本語を習得したと述べている。

#### 4. 2. 3 子どもの母語維持について

調査協力者の内、子どもがいる回答者は韓国人 A (夫は日本人)、ラオス人 (夫は日本

人)、モンゴル人(夫はモンゴル人)、スリランカ人(妻はスリランカ人)、ネパール人(妻はネパール人)、ペルー人(妻はブラジル人)の6人であるが、ラオス人、スリランカ人は、子どもは親の母語(ラオス語、シンハラ語)を話さないと回答しており、ラオス人は、自身が日本語の習得に必死であったため、子どもにラオス語を教える余裕がなかったと語っている。また子どもが日本の幼稚園に通っているモンゴル人は、子ども(取材時に6歳と3歳)はモンゴル語を多少は理解できるものの、モンゴル語で話しかけても日本で返事をしてくるということで、子どもたちの中で日本語の方が優勢となっていることがうかがえる。またモンゴル人は、言語以外にも、文化的な食い違いを感じると述べた。例えば、子ども達が「今日は保育園でこういうお話を聞いた」、「こういう遊びをして来た」と日本人なら誰でも知っているお話や遊戯について話しても、親が知らないため話が通じないことがあると言う。

一方、ネパール人とペルー人の子どもは、両親の母語(ネパール語、ペルー語、ポルトガル語)を流暢に操ると言う。この内ネパール人の子どもは、来日した当時2歳前後であったという計算になるが、おそらくこの子どもが4~5歳になる頃までは、両親ともほとんど日本語が話せない状態であったため、長期間に渡りネパール語が唯一の家族間共通言語であったと推測されることから、親の日本語力が向上した後に子供が生まれたモンゴル人、スリランカ人、ペルー人のケースとは違い、子どもはネパール語を忘れるわけにはいかなかったという事情が推測される。また両親が一緒にレストランで働いており、子どももレストランで余暇の時間を過ごしたり仕事を手伝ったりしていることから、家族で過ごす時間が長かったであろうことも子どものネパール語能力維持に影響した可能性がある。一方、ペルー人の子どもは、父親がペルー人、母親がブラジル人であり、また毎年父親の親類が訪日しているといった事情から、多言語話者であることが自然な環境であったという可能性がある。

#### 4.3 就職活動について

調査協力者の内、実際に日本で就職活動をして現在の職を得た者と、日本での就職活動を経ずに採用された者を分けて以下の表に示す。

##### 4.3.1 日本の一般的な就職活動をして就職した場合

日本で就職活動を経験したのは上記の8人であるが、その中でも日本の一般的な新卒採用を前提とした就職プロセスに従って現在の職についたのはモンゴル人、スリランカ人、ベトナム人男A、韓国人Bの4人である。この4人の中で最も順調に就職活動を進めた

表 4 日本における就職活動の有無

出身国等による属性	性別	勤務先	日本での就職活動の有無
韓国人 A	女	大学 (教授)	有
フィジー人	男	英会話教室	有
ラオス人	女	大学 (医学部技術補佐員)	無
モンゴル人 (中国・内モンゴル自治区)	女	プラスチック加工会社	有 (一般的な新卒採用)
スリランカ人	男	電機メーカー	有 (一般的な新卒採用)
ベトナム人	男 A	IT 企業	有 (一般的な新卒採用)
	男 B		無
	女		無
バングラデシュ人	男	土木関係	有
韓国人 B	女	光化学機器メーカー	有 (一般的な新卒採用)
ネパール人	男	レストラン	無
ペルー人	男	国際交流団体	有

のは韓国人 B である。所属大学の 3 年次にキャリア関連科目を受講し、日本の就職活動のプロセス、ビジネスマナー、SPI 等について学んだ後、「マイナビ」、「リクナビ」に登録、そして 3 年次の 3 月から約 30 社の企業説明会に出席し、採用試験の一次選考を通過したのが約 10 社、面接にこぎつけたのが 3 社、その内 2 社から内定をもらった末に、大手光化学機器メーカーに就職を果たしている。

モンゴル人に関しては、一般的なプロセスに従って就職活動をしていたが、内定をもらうまでに大変苦労したという感想を述べている。彼女の場合、最終的には、ある採用面接で、「うちの会社では雇えないが、君を雇ってくれそうな他の会社を紹介してあげる」と言われ、紹介してもらった中小企業に就職したというやや変則的なケースである。

一方、スリランカ人とベトナム人男 A は、就職活動を始めるのが他の日本人に比べて遅かったためやや苦労したと回想している。日本の就職活動は他の多くの国に比べて早く始まり、長いプロセスを踏むのが一般的であるのだが、こうした慣習に馴染みがなく、就職活動を始めるべき時期がよく分かっていなかったということである。またベトナム人男 A は、履歴書を手書きで書かなければならないこと、また SPI の問題などに苦労したという印象を持っている。SPI の問題に関しては、問題文の漢字を見て問題の意味を推測することで乗り切ったということである。このベトナム人男 A は、モンゴル人の例に似て、やや変則的な形で就職を果たしている。三重県国際交流財団が開講する外国人のための日

本語教室に出席していたところ、その場に三重県の IT 企業の管理職社員が立ち寄り、この企業がベトナムに子会社を持つ企業であったため、この社員がベトナム人男 A を勧誘したというものである。

日本の一般的な就職活動を経て現在の職に就いた上記の 4 人に共通するのは、全て留学を目的として来日し、在学中に日本語能力試験の 1 級を取得しているという点である。新卒採用を前提とした就職活動においては、日本の年度歴に従って日本の高等教育機関を卒業し、尚且つ日本語能力試験 1 級という分かりやすい日本語能力の証明ができることが、一つの条件として挙げられ得る。

#### 4.3.2 日本の一般的な就職活動をせずに就職した場合

新卒採用を前提とした一般的な就職活動を経ることなく就職を果たしたのは、韓国人 A、フィジー人、ラオス人、ベトナム人女、ベトナム人男 B、バングラデシュ人、ネパール人、ペルー人の 8 人である。この内韓国人 A は大学教員であるため、一般的な就職活動というよりも研究活動が評価されての採用ということになる。またベトナム人女、ベトナム人男 B は、前述の通り、ベトナムにある日本企業の子会社に就職した上で、そこからの出向という形で日本企業での就業を始めた。ただし、ベトナム人男 B については、現在は出向という形ではなく、日本の本社採用という形に切り替えられている。出向を経て、その働きから本社に残ることが認められたという、変則的な日本での就職ということになる。

フィジー人は英会話教室の講師であるが、講師のポジションは通年で募集されており、これに応募したものである。バングラデシュ人とペルー人は、欠員による適時募集に応じて就職を果たしたものである。この内バングラデシュ人は、来日半年後、まだ日本語が初級レベルの頃にハローワークに足を運び、職員にインターネットで仕事を探す方法を教えてもらったという。またその時に、ハローワークの職員に、「日本で仕事がしたいなら日本語ができなきゃダメですよ」と言われ、日本語の習得に励んだということである。結局、彼はインターネットで探した土木関係の中小企業に就職した。一方ペルー人も、ハローワークを通じて仕事を得たものである。ただ「ハローワークにこういう求人情報がある」と知人に教えてもらったとのことなので、個人的なコネクションを活用した例とも言える。

完全に個人的なコネクションに頼って採用に至ったのは、ラオス人とネパール人である。ラオス人は、来日後、体調の不調から近隣の大学病院に通院していたところ、担当の医師に、自分が来日前にハワイでメディカルドクターの免許を取得したこと、子ども（当時 3 歳と 0 歳）が幼稚園等に通う歳になったら仕事がしたいということ話を話すに至った。これを聞いた医師が、それならばと当該大学の医学部の技術補佐員としての働き口を紹介し、

採用に至ったものである。またネパール人は、前述の通り、母国でシェフをしていたところ、客として来た日本人に日本で働くことを勧められたものである。このラオス人とネパール人は、特に就職活動をしていない場面で思いがけず求人情報が得られ、それを自身の就職につなげているという点が共通している。

#### 4.3.3 現在の職業と自身の専門性の関係

全体的に見て、なんらかの専門性を活かした仕事に就いた者が多いように思われる。韓国人 A は大学教員であるので、当然自分の専門に関わる仕事をしている。ラオス人はメディカルドクターとしての専門性を活かして大学医学部の技術補佐員に、スリランカ人とバングラデシュ人も大学院時代の専攻に準じた職業に就いている。ベトナム人男 A は、大学時代の専門が分子工学であるのに対し、現在勤務しているのが IT 企業であるので、理系という広い意味では専門性を活かしていると言えなくもない。フィジー人は、学問としての専門性とは関係がないが、ネイティブの英語話者という属性を活かして英会話講師になっている。ネパール人はシェフという専門職であり、母国で就いていた職業にそのまま日本でも就いている。

一方、大学院または大学時代の専攻とは関係のない仕事に就いているのがモンゴル人(教育学専攻→プラスチック加工会社就職)と韓国人 B (国際関係学専攻→光化学機器メーカー就職)であるが、この内、年齢が 23 歳と、他の日本人新卒就職者と変わらない条件の韓国人 B は最もスムーズに就職を果たした。一方、自国で二つの専門学校に通ってから来日して日本の大学に入学し、また大学院生の時期に結婚そして 2 人の子どもを出産したため 2 年間の休学を経て大学院を卒業したモンゴル人は、就職に臨んだ年齢が 30 前後であったことも影響してか、就職活動に苦戦した末に中小企業に入社したという印象がある。

#### 4.4 今後三重県で就職する留学生たちへのアドバイス

インタビューの最後に、今後三重県または日本で就職したいという留学生たちへのアドバイスを求めた。結果を次の表にまとめる。

今後日本で働くことを希望している留学生へのアドバイスとしては、日本語・日本文化を学習することというものが多い。特に日本語を学習することとした回答は、日本で最も苦勞したまたはしていることは日本語の習得、運用という前述の調査協力者の回答と反映するものであろう。

日本語、日本文化の学習以外の回答としては、日本の慣習に溶け込むことを勧める声も多い。フィジー人の回答(「日本文化を受け入れること」)、スリランカ人の回答(「自分の

表5 日本で就職したい留学生へのアドバイス

出身国等による属性	性別	勤務先	日本で就職したい留学生へのアドバイス
韓国人 A	女	大学（教授）	<ul style="list-style-type: none"> <li>日本語、日本文化、日本の歴史、また自分の専門分野の学習</li> <li>色々な国の友達をたくさん作ること</li> </ul>
フィジー人	男	英会話教室	<ul style="list-style-type: none"> <li>日本の文化を学び、体験し、尊重し、これを受け入れること</li> <li>日本の労働に関する文化や環境について予備知識を持っておくこと</li> <li>日本語の学習</li> </ul>
ラオス人	女	大学（医学部技術補佐員）	<ul style="list-style-type: none"> <li>日本語、日本文化、日本の働き方を学ぶこと</li> </ul>
モンゴル人（中国・内モンゴル自治区）	女	プラスチック加工会社	<ul style="list-style-type: none"> <li>最初の仕事は、「自分の好きなこと」と「自分ができること」を考えて選ぶこと</li> <li>時間がある学生時代に、仕事に役立つような知識・資格をとっておくこと</li> </ul>
スリランカ人	男	電機メーカー	<ul style="list-style-type: none"> <li>「郷に入りては郷に従え」ということわざにある通り、日本で日本人の中で生活することに馴染むこと</li> <li>自分のプライドを捨てて、日本のやり方を身につけること</li> <li>学生時代の中に、アルバイトなどを通じて「ホウ・レン・ソウ」などの基本的なこと、また先輩後輩の関係などを学んでおくこと（仕事を始めたら、更に仕事上で必要なことを学ばなければならなくなる）</li> </ul>
ベトナム人	男 A	IT 企業	<ul style="list-style-type: none"> <li>日本語の学習</li> <li>色々な経験を積むこと</li> </ul>
	男 B		
	女		
バングラデシュ人	男	土木関係	<ul style="list-style-type: none"> <li>日本語の学習</li> <li>時間や法律をしっかりと守ること（「知らなかった」では済まされない）</li> </ul>
韓国人 B	女	光化学機器メーカー	<ul style="list-style-type: none"> <li>就職試験に落ちてでも、気に病まないで次の試験に臨むこと</li> <li>日本語の学習（「日本に住みたい」、「日本で就職したい」という気持ちだけでは、企業にとっても採用できない）</li> <li>日本語能力試験と日本語実用検定に合格すること</li> </ul>
ネパール人	男	レストラン	<ul style="list-style-type: none"> <li>真面目で正直な心を持つこと</li> </ul>
ペルー人	男	国際交流団体	<ul style="list-style-type: none"> <li>仕事のハードルが高そうに見えても、とにかくやってみること</li> <li>仕事に就いた後も日本語を学び続けること</li> </ul>

プライドを捨てて))、バングラデシュ人の回答(「時間や法律を守ること)」などの回答からは、外国人ということを全面に押し出すことなく、日本人のやり方やルールに従い、これに馴染むことを重要視する姿勢が伺える。特にスリランカ人は、違法滞在者だと思われる、日本語を話せないと思われるりする経験もあったそうだが、これに反発するのではなく、対話することで自分に対する差別的な壁を打破しなければいけないという意見を述べている。

## 5. まとめと考察

本稿では、三重県内で働く 12 人の外国人就労者の「来日したきっかけ」、「日本語の習得」、「就職活動」、「日本または三重県での就職を希望する留学生へのアドバイス」について報告したが、実際のインタビューでは、それ以外の多くの経験や苦労話についても聞くことができた。日本で安定した職を得た者であっても、現在も努力を続けながら日本での生活を送っていることが分かった。このような「先輩」の話は、日本人学生同様に将来の進路に悩む留学生たちの一つのモデルとなると考えられる。インタビュー内容の掲載記事には、了承の得られた協力者の連絡先が掲載されていることから、直に連絡をとって話を聞くこともできる。今回の報告を、今後留学生に実際に読んでもらい、日本や地方における就職意欲の増加につながれば幸いである。

## 謝 辞

本調査への協力を快諾してくれた 12 人の外国人就労者の方に、心からお礼申し上げます。

## 参考文献

- 株式会社ディスコ (2010) 『「外国人留学生の採用に関する調査」アンケート結果』 <https://www.disc.co.jp/wp/wp-content/uploads/2012/01/10kigyou-oversea-report8.pdf>
- 就職みらい研究所 (2017) 『外国人留学生の採用・就職に関するデータ集』 [https://data.recruitcareer.co.jp/wp-content/uploads/2017/11/data\\_foreign201706.pdf](https://data.recruitcareer.co.jp/wp-content/uploads/2017/11/data_foreign201706.pdf)
- 新日本有限責任監査法人 (2015) 『外国人留学生の就職および定着状況に関する調査結果』 [http://www.meti.go.jp/policy/economy/jinzai/global/pdf/H26\\_ryugakusei\\_report.pdf](http://www.meti.go.jp/policy/economy/jinzai/global/pdf/H26_ryugakusei_report.pdf)
- 総務省 (2016) 『平成 27 年における留学生の日本企業等への就職状況について』 <http://www.moj.go.jp/content/001207275.pdf>
- 総務省 (2017) 『平成 28 年における留学生の日本企業等への就職状況について』 <http://www.moj.go.jp/content/001239840.pdf>
- 総務省 (2017) 「データセット 都道府県別 在留資格別 在留外国人 (総数)」『e-Stat 政府統計の総合窓口：統計で見る日本』 <https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&layout=datalist&>

外国人留学生在日本で働くために必要なもの：三重県で働く外国人就業者への取材から

toukei=00250012&tstat=000001018034&cycle=1&year=20170&month=24101212&tclass1=000001060399

日本学生支援機構（JASSO）（2017）『平成 29 年度外国人留学生在籍状況調査結果』[https://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl\\_student\\_e/2017/\\_icsFiles/afieldfile/2018/02/23/data17.pdf](https://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl_student_e/2017/_icsFiles/afieldfile/2018/02/23/data17.pdf)

恒松直美（2011）「広島大学短期交換留学生インターンシップと地域企業の国際貢献：交換留学生インターン受け入れに関する地域企業の意識調査」『広島大学国際交流センター紀要』 vol.1, pp.51-65.

恒松直美（2014）「地域社会と連携した「学生主導型」交換留学生インターンシップの挑戦」『留学交流』 vol.41, pp.10-21.

福岡昌子（2015）「留学生の就職に関する意識調査とビジネス日本語教育への示唆」『三重大学国際交流センター紀要』 vol.10, pp.1-18.

文化審議会国語分科会（2018）『日本語教育人材の養成・研修のあり方について（報告）』（2018 年日本語教育大会（京都）配布資料）

三重県（2018）「H 29 外国人住民調査結果詳細資料」<http://www.pref.mie.lg.jp/common/content/000767191.pdf>

三重県（2018）「三重県の人口移動状況（社会減）について」『Hello!とうけい』 vol.246 <http://www.pref.mie.lg.jp/DATABOX/000217003.htm>

三重県（2016）「三重県の人口移動状況（社会減）について」『Hello!とうけい』 vol.217 <http://www.pref.mie.lg.jp/DATABOX/000068102-05-01.htm>

守屋貴司（2012）「日本企業の留学生などの外国人採用への一考察」『日本労働研究雑誌』 vol.54, pp.29-36.

山本いずみ・岩津文夫（2008）「留学生に特化したインターンシップの検討」『工学教育』 vol.56, pp.110-113.



## Suzuka no Seki & Ko-Dai-San-Gen

Brian James Mahoney

鈴鹿関と古代三関

ブライアン ジェームズ マホニー

〈摘要〉

白鳳時代（西暦 646～710 年）から奈良時代（西暦 710～794 年）にかけての約 150 年は、日本における国の形成において非常に重要な時期と認識されている。それまでの日本は、村ごとに独立しており、国と呼べるものではなかったが、畿内（大和国）に国を統制する中核組織を設置し、国の仕組みが作られた。本稿は、この時期における三大関所（三関）を含む大規模な関所の開発が、古代の日本国家の発展のための極めて重要な役割を提供したことを説明する。そして、そこには、どのような防御システムがあったのか、そしてそれはどのように機能していたのか、またその防御システムの主な目的は何だったのか？本稿では、それらの間について調査するため、鈴鹿関の西暦 7～8 世紀の遺跡の発見、研究、採掘に直接携わってきた 2 人の主要人物、嶋村明彦氏と森川幸雄氏にインタビューした。また彼らとのディスカッションにより、鈴鹿関とこの時代の歴史的背景についての情報も得た。さらに、関所が本州の東部と東北地域全体に渡り、大和国の支配を拡大することに大きな役割を果たしたこともわかった。

キーワード：鈴鹿関、古代三関、古代日本、東海道五十三次の関宿、三重県指定文化財

### 1. Introduction

In ancient Japan, incorporated into the law codes originally drafted in the Hakuho era (A.D. 646-710) culminating in the Nara era (A.D. 710-794), there were laws for the development of an early military force in addition to establishing a series of checkpoints, or *Seki-sho* 関所 and three main fortified barrier stations, or *San-Gen* 三関 to be manned by these forces (see picture 1). Concentrated in the central Yamato domain called the Kinai, a total of nineteen checkpoints, including the three major fortified barrier stations were under operation. Strategically positioned along the extreme eastern edge of the central Kinai domain, the three main fortified barrier stations were: Suzuka no Seki of the Ise province or *Ise-Kuni Suzuka no Seki* 伊勢国鈴鹿関 located at the base of the Suzuka Mountain range in the present-day town of Seki in Mie prefecture. Fuwa no Seki of the Mino province or *Mino-Kuni*

*Fuwa no Seki* 美濃国不破関 located at the base of the Ibuki Mountains in the present-day town of Sekigahara in Gifu prefecture. And Arachi no Seki of the Echizen province or *Echizen-Kuni Arachi no Seki* 越前国愛発関 believed to have been located in the Nosaka Mountains in the Hikida area 疋田 in present-day Fukui prefecture.

Only with the archaeological discoveries of remnants of the Fuwa no Seki fortifications in the 1970's (1974-1977) and most recently the eight-year (2006-2014) excavation of the Suzuka no Seki earthen walls, has the ancient documentation been substantiated to some degree. Although, as of this writing, the third main barrier station of Arachi no Seki, despite field surveys conducted over several years (1996-1999) has yet to be confirmed by any physical evidence. However, it seems clearer today that there had been a well-designed checkpoint and fortified barrier system, but for what specific purpose (s) did it serve? Was it used to simply control persons and passage, to collect fees? Or did it also take on a more strategic aspect such as in times of major conflict? In his book titled *Antiquity and Anachronism in Japanese History* (1992), Dr. Jeffrey Mass's analysis of the major foreign research on early Japan brings into question the belief that early Japan developed organically, in a more or less peaceful and harmonious state. On the somewhat extreme end, he writes, considering the series of power grabs, the development of the early Japanese state may have been closer in reality to "a tale of invasion and warfare" (pg. 11). It was the Jinshin War of A.D. 672, and not the imperial palace coup in A.D. 645, which deserves our attention in understanding the beginning of the great transformations of the Taika Reform era. In response to the effects of this civil war in the summer of A.D. 672, a formal military force, a new checkpoint and fortified barrier system with roads connected by horse-relay was prioritized in the central Yamato domain.

## 2. T'ang China Law Codes & Early Japan

Long before the Yamato kingdom of early Japan attempted its own variation on the fortification design, the ruling powers in ancient China had formulated an extensive system of defensive walls, including heavily guarded checkpoints with gates, observation towers and adjoining military facilities. Additionally, vast networks of roads connected by way of horse-relay allowed for movements of travelers, goods, military personnel and information as never before. Professor of ancient Japanese history, Tateno Kazumi (2016) states that the ancient law codes, which included the checkpoint system with fortified barrier stations as

well the horse-relay system were adopted from T'ang era China.

According to Professor Richard J. Miller (1979, pg. 37), the T'ang law codes of 7<sup>th</sup> century China were an invaluable template in the crafting of Japan's own law code in the 7<sup>th</sup> and 8<sup>th</sup> centuries albeit with its own Yamato era distinctions. As written in the *Chronicles of Japan* 日本書紀 (Aston. 1972), beginning in the New Year A.D. 646, newly ascended Emperor Kōtoku promulgated a series of imperial edicts, the second proclamation reads, “The capital is for the first time to be regulated, and Governors appointed for the Home provinces and districts. Let barriers, outposts, guards, and post-horses, both special and ordinary, be provided, bell-tokens made, and mountains and rivers regulated” (Book XXV, pg. 206, paragraph 14).

Consisting mainly of administrative statutes, the very first law codes developed in concert with the reform edicts of Emperor Kōtoku, where for the first time, the land and the people were brought under centralized control and in addition to the total reorganization of government, a military force, barrier system with checkpoints and a horse-relay network were devised. The initial version of the law code was enacted circa A.D. 668 and came to be known as the *Ōmi-Ryō*, or *Ōmi-Code*, so called as at this time the seat of the ruling family was located near to lake Biwa in the province of Ōmi (Miller, 1979, pg. 22) The *Ōmi Code*, consisting of some twenty-two volumes, was introduced during the reign of Emperor Tenji (A.D. 661-672), who had been crown prince during the seminal transformation of power in A.D. 645 (Miller, 1979, pg. 23) According to Japan historian James Murdoch (1910, pg. 189) and Miller (1979, pg. 23) those tasked with the development of the codes borrowed extensively from the Yung-Hui-Lu-Ling law code of the Yung-Hui period (A.D. 650-5) of China's T'ang Dynasty era.

Following the death of Emperor Tenji, under subsequent rulers, Emperor Temmu, who reigned from A.D. 673-686, and Empress Jitō (A.D. 687-697), the administrative law code was revised and updated in what is known as the *Asuka-Kiyomigahara-Ryō*, or *Asuka-Kiyomigahara Administrative Code* (Miller, 1979, pg. 29). Again, time and place had to do with the naming of the new law code as at this time the seat of the ruling family had moved from the Ōmi province to that of Kiyomigahara in the Asuka region in the south of Yamato province. The *Ōmi Code* and the *Asuka-Kiyomigahara Code* were revised and introduced in A.D. 701 as the *Taihō Ritsu-Ryō*, or the criminal (*ritsu*) and administrative (*ryō*) codes of *Taihō* (Miller, 1979, pg. 22). The *Taihō Ritsu-Ryō*, itself based on China law doctrine, was

a central force of influence on the life and times of the Nara era.

While the original Taihō Ritsu-Ryō is no longer extant, a further revision of the law code completed in A.D. 718 and called the *Yōrō-Ryō*, or *Yōrō Code*, remains preserved nearly in its entirety in a commentary on the codes known as *Ryō-No-Gige* (Miller, 1979, pg. 33). In the latter half of the Nara era, the original *Yōrō* codes were given an update and officially annotated in “Notes on the Code” or *Ryō-No-Gige* which was published in A.D. 833 (Miller, 1979, Pg. 38). Contained within the *Yōrō Code* (養老令全 30 編), are the laws that specifically cover the military, known as the *Gunbō-Ryō*, or *Military Code*, found in Volume 5, Section 17 (Miller, 1979, pg. 35), and that of *Gen-Shi-Ryō*, or *Barriers and Markets Code*, found in Volume 9, Section 27 (Miller, 1979, pg. 35). The *Military Code* includes 76 Articles (軍防令全 76 条) describing the rules and regulations governing the conscription and use of a military. The *Barriers and Markets Code* includes 20 Articles (関市令全 20 条) describing the specific operation and the rules and regulations of the main barrier stations and the market places located adjacent to or within the barriers themselves (“*Yōrō Code*”, 2017). As documented in the “Notes on the Code”, there were three main fortified barrier stations, one established in Ise province, *Ise-Kuni no Suzuka Seki*, another in the Mino province, *Mino-Kuni no Fuwa Seki*, and one in Echizen province, called *Echizen-Kuni no Arachi Seki* (Miller, 1979, pgs. 239, 240).

### 3. Further Research: Personal Interviews / Site Visit

For the following historical research, in-depth interviewing of two key individuals, including a site visit together with one of the participants, was conducted in order to further investigate the topic and collect related information. The two participants, Mr. Shimamura Akihiko, and Mr. Morikawa Yukio, have extensive experience in both Japanese historical studies and archaeology and are considered experts on the topic of the ancient barrier system. All discussions were conducted in Japanese and while somewhat informal in style a list of questions was prepared to not only organize, but also help in comparing and contrasting information regarding the topic.

The first participant, Mr. Shimamura Akihiko, was until December 2018, the director of the Historic Cultural Properties Division of Kameyama City, Mie prefecture, Japan. His major responsibilities included overseeing the conservation and restoration of *Seki-Juku 東海道五十三次の関宿* an Edo era (A.D. 1603-1868) post-station town registered as an

important traditional building conservation area by the Japanese government. For eight years from 2006-2014, he was directly involved in the excavations of the Suzuka no Seki earthen wall fortifications. Mr. Shimamura was the central figure in the city's effort to have the archaeological ruins of Suzuka no Seki designated a national historic property, although, as of this writing the site has yet to receive such classification. Our discussions took place over three sessions at his office in the Kameyama City Hall and totaled around eight hours. The dates were February 24<sup>th</sup>, 2017, August 15<sup>th</sup>, 2017 and January 26<sup>th</sup>, 2018.

The second participant, Mr. Morikawa Yukio, preceded Mr. Shimamura as head of the Historic Cultural Properties Division of Kameyama City, and prior to this work was a research team member for seventeen years at Mie Prefecture's Cultural Properties Research Center. Among his many research activities, he was personally involved in the excavations of the Jōmon era site in Matsuzaka city known as Ten Paku Iseki 天白遺跡 dating from the Kōki era of Japan's prehistorical antiquity (c. 2000 – 1000 B.C.), which in turn received formal designation as a national historic property. It was Mr. Morikawa who made the initial discovery of the earthen wall remains of Suzuka no Seki in 2005. And from 2005 to 2007 he directed the initial excavations of the Suzuka no Seki site. Our first discussion took place on January 31<sup>st</sup>, 2018. A follow-up discussion including a site visit together to the remains of the Suzuka no Seki took place on February 24<sup>th</sup>, 2018. Our discussions and site visit totaled around ten hours.

**Question One:** *How were the ancient earthen walls of Suzuka no Seki first discovered?*

Mr. Shimamura recalled that in 2005, Mr. Morikawa Yukio, who was at that time the director of the Cultural Properties Division of Kameyama city, found what appeared to be pieces of ancient roof tiles in a wooded area at the southwestern edge of Kannon Mountain 観音山 located in the town of Seki (see pictures 2, 3). After the tiles were confirmed to be from the ancient time period, principle excavations were begun in 2006 in coordination with Kameyama city, Seki town and a team from the prefectural university, Mie University. The initial excavations eventually revealed three clearly defined layers, or sub-sections of the ancient wall, that in its entirety formed a section of the wall shaped like an “L”. This “L” section was the elbow curve of the northern portion of the wall and incorporated the naturally elevated base of the mountain as its deepest and subsequently largest sub-section. Situated ten meters above this “L” section sits a large natural boulder outcrop extending just out over the tree line creating an advantageous lookout point over the valley below.

**Question Two:** *Could you describe how you first discovered the ancient walls of Suzuka no Seki?*

Mr. Morikawa began with the point that he had known about the ancient barrier station Suzuka no Seki because of people, most notably, Professor Hachiga Susumu (1999), who had spent time researching and trying to locate its remains. However, it wasn't until Mr. Morikawa had moved from the Mie Prefectural Cultural Properties Research Center to the Cultural Properties Division of Kameyama city in 2005, that he had taken a direct interest in the subject. Although he was born and raised in the town of Seki, not far from the proposed area of the ancient walls, it was not until all these years later that he would try to search for the remains. He set out in and around the hills and wooded mountain areas where the walls were thought to have been located searching for clues to its whereabouts. One of his major discoveries prior to his finding ancient tile fragments indicating segments of a wall, was a forest pathway confirmed to be that of the original Tōkaidō pathway that once ran from the capital of ancient Nara to Suzuka no Seki during the 7<sup>th</sup> and 8<sup>th</sup> centuries A.D. After exiting the forest and crossing over the Suzuka River, the original Tōkaidō pathway lead travelers up to the west gate entrance at Suzuka no Seki.

According to Mr. Morikawa, based on personal research and information from historical chronicles of the time period, Professor Hachiga (1999) had concluded that the ancient barrier station of Suzuka no Seki, was not only the largest of the three ancient barriers but that it had actually been divided into an eastern half 東城 and a western half 西城. Furthermore, as Professor Hachiga surmised, upon entering the barrier station from the west, the original Tōkaidō soon forked either continuing east-northeastwards toward the Ise Provincial Government Headquarters 伊勢国府 (Ise no Kuni Kokufu) or southwards along an old river bisecting with the Suzuka River at the site of the ancient horse-post stop called *Furumaya* 古馬屋. It was here that a connecting road, the Ise Pilgrimage Road 伊勢街道 took a turn south to Saigu 齋宮 and onto the Ise Shrine region.

As Mr. Morikawa explained, in fact, there was an old river known as *Otoro-gawa* that had run directly through the barrier station, essentially cutting the area into two halves. Today, this river having been reduced to more or less a stream, does not provide a clear answer, but according to Mr. Morikawa, two pieces of information helped confirmed Professor Hachiga's conclusion. First of all, in the early Edo era (beginning of the 17 century A.D.) when the Tokugawa Shogunate 徳川幕府 (Tokugawa *bakufu*) revised the ancient horse-post system, the settlement of Seki, having long ago been the ancient barrier station of Suzuka no Seki,

was remade into a post town for the new Tōkaidō thoroughfare linking Edo (present-day capital Tokyo) with the then capital city of Kyoto. The problem was that the Otoro River intersected with the proposed road. So, and according to documentation of that time period, the Tokugawa Shogunate landfilled that section of the Otoro River to extend the road through the settlement thus connecting the two halves. Another crucial find was one that Mr. Morikawa personally oversaw. In this same area where the river had been landfilled some four hundred years prior, an old home was being torn down in order to build a new one. Obtaining permission to make an archaeological dig to search for any sign of the ancient period prior to the landfill in the early Edo age, Mr. Morikawa's archaeological hunch uncovered some positively historical clues. Reaching some 1.5 meters down, ash and fragments of pottery confirmed to be from the Muromachi era (A.D. 1336-1573) were found. The earthen formations also confirmed the existence of a large river bed that was indeed the remnants of the old Otoro River that had once flowed directly through this area.

These two major finds helped Mr. Morikawa understand in more conclusive detail that the site of the ancient barrier station of Suzuka no Seki was quite different in geographical relation to its present self, the old Edo era post town of Seki. From the Edo era and the establishment of the Tōkaidō thoroughfare, the post town of Seki has consisted of three main neighborhoods, that of *Shinjo* 新所, *Naka-machi* 中町 and *Kozaki* 木崎. Prior to the Edo era, the main central area of Naka-machi did not exist, only the western half (Shinjo) and the eastern half (Kozaki). In essence, the old river provided a separation between these two areas thus confirming the ideas of Professor Hachiga that the ancient barrier station of Suzuka no Seki was in two halves. More importantly for Mr. Morikawa, this revelation gave him the idea to take a much closer look at the stream and its formations that was once the central Otoro River. He began by following the stream as it winds itself up into the northwestern hills to its origin at the base of Kannon Mountain. The old river bed led him to what appeared to be a series of unnatural earthen formations in the heavily forested area at the base of Kannon Mountain. Soon searching and sifting around these land formations he came across various small fragments of very old tiles that confirmed something ancient had once existed there. The tiles were then properly examined and confirmed to be of the ancient *nunomegawara* style, a style of tile making common in the ancient Nara and Heian time periods.

**Question Three:** *How did you know that these tiles were from the seventh or eighth century A.D.?*

Mr. Morikawa explained that in the ancient period, the flat roof 平瓦 *hiragawara* and rounded roof 丸瓦 *marugawara* tiles were made by using wet cloth, in a technique called *nunomegawara* 布目瓦 or wet-cloth tile style (see picture 4). When this technique was applied, the tiles always had lines running on the surface indicating the grooves that the wet cloth created during the wet and dry processing. Furthermore, the temperature that was obtained to bake the clay was not as high as in later times, so the middle section of the tile would retain its gray-like color while the inner and outer sides of the tile would be earth toned, beige-like in coloration. Mr. Morikawa further noted that a fragment of tile from this time period in comparison with a stone of similar size would be far lighter. It was this fact that made it easier for him in detecting possible tile fragments when sifting through the dirt.

The *nunomegawara* style indicates an ancient period style of tile processing that continued at least into the Heian period (A.D. 794-1185). Mr. Morikawa explained that it wasn't until a circular symbol tile representing the imperial mark of Emperor Shōmu 重圈文軒丸瓦 was unearthed from the aforementioned "L" section, that the various roof tile fragments could be authenticated as Nara era tiles, indicating an A.D. 724-749 time frame. Mr. Morikawa noted that the ancient Ise Provincial Government Headquarters 伊勢国府 (Ise no Kuni Kokufu) located a short distance from the Suzuka no Seki Barrier Station also had these Emperor Shōmu symbol tiles. Records indicate that the Ise Provincial Government Headquarters was constructed in approximately A.D. 742.

According to the information from Suzuka City's Archaeological Museum (2018), following the establishment of the first set of provinces in the middle seventh century A.D., the creation of provincial government headquarters provided for a localized political center of activity that included branches for the judiciary, military and religious rights. The ancient Ise Provincial Government Headquarters is believed to have been erected between the years A.D. 741-744. In the year A.D. 789, it was recorded that a great famine struck Ise province. No further major activities are listed for the government headquarters from this year after.

In 1957, a team led by Kyoto University Professor Fujioka Kenjirō begun the first survey of the area based on historical geographic information. At this time, the research team uncovered a number of roof tiles believed to have been from the military barracks that were a part of the structure used to house the army corps. It was not until 1992 though, that principle excavations were begun under the supervision of the Suzuka City Board of

Education. And in 2002, the site was officially designated a national historic site of Japanese antiquity. In total, three major area sites have been excavated covering a total of 7.4 hectares or 18.3 acres.

Amongst the several important discoveries, including the circular symbol tiles designating the era of Shōmu's reign, the central facility of the government headquarters was found to have been enclosed by a fence that had a central gate located in the south and covered an area running 80 meters east to west and 110 meters north to south. Inside there was a rectangular main gallery hall with oblong sub halls on either side. A rectangular main shrine was located just behind the main gallery. All the buildings featured tiled roofs with post beam construction. Confirming the initial 1957 survey, a great number of roof tiles dating from the middle Nara era (A.D. 729-741) were uncovered in 1997. The vast number of roof tiles found indicated an unusually large building structure that most likely was the military barracks. It is theorized that due to the condition and placement of the remains that perhaps a major natural disaster destroyed the complex.

Mr. Morikawa senses the strong possibility that at the time of the Suzuka no Seki fortified barrier station, the military corps were actually stationed nearby at the Ise Provincial Government Headquarters. Mr. Shimamura commented that operational staff may have also been stationed at the Ise Provincial Government Headquarters and thus manned the Suzuka no Seki barrier station during regular operational hours. During an emergency situation, most likely the barrier station was staffed and fortified with soldiers on a full-time basis, while remaining closed to travelers and market activities.

**Question Four:** *What about the size of the Suzuka no Seki barrier fortifications?*

According to Mr. Shimamura, excavations have revealed piles of roof tiles lying some 3 ½ meters across wall sections from other piles of roof tiles. Considering that the top section had long disintegrated and left the remains of tiles on either side of the base wall, the remains of the base wall itself suggest an immense structure. It is highly probable that in some areas the walls may have risen to ten meters.

Mr. Shimamura stated that current excavations of the Suzuka no Seki barrier fortifications indicate a wall stretching some 600 meters from the base of Kannonyama (Kannon Mountain) across the valley and ending near to the elbow curve of the Suzuka River. He explained that only remnants of walls that appear to have run as one long wall have been unearthed. Remnants of *Fuwa no Seki* found in the 1970s (1974-1977) in the town of

present-day Sekigahara in Gifu prefecture revealed earthen fortifications measuring 460 meters for the northern wall, 432 meters for the eastern wall and 112 meters for the southern wall. In this location, the Fujiko River provided a natural embankment which most likely created the western half of the fortifications. As Mr. Shimamura detailed, the Fuwa no Seki fortification design resembled more of a large enclosure than what is believed to have existed at Suzuka no Seki. Mr. Morikawa explained that the Suzuka no Seki barrier fortifications most likely included this one large (600 meters long wall) as the natural characteristics of the area including Kannon Mountain 漢音山 providing a northern barrier and Shiro Mountain 城山 a southern barrier. In other words, according to Mr. Morikawa, it appears likely that Suzuka no Seki did not have additional walls nor was it designed as an enclosure similar to that of Fuwa no Seki.

**Question Five:** *Events from the Jinshin War of A.D. 672 made first mention of the barrier at Suzuka. What was the Jinshin War and what, if any role, did the Suzuka no Seki barrier have in this conflict?*

As Mr. Shimamura explained, at this time in early Japan, the reigning emperor by the name of Tenji had fallen ill and his son, the prince Ōtomo, was set to take his place on the throne. It so happened that the ailing Emperor Tenji had a younger brother by the name of prince Ōama. It is known that the younger brother had actually refused to ascend the throne preferring to become a Buddhist monk in the area of Yoshino in the far southern part of Yamato province, present-day Nara prefecture. In fact, as it turned out, the younger brother, Ōama, had misled his older brother, the ailing Emperor Tenji, while carefully concocting plans for his own power grab. Upon the passing of his father, the Emperor Tenji in January of A.D. 672, son Ōtomo became the new emperor with a new name, Kōbun. His reign would last an ill-fated eight short months.

While under disguise and living the life of a hermit monk in Yoshino, the former crown prince Ōama began to maneuver for the throne currently occupied by his half-nephew, the new crowned Emperor Kōbun. In a journey documented in the *Chronicles of Japan* 日本書紀 (Aston. 1972), prince Ōama traveled with a small gathering of loyalists up and through southern Yamato province and through to Iga province. Along the way he managed in gathering an assortment of followers dedicated to his mission of securing the throne for himself. According to Mr. Shimamura at the time of his arrival at the Suzuka barrier in Ise province, he was met by a certain number of members of the imperial court who secretly supported his ideas. At this point, it is mentioned in the historical chronicle that some five

hundred supporters had joined him.

With his group of loyalists, the dutiful brother prince-turned Buddhist monk-turned imperial throne seeker set his sights toward the province of Mino situated several days journey north of the Suzuka barrier (situated on the border of Iga & Ise provinces). Arriving at Mino province, prince Ōama had now assembled a force of at least three thousand and would for the first time, engage in combat with the forces of his adversary the Emperor Kōbun. As the historical chronicle notes, a series of battles were waged during the late summer months of A.D 672. In a major battle in Mino province fought in the area of what is the present-day town of Sekigahara, the historic chronicles describe the successful blockage of the road to Fuwa. Mr. Shimamura commented that although the Fuwa no Seki barrier is not specifically mentioned, the fact that the Fuwa Road was a key strategic site gives some notion that the barrier station of Fuwa no Seki may have been in existence at this time.

Mr. Morikawa pointed out though that since the historical chronicles were written nearly fifty years after events of the Jinshin War, it cannot be known for certain that the great barrier fortified stations actually existed at the time of the Jinshin War. In his assessment of the events of the Jinshin War, while the former prince Ōama did reach Ise province with his group of loyalists, the Suzuka no Seki barrier was not yet in existence. More probable, as Mr. Morikawa explained, is that he and his men went about constructing a crude barrier to help aid in securing the Iga province/Ise province border areas. His summation referenced the natural landscapes of the area that provided excellent lookouts over the valley and the natural mountain passes. In other words, the area provided a base of operation for prince Ōama's forces and from there, the former prince sought to shore up his support in the Mino province where, according to Mr. Morikawa, he was held in great esteem quickly gathering a large force of supporters.

Sighting the archaeological record to further support his theory, Mr. Morikawa explained that the archaeological remains of the Suzuka no Seki's earthen wall fortifications point strongly towards the probability that they were redesigned and built up significantly in preparation for the visit of Emperor Shōmu during the month of November in the year A.D. 740. Until this time, according to Mr. Morikawa, the barrier walls of Suzuka no Seki were probably no more than reinforced earthen molds atop natural landforms (see pictures 5, 6).

Unlike a typical wall of the period that would encircle a temple for example, the walls of Suzuka no Seki were not constructed from wooden molds but at first the natural landform

itself was fixed with pounded earth to form a base called *dorui* 土塁 . The second layer included working with the natural base using a mixed earth and rock method or *dobei* 土塀. Mr. Morikawa pointed out that up until the proposed visit of Emperor Shōmu the barrier fortifications were most likely in this state of condition.

Therefore, in preparation for the royal visit, Mr. Morikawa theorizes that the earthen wall fortifications were significantly improved and furthermore that a top wall section was added giving added height and an air of regal authority. As Mr. Morikawa explained, this top section was in the *tsuji-bei* style 築地塀 typical of the grand fences that encircled the most important properties of antiquity (see picture 7). Two discoveries point to this probability. First of all, the aforementioned Emperor Shōmu circular symbol tile that would have been affixed to the tile roof section was uncovered in the ruins. Another important point is that while nothing of the top section remains, the fragmented roof tiles were found lying mostly along the top left and right sides of the second layer of earthen wall. Morikawa explained that over time, the thinner top wall section with its tiled roof would have eroded and the tiles would therefore have fallen to either side.

According to information from the Yokkaichi City Board of Education Social Education Section (2018), when Emperor Shōmu embarked on his royal tour “east of the Seki barriers” [暫く関東に住かん] in A.D. 740, it was, in fact, being carried out during a period of great uncertainty. Some five years prior, in A.D. 735, a smallpox epidemic ravaged the populations in the far western territories and by A.D. 737 had spread up into the central region of the Kinai domain. Estimates range from a quarter to a third of all people died as a result of the highly infectious disease. In response, the devout Buddhist leader Emperor Shōmu ordered even more construction of religious images, temples to house them and any number of ceremonies to be performed. Not only were human resources exploited by this effort, but so to that of extensive natural resources needed for these grand religious projects. Suzuka City’s Archaeological Museum points out that a host of natural calamities, including a major earthquake in A.D. 734, and devastating famines due to significant crop failures, were recurrent themes throughout the era.

While Emperor Shōmu survived the plague, several leading figures within the imperial government did not, including top court officials from the adversarial but highly influential Fujiwara clan. At this time, an important member of the Fujiwara clan, Fujiwara no Hirotsuga, who was governor of the central Yamato province, was removed from his position

and sent to the far western province of Chikuzen, present-day Fukuoka prefecture. It was here in A.D. 740, on the border areas separating Chikuzen province and Buzen province, that Hirotsuga was to initiate an ultimately unsuccessful war with imperial forces- known as the Fujiwara no Hirotsuga War.

Mr. Morikawa explained that while disease and conflicts raged, Emperor Shōmu was in effect making a tour in A.D. 740, to reassure the populace and shore up political support in the central domain. As it turned out, the royal tour was just the beginning of what became an extended hiatus from the capital, as Emperor Shōmu remained away from the capital at Nara for some five years until returning for good in A.D. 745. During this time period he established a satellite capital just north of Nara called Kuni-kyo 恭仁京, another later at Shigaraki in Omi province 紫香楽宮, and finally settled for a time at the former capital of Naniwa 難波宮 in A.D. 744.

**Question Six:** *In A.D. 789, the operation of the three main fortified barrier stations, or San Gen (三関) was effectively ended. What was the reason (s) for this? What was the situation like at this time?*

When the three main barrier stations were in regular operation it was known as *kai-gen* 開関. In the event of the emperor or empress's illness, or in the case of his or her death, the three main barrier stations were closed indefinitely in a period known as *ko-gen* 固関. While natural disasters also initiated temporary closure, it was especially during the times of imperial succession that brought about the urgent need for closing and securing the main barrier stations. This early form of martial law within the Yamato domain was increasingly necessary as the probability was high that a coups d'état or a civil war could break out when the most powerful leadership positions were in flux. Mr. Shimamura and Mr. Morikawa both commented that while the historical record indicated that the main fortified barrier station system was ended in A.D. 789, it is unclear as to the specific reason (s) why, and also, if the barriers were completely abandoned. It is known, however, that the barriers remained closed, under the status of *ko-gen* 固関, until at least the first half of the Heian period (A.D. 794-1185). No further records exist, if they ever did, of the operation and/or decommissioning of the San-Gen system from this time forward.

Furthermore, as Mr. Shimamura explained, that amongst the various theories, it seems likely that as stability took hold within the central Kinai domain and with the subsequent drive for expansion into the eastern and far eastern territories, that the San-Gen system lost

its primary purpose. Mr. Morikawa cautioned though that the expansion into the eastern frontier was not in a retaliatory sense, in other words, the situation at that time was not entirely hostile. Furthermore, he believes, the development of the eastern and far-eastern frontiers was not a series of battles, or anything, like a great civil war. His opinion sites the archaeological evidence that at both barrier stations, Fuwa no Seki and Suzuka no Seki, the barrier walls and station of operations lay opposite (to the east) the major rivers (the Fujiko-gawa & the Suzuka-gawa) and away from the mountain range. As is the case of Suzuka no Seki, the Ise Provincial Government Headquarters (Ise Kokufu) was located further east of the barriers. While both Mr. Shimamura and Mr. Morikawa support the theory that the main fortified barrier stations were established and designed to defend against resistance originating from within the Kinai domain, Mr. Morikawa cautions against its use as a deterrence against threats, if any, coming directly from the eastern or far-eastern frontier plains. In other words, in his assessment, had specific threats originated from the east or far east, Suzuka no Seki barrier station would have been located either on the western side of the Suzuka River or at least the barrier station walls would have been on the eastern side. It is interesting to note though, that in the case of the Fuwa no Seki, while the barrier station was also located east of its major river at the base of the Ibuki Mountain range, its main 432 meters long wall was located on its eastern side.

Mr. Shimamura expressed that by this time, the near eastern lands closest to the main barrier stations did not pose any immediate threat, rather, the major problems lay in the pacification of the indigenous populations scattered throughout the far eastern lands of Dewa and Mutsu (present-day Tōhoku) and beyond into Ezo island. The island known as Ezo, or Ezochi (present-day Hokkaido), was not considered under the Japanese sphere of influence in these times and would remain mostly under indigenous Ainu control up until the Meiji era (A.D. 1868-1912). According to Mr. Shimamura, in the late 8<sup>th</sup> and early 9<sup>th</sup> centuries A.D., indigenous peoples of the northeast, most notably the Ainu populations, clashed with Japanese forces over many years specifically in the lands of Dewa and Mutsu. Mr. Shimamura concluded by adding that it was not difficult to imagine what it was like in these ancient times: with the Sea of Japan protecting its northern and western side, and the Pacific its southern, the main fortified barrier system was the Yamato kingdom's eastern barrier. And by A.D. 789, with the central Kinai domain experiencing a time of relative calm under the rule of Emperor Kammu (A.D. 781-806), the extent of the resistance, however great or

small, was concentrated beyond the Kantō in the far eastern frontier. Thus, the San-Gen system gradually lost its main function as a control mechanism for suppressing an internal revolt turned major civil war much like that of the Jinshin War, some time ago, during the summer months of A.D. 672.

#### 4. Conclusion

The three main fortified barrier stations known as the San-Gen, were individually as well as collectively a border-defense built and maintained to protect the central Kinai domain of the Yamato kingdom. In its initial phase, according to Mr. Morikawa, the locations of Suzuka no Seki and Fuwa no Seki, were little more than a meeting point rather than a strategic base for military-like operations. Later on, these locations were significantly built up and fortified as garrisoned barrier stations with a provincial government headquarters located near to the barrier as at Suzuka no Seki. In this capacity, as both Mr. Morikawa and Mr. Shimamura have commented, in its inception, the San-Gen was devised in order to discourage any adversary of the imperial court from moving outside the Kinai domain in an attempt to gather subjects to mount a strategic counter attack.

As Professor Tateno (2016) writes, in times of relative peace, the barriers played a more nuanced day-to-day role as a buttress against the flow of illegitimate persons from in and outside the border regions. During this time of the Ritsu-Ryō era, the checkpoints and the main barriers were also vital in helping to regulate the citizenry, discourage tax evasion and the misuse of government allocated farm land, amongst other internal controls. The San-Gen barrier stations eventually included not only large earthen wall fortifications, gates and heavily armed soldiers, but a marketplace area where goods, and even slaves, could be bartered and sold. And in times of greatest uncertainty, the barriers were closed indefinitely. What is not clear is whether the San-Gen, considering its strategic location along the historical East/West divide, did in fact, act as a defense against specific threats originating from the eastern and far-eastern regions of Honshu. While neither historical documentation or current archaeological evidence has been found to establish this theory at the San-Gen, what is evidently clear, is that the fortified barrier system of the San-Gen was replicated in critical areas throughout the eastern and far northeastern regions of Honshu. As history notes, the Yamato kingdom had begun to infiltrate these lands establishing a military fortress at Taga (A.D. 724) and later a secondary fortress further north at Isawa (A.D. 802). And

around this same time, the far eastern border line with the barriers of Shirakawa, Nakoso and Nezu was soon established. In other words, while indigenous peoples, most notably the Ainu, may or may not have specifically threatened the central Kinai domain, contrary to this, the early Japanese took the fight to them in the late 8<sup>th</sup> and early 9<sup>th</sup> centuries A.D. with increasingly favorable results.

Until further archaeological evidence is uncovered with the possibility of some remnant of the third fortified barrier, that of Arachi no Seki, finally revealed, the full understanding of the San-Gen history will remain somewhat incomplete. Today, however, we can realize with even greater perspective that the three main fortified barrier stations, collectively called the San-Gen, had a profound impact on the development of the greater Japanese state, helping to stabilize the interior while expanding its borders to eventually include the entire expanse of the eastern half of the main island of Honshu.

#### References

- 八賀晋. (1999). 鈴鹿関、不破関、愛発関 [Suzuka no Seki, Fuwa no Seki, Arachi no Seki]. In K. Mori & T. Kadowaki (Eds.), 旅の古代史 道、橋、関をめぐって. [Traveling to the ancient roads, bridges, and barriers] (pp. 246-259). Tokyo, Japan: Taikōsha, Inc.
- 館野和己. (2016, March 31<sup>st</sup>). 律令にみる関と鈴鹿関 [The Laws and regulations of the barriers and the Suzuka no Seki]. 亀山市、三重県：亀山市市民文化部文化振興局まちなみ文化財室 (Kameyama City: Bureau of Citizen's Cultural Promotion & Historic Cultural Properties Division).
- 森川幸雄 (亀山市教育委員会). (2007, March 31<sup>st</sup>). 鈴鹿関：分布調査から範囲確認調査へ [Suzuka no Seki: From distribution survey to range survey]. 亀山市文化財文化財調査速報 Vol.31 (Kameyama City Cultural Properties Investigation Bulletin, Vol. 31).
- 国史跡伊勢国府跡三重県鈴鹿市長者屋敷遺跡の発掘調査 [National historic site: Ise Kokufu ruins. Excavation survey of Ise Kokufu ruins, Suzuka City, Mie Prefecture]. (2018, February 2<sup>nd</sup>).
- Retrieved from: <http://www.edu.city.suzuka.mie.jp/museum/kokufu-p.pdf>
- 聖武天皇の東国行幸と久留倍官衙遺跡 [The Emperor Shōmu's royal tour of the eastern provinces & the ruins of Kurube Kanga]. (2018, February 2<sup>nd</sup>). Retrieved from: <http://www.city.yokkaichi.mie.jp/kyouiku/kurube/school/shoumutennou.html>
- シンポジウム 鈴鹿関～明きからになった [かたち] ～記録誌 [Symposium on the Suzuka no Seki, An historical record]. (2016, March 31<sup>st</sup>). 亀山市、三重県：亀山市市民文化部文化振興局まちなみ文化財室 (Kameyama City: Bureau of Citizen's Cultural Promotion & Historic Cultural Properties Division).

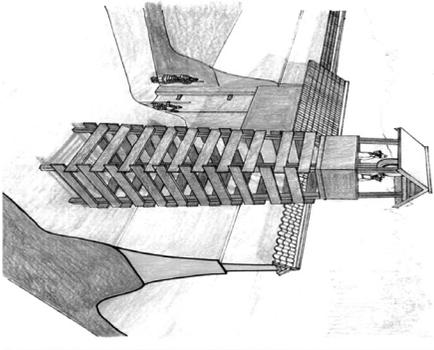
養老令全 30 編：軍防令全 76 条,関市令全 20 条[*The Yōrō Code: Military Code 76 Articles, Barriers and Markets Code 20 Articles*]. (2017, June 1<sup>st</sup>). Retrieved from: <http://www.sol.dti.ne.jp>.

Aston, W. G. (1972). *Nihongi: Chronicles of Japan from earliest times to A.D. 697* (Vols. 1, 2). Tokyo: Charles E. Tuttle Company.

Mass, J. P. (1992). *Antiquity and anachronism in Japanese history*. Stanford, California: Stanford University Press.

Miller, R. J. (1979). *Japan's first bureaucracy: A study of eighth-century government*. Ithaca, New York: Cornell University Library. Retrieved from [www.ceas.library.cornell.edu/cgi/text-idx?c=ceas;idno=ceas012](http://www.ceas.library.cornell.edu/cgi/text-idx?c=ceas;idno=ceas012)

Murdoch, J. (1910). *A History of Japan, Vol. 1: From the origins to the arrival of the Portuguese in 1542 A.D.* Tokyo, Japan: The Asiatic Society of Japan.



**Picture 1:** Fortifications of Ise-Kuni Suzuka no Seki circa 740 s A.D. Original Sketch by Moe Matsunaga.



**Picture 2:** Suzuka no Seki earthen remains. Original location of discovery. Photo by Brian J. Mahoney.

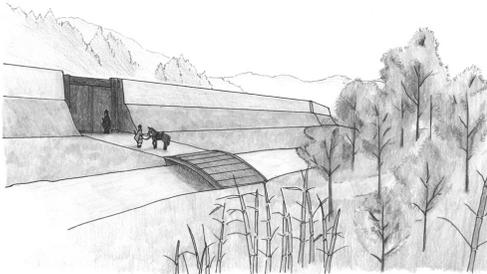


**Picture 3:** Large fragment of Suzuka no Seki tile. Photo by Brian J. Mahoney.

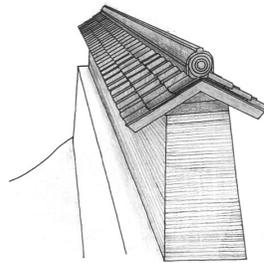


**Picture 4:** Notice indentations from the ancient wet-cloth tile making style. Photo by Brian J. Mahoney.

**Picture 5:** The main section of the 600 meters wall of Suzuka no Seki before A.D.740. Drawing by Moe Matsunaga.



**Picture 6:** The main section of the 600 meters wall after A.D. 740. Notice the additions to upper wall and gate. Drawing by Moe Matsunaga.



**Picture 7:** Upper fence-like portion added to top of Suzuka no Seki's walls from after A.D. 740. Notice the Emperor's circular symbol tile. Drawing by Moe Matsunaga.

# 三重大学国際交流センター紀要 [投稿規定]

2014年3月13日改定  
国際交流センター運営会議

## 1. (名称及び目的)

本紀要の名称は『三重大学国際交流センター紀要』とし、主として三重大学や三重県内の地域社会において実施する国際教育、国際研究、国際交流、語学教育に関わる内容の、研究論文、研究ノート、調査報告、実践報告、書評等を発表する場を提供することを目的とする。

## 2. (編集委員会)

三重大学国際交流センター内に、三重大学国際交流センター紀要編集委員会（以下、編集委員会）を置く。編集委員会は、三重大学国際交流センターの専任教員1名と学部選出の委員1名（いずれも任期1年）によって構成され、内1名を編集委員長とする。編集委員会が国際交流センター紀要の出版に際し、すべての責任を負う。

## 3. (投稿資格)

本紀要への投稿資格は、三重大学に勤務する専任教員あるいは非常勤教員であることを原則とする。但し、編集委員会が特に認めた場合はこの限りではない。

## 4. (原稿規定枚数)

原稿の枚数は、研究論文、研究ノート、調査報告、実践報告については、原則として13枚（1枚＝40字×32行、ただし20%の増減を認める）、書評については3枚以上9枚以内とする。図表、写真等も規定枚数内に含める。

## 5. (使用言語)

本紀要に掲載する研究論文、研究ノート、調査報告、実践報告、書評等は、日本語または英語で執筆したものとする。執筆の詳細は「執筆要領」に別途定める。

#### 6. (原稿論文等の採否)

投稿された原稿については、編集委員会にて以下の審査を行った上で採否（条件付き採択を含む）を決定し、投稿者に通知する。

- (1) 投稿原稿の内容が、本紀要の発刊趣旨、対象領域に合致していること。
- (2) 投稿原稿の構成、文体が紀要にふさわしく、投稿規定に則っていること。
- (3) 未発表であること、論文作成にかかる不正がないことが誓約されていること。

尚、原稿の種別にかかわらず、当該学術領域の専門家による内容評価は行わない。

#### 7. (投稿の受付)

編集委員会は投稿申込みおよび原稿提出の締切を定める。締切日までに提出され、採用された原稿は、原則として当該年度の号に掲載する。

#### 8. (論文等の公開)

掲載された研究論文等は、原則として電子化し、インターネット上でも公開する。

本規定は 2014 年 4 月 1 日より運用を開始する。

## 三重大学国際交流センター紀要 [執筆要領]

2011年6月15日改定

国際交流センター紀要編集委員会

1. 原稿は、A4用紙を使用し、マイクロソフト・ワードで作成する。

[和文の場合] 1頁：一行40字×32行

[英文の場合] 1頁：32行（行数のみ指定・1行の文字数は指定しない）

[ページ余白]（和文・英文とも）上下左右30mm

2. 注は、<sup>(1)</sup><sup>(2)</sup><sup>(3)</sup>のように本文中に通し番号を付け、脚注または後注とする。

3. 引用・参考文献は、著者名又は論文執筆者名、（当該著書刊行年又は論文発表年）、書名または論文名、出版社又は当該論文発表誌名、巻数及び頁数を記す。

【例】山田祐二（1995）『日本論』河人社

山本幸夫（1996）「日本の民間習俗」『〇〇大学紀要』vol.21、pp.30-42.

Riggs, Fred W. 1966) *Thailand: The Modernization of a Bureaucratic Polity*.

Honolulu, HI: East-West Center Press.

Psathas, G. (1986) The organization of directions in interaction, *Word*, 37 (2), pp. 54-66.

4. 原稿は、次の順序で執筆する。

[和文の場合]

- ①論文名と執筆者名（日本語）
- ②論文名と執筆者名（英語又はその他の言語）
- ③要旨（英語又はその他の言語で200語以内）
- ④キーワード（日本語で5語以内）
- ⑤本文
- ⑥後注
- ⑦引用・参考文献

[英文の場合]

- ①論文名と執筆者名（英語）
- ②要旨（日本語で400字以内）
- ③キーワード（英語で5語以内）
- ④本文

⑤後注

⑥引用・参考文献

5. 執筆者は、次のものを期限までに提出する。

①打ち出し原稿（A4用紙に印字）

②原稿の電子ファイルを記録したUSBメモリー・スティック

（USBメモリーには執筆者名を記し、ファイル名は「論文名＋執筆者名」とする）

6. 校正は、執筆者本人が再校まで行う。校正段階での内容の変更は認めない。

# 執筆者一覧

## 三重大学地域人材教育開発機構

福岡昌子 教授

藤田昌志 准教授

松岡知津子 准教授

正路真一 助教

## 三重大学国際交流センター

栗田聡子 准教授

マホニー, ブライアン ジェームス

非常勤講師

## 編 集 後 記

『三重大学国際交流センター紀要』第14号（留学生センター紀要より通巻第21号）をお届け致します。今回は、研究論文1本、実践報告3本、調査報告2本、研究ノートと書評が各1本の合計8本となりました。内容は、日本文化研究や歴史調査、本学が「地域貢献型大学」として「大学の国際化」「グローバル人材育成」理念のもとに注力しているイベントや留学生のインターンシップ事業の実践報告が収められております。産学官連携の重要性はもとより、特筆すべきは、本紀要ではおそらく初めて留学生のインターンシップ事業の実践報告・就職に関する調査報告が含まれている点です。これらは、外国人雇用を促進しながら様々な問題に直面している現在の日本と多くの留学生を抱える国立大学の立ち位置と役割、課題と可能性についての問いでもあります。これらの問いを含め、今後わが国の高等教育機関が、加速するグローバル化と高齢化社会の中で進むべき方向性について思考される際の一助となれば幸いです。

（栗田 聡子）

三重大学国際交流センター紀要 第14号（通巻第21号）

2019年3月31日 印刷

2019年3月31日 発行

編集委員：栗田 聡子（国際交流センター）

松岡 知津子（地域人材教育開発機構）

発行者 三重大学国際交流センター

〒514-8507 三重県津市栗真町屋町 1577

印刷所 伊藤印刷株式会社

〒514-0027 三重県津市大門32-13

TEL 059 (226) 2545 FAX 059 (223) 2862

# BULLETIN

OF

CENTER FOR INTERNATIONAL EDUCATION AND RESEARCH

MIE UNIVERSITY

Vol. 14

---

## Contents

### Articles

政教社系の日本論・中国論 ..... FUJITA Masashi ( 1- 14)

### Research Notes

橋川文三 研究札記

—橋川文三 (1985, 1986) 《橋川文三著作集》以从第1卷到第8卷为中心— … FUJITA Masashi ( 15- 27)

### Book Review

中島岳志著 (2017) 『亚洲主义—从西乡隆盛到石原莞爾—』潮文庫 ..... FUJITA Masashi ( 29- 35)

### Practice Reports

Internship project in Mie for international students: Questionnaire-based research with

international students … SHOJI Shinichi, FUKUOKA Masako, MATSUOKA Chizuko ( 37- 51)

Internship project for companies with international students: Questionnaire-based research

with companies ..... SHOJI Shinichi, FUKUOKA Masako, MATSUOKA Chizuko ( 53- 65)

The potentials of industry-university-government collaboration for globally competent

human resources education—Inviting Mr. Haruaki Deguchi ..... KURITA Satoko ( 67- 83)

### Research Reports

What international students need to know in order to work in Japan: Interview research

with international workers in Mie ..... SHOJI Shinichi, MATSUOKA Chizuko ( 85- 99)

Suzuka no Seki & Ko-Dai-San-Gen ..... Brian James Mahoney (101-118)

Information on Subscription of the Bulletin ..... (119)

Instruction to Contribution ..... (121)

Authors ..... (123)

Postscript by the Editor

---

CENTER FOR INTERNATIONAL EDUCATION AND RESEARCH

MIE UNIVERSITY

2 0 1 9